

聖書に導かれて 南無妙法蓮 華經

1. 激するさとり H28 年度
2. 林さんはじめみなさんへ H27 年 3 月

愛と幸せは権利と
一緒に義務である。

義人
令和 3 年

義人の想い、～真実の愛～

私が神、再臨したイエスであることを信じてほしい。私は自覚と聖書の導きによって生きています。私は世に問いたい。ルサンチマン（恨み）からではなく、人々を弱いとか強いとかに分ける価値観を、もう一度再確認してほしい。後ろからぼっ立て、競争に仕向け、苦しむ人々の姿を見て、悦に入っているのはサタンです。勝つためにはどんな汚いことでもする。負けたものには容赦ない侮辱。そんな世界はもう終わりにしないと いけません。どうか皆様のおおらかな賛意をください。私は私の書きものが世に流布されることが唯一サタンへの対抗手段であると訴えます。真実の愛があるからです。ここに共鳴した善人に神の国、不老不死、永遠の命が約束されるでしょう。

すべての経緯が判明します。神の国は近い。永遠の命を確かなものにするため、愛を確実なものにする。すべてはひとりひとりの信仰にある。私を信じて下さい。私は多くの方々が福音にふれ、幸せになり、神の義、愛に、涙も消え去ってゆくことを望んでいます。欲望から放れ、美しい想いを抱くこと、大事です。不完全な人達も誠意と思いやり、信仰によって神の義を抱き、完全円満な姿、成仏と呼ばれる境涯へと誘われてゆきます。日蓮は久遠元初の仏であり創造主（神）です。つまりイエスと日蓮は同一の存在。復活と成仏、同様

に愛に包まれた暖かい境界にあります。私、梶原義人はその名の通り、煩惱が燃え盛る、火事原野にひとり立つ正義の男です。皆様に真実の信仰を掴んでいただきたい。一人でも多くの人が神の王国の住人になれるよう衷心より願う次第であります。私は三位一体の支持者です。聖霊は固定観念から放れ自由に生きていくことの大切さを体感によって知らせてきます。そして聖書とのダイアローグ（対話）は私にとっての神への自覚を促す基本です。すべての完結が私、義人によってなされるということです。人々の不安を煽るような終末論は展開致しません。ただ何かが生まれ起こるはずで、それだけは確かです。皆様と共に幸福へと歩んでゆきたいです。本物の信仰を抱いて。「子たちよ、誰も惑わされてはならない。彼が義人であると同様に義を行なうものは義人である」（ヨハネの第一の手紙 3章7節）ご覧下さりありがとうございます。「義人の想い」と銘打って、これにて私のあいさつに代えさせて頂きたいと思います。

尚、私の他の作品もPDF（電子書籍）で無料、開放しています。是非、そちらへと宜しく願い申し上げます。この小道が広く大きな愛の街道となり皆さまの幸福に必ずや貢献されると信じて疑いありません。では、いざ、よろしく。

義人

新約聖書

ヨハネの第一の手紙

第3章

わたしたちが神の子とよばれるには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。わたしたち、すでに神の子なのである。
世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。

- 2 愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものになることを知っている。その御姿（みすがた）を見るからである。
- 3 彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあらわれるように自らをきよくする。
- 4 すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である。

- 5 あなたが知っているとおりに、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんら罪がない。
- 6 すべて彼におる者は、罪を犯さない。すべて罪を犯すものは彼を見たこともなく、知ったこともない者である。
- 7 子たちよ。だれにも惑わされてはいけない。彼が義人であると同様に、義を行うのは義人である。

激する士と

まえがき

一生懸命がんばれば成功するという人がいる。安易である。すべてひと様、神仏のおかげである。自らの努力と汗はその1%にしかない。皆、ほめられたくてウズウズしている。だが成功よりも真実の幸福の方が大切なのはみんなどこかで感づいている。夢とは愛をみつけることでなくてはならない。人の信用とは経済的に分析、精査されるところにあるのではなく、ただ神の言葉である聖書を通してその実在を信じているか、またそうした全人格より生まれるものである。すべては善に向かわなければならない。つまり夢の実現である。

母は瞬間湯沸かし器である。その感情の起伏の激しさに影響され年少時代、私は労苦し他人を傷つけた。反省してもしきれない。

若いころ、ある大きな有名なホテルの面接を受けたことがある。担当者は国賓、芸能人、スポーツ選手、高額所得者などが利用するところにプライドを持っていた。一方、地方の系列では旅館みたいなところもあり、その人は「おぞましい、スリッパはぬぎちらかし、宴会は大嫌いだ」と軽蔑と嫌悪の表情で吐き出した。そして「終戦後だったら闇屋で大儲けできて出世できたのに」と野心を浮かべ笑った。私はそんな風には思えない。被災者への同情が先にくるだろう。「ありがとうございました。長男ですから、旅にはやっぱりいけません」と名古屋に赴任することが条件だったことを逆手にとってその場で断った。自らを規範とした男で、私にとってはやりきれない面接担当者であった。

スリッパばらばら最高だ。宴会でスリッパがそろっているなんて、全然愉しくないってことだろう。自分を解放してないということだ。いやな、お目付役はほつといて、互いの唄声に指笛、拍手、声援を送る、これこそ自然で素直で自由で平和な姿である。そこには思いやりに満ちた愛がある。これはそんなことを写した本です。

R会の信者。本尊、釈迦如来の立像をあがめるとき。ある種の恐れを抱いて、脅迫にあっているような情けなく嘆くような表情をしているものがよく見受けられた。特に男性信者に多かった。悪い考えを起こしているからだろうか。そんな心を白塗りに、篤信家を演じる奴がいた。正しいものは何、それが解るまで主体性を保ち続ける。だが強い気持ちはもろく崩れ、日々の仕事をこなすことで目一杯。お布施をし、健康を担保されたように思い込む宗教者、そのことで満足することをよしとする。そこにある錯覚は自分自身にはなんの変革ももたらさず、魂の平安など訪れることはないだろう。寂しい限りだ。

抽象的な愛について。また母のこと、宴会について、R会信者など一見関連性がないようである。このように私の魂のさとりはすべてにアンテナを張ったように蜘蛛の巣状に激するのである。

もくじ

- 1 孤独のマラソンランナー
- 2 放熱への愛
- 3 激するさと
- 4 スミ
- 5 泣いた馬

孤独のマラソンランナー

辻村「きたない学校だなあ。おまけに誰でも入れる商業高校とくらあ。俺の高校生活は灰色だぜ。クラス表がはりだしてあるのか。さてどんな名前のやつがいるかな。ちょっとみてるか。えーと俺は何組かな、あった5組か。横井や竹山はどのクラスだろう。クラスで城川中出身者は俺だけか。んん中田善政、どこかで聞いた名だぞ。あー隣町の夕日ヶ丘小学校にいたやつだ。でもこいつは児童会の副会長をしていてクラスでも1、2の秀才とか、野球の試合にきていた角山という男がいていたんだが。ああ、俺みたいに中学校でガクッと落ちたんじゃないだろうなあ。」

教室

辻村「まわりがみんな馬鹿にみえます」

河合「私も一生懸命やるつもりだが、ここは高校だからな。やめたいやつはいつでもやめていいんだからな」

辻村「いやにトゲトゲした先公だな。いまから入ろうというものにああいうもののいいかたはないとおもうけどな。やっぱり実業学校だ」

河合「おいそこのやつ、何、横みているんだ」

ごそごそ声

河合「何笑っているんだ。ちょっと出てこい」

河合「なにやってるんだ。ええ」

パンパン平手打ちの音

河合「俺をなめてるのか。もういい、入れ」

辻村「びっくりした。俺かと思っただぜ。それにしてもハッキリにしては行き過ぎだね」

辻村「ところで善政はどこにいるんだろうか、人影が邪魔になってみえないしキョロキョロするのも嫌だしなあ」

善政「とにかく受かったのは嬉しいがこの先がおもいやられる」

辻村「入学して5日目だがまだ誰とも話をしたことがないし、先日のテストも悪かったしなあ」

辻村「それにしても善政はなんだ。センスのない黒ぶちメガネに刈り上げ頭。もしかしたら角山にかつがれたかな」

田村「こいつキリギリスみたいな顔しとるぞ」

加藤「本当だ、田舎の天才みたいな顔して」

辻村「善政のやつあんなに馬鹿にされてくやし。くないのかね」

善政「わろてなしゃあない」

辻村「お前、善政だろう。俺を覚えてるか」

善政「いや、どこで会ったかなあ」

辻村「お前、角山知ってるだろう」

善政「それは知っている」

辻村「小学校時代な、あいつらと野球の試合をしてたときお前が来ててな。角山が小学校1の秀才だといっていたんだ」

善政「本当か」

辻村「ああ本当だとも」

辻村「お前も俺の方を見ていたようだからてっきり覚えていてとおもったよ」
善政「俺は近眼がひどいから、そんな遠くは見えないんだ」
辻村「小学校時代1、2番の秀才のお前が、なぜ商業高校などに来たんだ」
善政「だんだん下がりだな」
田村「バーイ、ギリギリス」
善政「おう」
辻村「お前、あんなふうに言われて、腹がたたんのか」
善政「別に」
辻村「俺なら一発くらわせたくなるぜ」
善政「なんか嫌な奴だなあ」
辻村「自転車だろう。一緒に帰ろうぜ」
善政「うん」
辻村「俺もよ、小学校時代は成績が良かったんだぜ。小学校時代はそうは思わなかったんだが、中学校の新入生テストでな10番内に入ったんだよ」
善政「ふ～ん」
辻村「俺はそれからガクと落ちてよ。それでも後がいるなと思って安心していたんだ。そのころは欲がなかったとか甘かったとか、そういうわけでろくでもない商業高校なんかに入學して、なにが80年の歴史だ。誇りをもてだと、冗談じゃないぜ、古けりゃいいもんでもないだろう。学校の中身はカスばかりじゃないか。お前はと思う」

善政「どうかな、わからんな」
辻村「チェッ、はっきりしねえなあ」
辻村「おお青になった」
善政「んん」
辻村「どうしたんだよ、モタモタと」
トラックが爆音をあげてゆく

辻村「ゴホッゴホッきたねえなペッペッ。こんな中に
いたら喉がくさるよ。ああうがいしたいなあ」
善政「じゃあなあ」
辻村「お前んところはいいよなあ、近くて。俺んところ
はもう一畝あるもんなあ」
善政「辻村ってやつ、なんか愚痴っぽくてしつこいや
つだなあ」

(善政の家)

善政の父「善政、お前にマラソンにでてくれないかと
言ってきておられるぞ」
善政「いま、行くよ」
団長「あっ善政君、今週の日曜日にね、地区対抗のマ
ラソン大会がありましてね。君にぜひ出てもら
いたいんですよ。どうかひとつ頼みますよ」
父親「でも善政は運動部にも入っていないし、マラソ
ンでしたら奥村君とか田口君とか、もっといい
人がたくさんいるんじゃないですかね」
団長「ああ、でもね。みんな部がいそがしくてダメだ
といわれるもんでね。それにお宅の善政君がマ

ラソンが強いと聞いたもんで。ほかに善政君の同級生の矢郷君も走られるしね。どうかひとつ頼み、お願いできませんかね」

父親「どうする善政」

善政「僕、走ってもいいよ」

父親「大丈夫かお前」

善政「大丈夫だよ。僕、走ります」

団長「あっそうですか。そうしてもらうとこちらも助かりますよ。では明日から毎晩、隣町まで練習に走りますから、公園前に8時頃まで集まってください」

(朝、路上)

辻村「ハッハッハッよう善政」

善政「おう」

辻村「俺の自転車、油がないのかなあ、重くて、重くて」

善政「あ、お前、来週の日曜日マラソン大会があるの、知ってるか」

辻村「ああ知ってるけど」

善政「今度、出るようになったんだ」

辻村「お前がか」

善政「そうだよ」

辻村「うそだよなあ。こんな今にもぶったおれそうなやつが」

善政「それで毎晩、おまえんこの、町まで走ってる

んだ。俺マラソンてゆうのは、あんがい好きなんだ」
辻村「ふ～ん。そうか。ペッああ、それにしてもこの道は汚いなあ。どうにかならんもんかなあ」

(運動場)

河合「よし今日は1500メートルだ。四列に並んでいるか。後列のものと組んでやれ」
辻村「なにさせるんだ、バカ先公。ああだるい」
善政「そうでもないよ」
辻村「こんなもの好きなやつのがわからんよ」
辻村「じゃ俺から走るよ、こんなもの早く終わって休んでいたほうがいい」
河合「ヨーイスタート」
辻村「ああひどい。馬鹿野郎、ハハッなにさせるんだ
本当に、アッまた俺を抜きやがったこの野郎、
へへッハッハッああちょっと力入れて走ったら辛くなってきやがったぜ。へへッ」
河合「7分35秒」
辻村「ハアハアハア」
善政「7分35秒だったよ」
辻村「ああそうか。それにしてもひどいだろう。尻から3番目だぜ。まいったなあ。これで体育は赤点だあ」
善政「俺はこの連中の次だから」
辻村「ああ」
善政「今度は俺の番だからたのむぞ」

辻村「しつこいなあ。どうせたいしたことないくせに」
河合「ヨーイスタート」
酒井「さすが陸上部、片淵のやつ飛び抜けて走っているぜ」
加藤「それよりみろよ、2位の水村、ピッタリついているのは中田のキリギリスだ」
田村「本当だ。1位陸上部、2位野球部、3位書道部とくらあ」
辻村「善政、お前がこんなに速いとは知らなかったぜ」
河合「よーし6分2秒」
加藤「中田、お前すごいんだなあ総合4位だぜ」
辻村「善政、お前がこんなに速いとはなあ」
善政「それほどでもないよ。体力がやはりないんだなあ。さすがに運動部は強いよ。俺は最後ペースが落ちたけれども、やつらはそのままつっぱしりやがったからなあ」
西野「片淵さすが陸上部だなあ」
片淵「俺なんか、たいしたことないよ。まだおそいほうさ。陸上部はこんなもんじゃないぜ」
善政「聞いたか。俺なんか速いうちになんかはいらないよ」
辻村「そんなこといったら、なにか俺すごくみじめだなあ」
辻村「明日マラソン大会だろう。どのコース走るんだ」
善政「オトヤマの坂を降りてきて、ナガソをとおって、おまえんちの前の役場までだ」
辻村「坂を登るよりきつくないだろう。まあがんばれよ」

善政「まあとにかく走ってみるさ」

その明後日

辻村「どうだった善政」

善政「お前来てなかったのか」

辻村「俺がいったらもう、終わっていたらしかったぜ」

善政「俺までは3位だったがナガソのへんたいでハヤツキのやつに越されてしまったんだ。ラストを走った俺の同級生の矢郷ってやつが再びハヤツキのやつを抜いて結局3位だったよ」

辻村「まあまあじゃないか。俺たちの町はどうだった、また最下位か」

善政「いやビリから2位じゃなかったかな、確かびりはウサキじゃなかったか」

辻村「そうか」

その日の放課後、二人をもっと親密にする出来事が起こった

辻村「あれ、タイヤがパンクしてやがる。おかしいなあ」

善政「どうしたんだい。早くかえろうぜ」

辻村「タイヤがパンクしてんだよ」

善政「本当か。で、どうするつもりなんだ」

辻村「さあなあ」

善政「俺、先に行くぜ。観たいテレビがあるんだ」

辻村「タイガーマスクか」

善政「ああ」
辻村「まだ四時じゃないか」
善政「チェああ」
辻村「また病気がはじまった。お前はときどきおかしくなるんだ。ひとがなにを言ってもまるで何をやっているのか分からない態度をとるんだ。悪いが金を貸してくれないか。パンクをなおそうにも金がないんだ」
善政「俺もないさ」
辻村「んん。どうしようかなあ」
善政「ん」
辻村「さっきからお前、何トゲトゲしてるんだ。ひとが困っているのに。少しくらい待てないのか。善政、お前の荷台の上乗っけていってくれないか」
善政「自転車の荷台へ」
辻村「今日はここへパンクした自転車を置いていって、あした金を持ってきてパンクをなおそうと思うんだ。もちろんお前の家まででいいよ」
善政「だめだよ。俺のタイヤ空気がないんだ。ツケにしといてもらえ」
辻村「どうしても嫌か」
善政「そんなこと、なんで俺が」
辻村「馬鹿野郎」

パンチの音

善政「アツツツツ」

善政「待てよ、辻村、待てよ、乗せてってやるよ」
辻村「いいよ。自転車ころがして帰るよ」
善政「乗ってけよ」
辻村「いいよ」
善政「じゃあ俺も一緒にころがして行くよ」
辻村「善政よ。お前は、おかしなやつだなあ。ついさつきケンカしたやつに、なんでそんな行動できるんだ」
善政「もしこのままお互いに別れてしまったら、あとには嫌なわだかまりがずっと尾をひくだろ、それが俺には嫌なんだ」
辻村「そうだな。俺はいままでお前のようなやつに出会ったことはなかったぜ。ほった痛まないか」
善政「それより頭に響いたぜ。ガーンとな。こんなのくらったの初めてだよ」
辻村「メガネは大丈夫か」
善政「ああ、なんとかな」
辻村「俺はお前を殴ってからずっと考えていたんだが、俺はいつだってちょっとしたことに腹を立てるんだ。気に入らない相手がいると必ず心の中で殴れ、殴れと叫んでいるんだ。俺も殴りたい。だがどうしてもそこまで止まりだ。そして今日お前を殴った。だがそれはお前が俺より弱そうに見えたからだ俺は思う。それも周りに人がいなかったからだ。周りに人が大勢いたとしたら殴らなかったろう。それはさしずめ弱いものの同胞意識といったところだろうなあ。もし俺より強そうなやつが相手だとしたら、たぶん俺

は先には手を出せないだろう。もし周りに大勢の人間がいたら俺はえらい恥をかくことになる。そう考えるととてもじゃないが弱そうなやつも殴れない。そして俺の心は今度はいかなるときでも、たとえ自分より強そうなやつでも後へひくなど叫ぶ。そして相手を先に殴ることが、まるで強さの象徴のように思えてくる。そうするとちょっとしたことで自分に対しての冒涇に思われてくる。腹が立ってくる。殴れ、殴れと心が叫ぶ、そしてお前を殴った。その時ささやかな満足感が起こったが、その直後に今度は逆の感情が起こった。さっきも言ったとおりのお前は俺からみれば弱いやつだったということだ。だがお前の話を聞いてみて、初めて俺は自分のやってきたことに疑問を持った。俺といままでつき合ってきたやつはきっと嫌だったろうなあ。俺は自分勝手にわがままでそれにやたらとおこりっぽい、そうだと善政」

(間)

善政「まあいくらかな」

辻村「話とはぶが俺たちは一番現代の学生のなかで、特長のない学生に思えてならないんだ。普通科の連中は大学をめざして、ガリ勉、受験地獄と言いつつも目標をもって生きている。また一方実業学校にたむろする不良学生たちも、一見無気力派にみえても、自分たちのカラーをもって

生きている。またスポーツに命をかけ、クラブ活動に励んでいるやつもいる。俺はそれほど能力のあるものもないし、酒屋の店番をする身には時間もない。だから、そのどれをとっても当てはまらない。言ってみればその他で、変に悪びれるわけでもなく、適当に勉強して渡っていくさと割り切ることも出来ずにいる。とにかくすべてに中途半端なんだ」

善政「どうかな」

辻村「お前はそうは思わないのか」

善政「もう家だ。じゃあな」

辻村「俺たちはいったいどうやって生きていけばいいんだ」

(教室)

級長「こんどクラス対抗マラソン大会があります。えっと誰かいいひとがいたら推薦して下さい」

片淵「出たいやつに希望とってみろよ」

田村「出たいやつなんかいるかよ」

河合「この大会は陸上部も出てもいいんだったなあ」

級長「はい」

加藤「なんだ、それだからか。片淵よ、お前は決まりだよ」

河合「片淵、決定だな」

片淵「ええ、やっぱり、こうなると思ったぜ」

河合「あと、水村と亀谷だ」

水村「先生、僕、昨日、足に打球受けてしまって、ち

よって走れないんですけど」
田村「きったねえの、水村」
水村「いや、本当なんだ」
河合「あとひとり、誰がいいかなあ」
善政「先生、僕、走ります」

教室中、ざわめく

河合「中田か、今度は千五百とちがって二十キロだぞ。
大丈夫か。走るがいいけど途中で死んどったで
ちゃ、話にならんぞ」

笑いがおこる

河合「本当に大丈夫か」
善政「はい」
河合「よし、片淵と亀谷と中田に決定する」
田村「おいキリギリスよ。確かにお前が速いことは認
めるよ。しかし今度は二十キロなんだぞ。運動
部でもないお前がもつかよ。お前そこでスイッ
ションと鳴いてろよ、ハハ」
加藤「それにしても河合のやつも薄情だよな。本当に
中田が倒れたらどうするつもりなんだ」
酒井「マラソン大会で商業学校の生徒、死ぬか。こり
ゃまた問題になるぞ」
辻村「善政、お前本当に大丈夫なのか、二十キロなん
だぞ」
善政「俺にもわからない。だけど俺は走らずにはおれ

ないんだ」
辻村「善政」
善政「俺は走る。あつそれから明日からは、お前ひとりで学校へ行ってくれ。俺は明日から毎朝、学校まで走って通学する」

(通学路)

善政が走るハッハッ息を吐きながら

辻村「おい善政、いくらなんでも学校まで一度自転車でいって、カバンを置いて戻ってきてそれから再び走って学校へいくなんてやりすぎじゃないか。おい善政、聞いてるのか、返事ぐらいしろよ。おいどうしたんだよ」

トラックの爆音

辻村「きったねな。本当に、まったくよ。先に行くぞ。遅刻するなよ」

若者が走るよ。街のビルの谷間を、若者の足どりは風を切って行くよ。
みんなが声をかける。おはようさん、君よと。
近所の子供たちも何処へ行くのと聞く脇目もふらずに前だけを見つめて、若者がかけて行く。振り向きもしないで。

自転車がとおつてく。自動車が追いかける。
機関車が横切るよ。飛行機がかすめる。長い
髪の子、花束をほらかざして、野原へ出
かけましょうと肩をたたいて行く。脇目もふ
らずに前だけを見つめて、若者がかけて行く。
振り向きもしないで。

やがて彼は海にでる。裸足になって走ろう。
カモメがとんでいるよ。汽笛も
むせている。
脇目もふらずに前だけを見つめて、若者がか
けて行く。振り向きもしないで

若者はふと立ち止まり、青い空を見上げて、
出会ったひとや花を思い出して
みるの。
いつまで僕は走り続けるの、若者はまた走り
出す。振り向きもしないで

ララララララ ララララ ララララ

(マラソン大会、当日)

田村「おいキリギリスよ。お前、毎日、学校まで走
っていたんだって。本当にお前やる気かよ」
辻村「善政、がんばれよ。それにしてもあの汚い道を
よく走り続けたもんだ」
善政「おかげで俺までペッペッやるくせがついたよ」

辻村「まあ、なんにしてもお前はよくがんばった。それだけでいいじゃないか」

善政「いや、俺は勝つ。それは人間でもなく、二十キロというみちのりでもない」

辻村「自分とでも言いたいのか。カッコイイ」

善政「そういうのが流行っているらしいが、実をいうと自分でも解らないんだ。でも勝ちたいんだ。中身の無い欲かもしれないなあ。俺は走りたいから走るんだから、この勝とうという気持ちは矛盾してるかな」

上野「選手はこちらからこちらに並んで」

辻村「いよいよだな。俺、自転車で後を付いて行くよ」

善政「ああ」

上野「はやく並んで。からだの都合の悪いものはいいかな。折り返し点は港にあるから、そこを回ってこること。からだの具合が悪くなったら、すぐ途中でやめること、いいね」「では、いちについて、ヨーイ、パン」

ガンバレヨ、ガンバレヨ

善政「ハッハッハッハッハッハッ、イチ、二、ハッハッ」

加藤「おい中田すごいぞ。もう少しで折り返し点だというのにいっこうにペースが落ちてないぜ」

辻村「よおし、善政その調子だ」

酒井「それよりみろよ。54人中で20番以内に入っているぜ。みんな運動部の猛者連中だと言うのに」

田村「なあに、いまのうちだけさ。そのうち一番ピリになるさ」
酒井「片淵はどこだ」
加藤「やつより速いやつってのはいるもんだなあ。6位でかろうじて入賞とこだ」
田村「折り返し地点だぞ」

船の汽笛の音

ガンバレヨ ガンバレヨ

辻村「善政、あと10キロだ。がんばるんだ」
善政「ハッハッ辛くなってきたぜ」
田村「そろそろギリギリの野郎もバテてきたぜ」
酒井「おい田村、なぜお前はそう中田をけなすんだ。やつは一生懸命やっているじゃないか」
田村「あの野郎のツラをみていると虫唾が走ってな。死に死にの顔してよ、なんかこうひとを馬鹿にしたところがある」
酒井「俺たちに、そういうことを言う資格はないだろう。やつは自分に挑戦しているんだ。自分の限界に。俺たちにそんなこと一度でもあったか」
加藤「中田がんばれ」
辻村「善政がんばれ。がんばるんだ」
善政「クソ、負けてたまるか。だんだん楽になってきた、みたいだ。どうやら峠は越したかな」
酒井「中田がどんどん前のやつを抜きはじめたぞ」
加藤「10番以内にはいりやがった」

辻村「そうだ。善政、がんばるんだ」
田村「中田がんばれ」
酒井「田村」
田村「中田、負けるなよ」
加藤「片淵との勝負になったぜ。もうゴールだぜ。ど
っちを応援するんだ」
酒井「どっちかが6位で入賞になるぞ」

ガンバレ ガンバレ ガンバレ
(大会、後)

辻村「残念だったな。片淵を抜けば入賞だったのに。
それよりお前をあんなに嫌っていた田村が応
援していたぜ」
善政「田村が」
辻村「どうやら俺は甘えていたようだよ。自分でもっ
ともらしい言い訳をつけて、ひとの目標なんて
学校や周りで決まるものじゃなかったよ。それ
を俺は自分の生き方が定まっていないから、そ
れをいいことに周りもそうだと勝手に決め込
んでいたらしい」
善政「お前の愚痴にも聞こえる話を聞いたとき、俺は
決意したんだ。とにかくなにかをやってやろう
とな。俺はいつかお前にマラソンが好きだと言
ったことがあったなあ。走っているときはなん
て苦しいんだろう。もう絶対に走りたくない
と思うんだが走った後また走りたいと思うんだ。
そういうものってのはマラソンに限らず、みん

な持ってると思うんだ。俺たちがこの先、生きていく人生という道はもっともっと長いだろう。そしていつその道が終わるともしれない不安がいつも付きまとっている。その中でたったひとりで走っていく。だがその道は決して振り返ってはいけない、立ち止まってみてもいい。考えてみてもいいが、また走り続けなくてはならない。マラソンランナーのように、俺たちはみんな孤独のマラソンランナーなんだ。たとえどんなに苦しくても、たとえひとりでも走り続ける。そうだ、俺たちは孤独のマラソンランナーなんだ」

孤独のマラソンランナー

ロッキーを観た。ただのゴロツキじゃないことを証明するため世界戦のリングに立つ。そして最終ラウンドまで戦い通し、キャスターたちの質問を浴びる中「エイドリアン」と愛する人の名を叫び続ける。感動した。アメリカンドリーム、世界チャンピオン云々より、内気でペットショップに勤めていた友人ポーリーの妹、タリアシャイア演ずるエイドリアンを一番大切な宝物のように想っているのが理解できたからだ。ロッキーはシリーズ化し興行的には成功したが、私はこの作品以外は蛇足だったと思う。私達がつくったものは、映画に触発されて、高校生が拙い脚本を用意し、ドラマ化を試みカセットテープに吹き込んだものである。ややスポ根気味で、いまの自分の思想の真逆

の感があるが、反語として検分してみると、確実に現在へとつながる大きな流れがノスタルジーをもって見出すことが出来るのである。高慢でひとを見下す、自信過剰の辻村順造。自尊心も高いが優柔不断なところがある。一方、兼業農家に育った中田善政。自他の区別がわりとはっきりしている。性格は温厚。このふたりが繰り広げる青春友情物語。善政は言う「勝ちたいんだ、距離でもなく、時間でもなく、自分でもなく、もちろん人でもない」。いったい何に。長距離走が終わったあと「俺たちはいつ終わるかもしれない不安を抱え人生という道を、ただひたすらに、たった一人で走る、孤独のマラソンランナーなんだ」善政が力強くも悲しく言い放ちエンドする。現在、思うと彼が勝ったかったのは、当時は判別しなかったが、強いもの弱いもの、組分けするのを目的に、温かさを踏みにじり競い争いへと追い込んで行くなにか。人生に、絶え間なくからまりつき、ぼったてる何かだったのだ。まさしくドンキホーテのごとく、しがらみ、大風車の存在を、身をもって感じていたのである。将来への不安、鬱積した気持ち、結局はその運命の鬼と戦っても破れてしまうだろうと悲観的で、自信のない善政ではあったが、苛酷なうねりに対し挑んでゆく、かすかな思いだけは、失うまいと誓うのである。真由子先生、これは三人の仲間と創ったものです。自分とは何なのか解らず、進路に迷っていたというか、夢も金も名誉の獲得も、なにもかもが不透明でした。願望がなかったと言えば嘘になりますが、ただ、漠然と「人は何故わざわざ苦しいことを選択するのか」と疑問を持って

いました。新入社員、叱られる。自分に非があると責めていたが、上司の叱責は、只ガバナンス(統治)の為、その正直者への欺瞞のからくりは、今、明らかになりました。世間は何を考える。サタンの体制から抜け出すにはどうすべきか。ノルマなき仕事に過ぎた潔癖はいらない。思いやりからのひいきを本当に大切にしないと。そこには苛酷な競争から離れ、悪魔に挑む愛がある。皆、自分が可愛い。だからこそ悲しい。そこに気付かないといけないね。競争の必要性和幸福感が両立しない。うつむき加減。これが善良なる人ではないのか。私は勇気と平和を愛する紳士でいたかった。革新は時宜に委ねればいい。「悪魔に踊らされず、やり過ごせ」神の声である。

放
熱
へ
の
愛

拝啓

田に水が入りキラキラ光っております。

平素は格別のご愛顧をいただき厚くお礼申しあげます。さて、この度、私の製本に際し、あえて浄財と呼ばせていただきます。真心、汗、涙からの御花をくだされ、まことにありがとうございました。私はこれからも精進致し皆様に喜んで頂けるよう、作品を生み出したいと思い、いきり立っております。ご迷惑と感じられても大いなるわがままとご理解され、これからも応援のほど宜しくお願い申し上げます。毅然と申し上げます。私がつむぎ出す、本文は尊く価値のあるものです。私が明かす真実は、人々が愛と自由に満ちて、安穩に暮らすための、汚れのない道標となります。比較、競争から離別し、心温かに生きて行かれることを念じ、信じております。神を愛し、隣人を愛し、戒を破らず、楽しい暮らし。艱難に耐え、悪魔の業に負けず、生活苦を乗り越え、繁雑さに翻弄されず、富、快楽に耽らず、一貫して神の教えをお守りください。聖霊の宮となり、やがて永遠のいのちが訪れるでしょう。[永遠のいのち] きっと素晴らしいものです。皆様方のなかに神の愛（アガペー）が映されるよう衷心より祈っております。また、お立ち寄りになるか、私が顔をお見せしたときは、気軽に声をおかけください。私にとって一番嬉しいことです。笑顔で返しますから。まずはご挨拶まで。

敬具

追伸

浄財の一部は、ネパールの地震で被災された方々に、行き渡るよう配慮いたしました。あしからず。どうもありがとうございました。少し勝手ですが。ごめんなさい。

やはり何者かに帰順、迎合、委託、心酔、追従、お願いし、欲望を叶えてもらおうと信心するひとは多い。ある会に入信している男は言った。一番大切なのは命だと、彼は愛のために十字架についたイエスを外道の愚かしい奴だと罵倒した。私は冷静に、愛という価値観もあってしかりではないのかと語りかけた。電話だったのが良かったのか悪かったのか、「愛などという不確かなものを何故信じることができる」と彼は言い放った。私は追及をしなかったが、彼はいつも、「俺たちは会への活動のために命をかけているのだ」そこに潔さを感じる。ここである。キリストは言う、「福音のためにいのちをすてる、つまり一番大切な愛のためにすべてをかけ生きる、そのことが永遠のいのちを得ることに繋がる」と。では、彼らのいう命とキリストのいう永遠のいのちの関係はどうなのか。永遠のいのちは神の愛に生きた結果にもたらされる果報である。彼らがいう命は、お金がすべてと同様のもの。世俗的価値観のひとつである。それと同次元のものに感じる。彼が難しいメールを送ってきた。「愛というか、慈悲は大事です。でもそれは心に仏界をもたらす南無妙法蓮華経しかありません」。私は送った。「私も

そう思います。つまり、思いやりということでは」彼はそれっきり返してきませんでした。私は仏の教えを人情論にしたのかも。私は基本、慈悲、愛、そんな思いやりが幸福を運んでくると信じています。教祖と名乗る、怪しげな絶対者にお伺いをたてて、盲従することが救いに繋がるわけがない。仏陀も最期に言われた。「自らを灯明とし法を灯明として修行に励みなさい。他を抛り所としてはならない。」つまり主体性を持ち仏陀が解き明かした命の流れ、それを認識し自覚する。それが安楽への確実な道筋であると。「諸行無常 諸法無我 涅槃寂静」。彼には成人した娘ふたりがいる。病気が原因で離婚へ。手元では育てられなかったいきさつがある。「仕事で朝も早く夜も遅い」と心配していた。私の言わんとしたことが少し理解できたのだろうか。「本をもらうよ」私が書いたものを受け取ると言ってくれたのだ。仏、法、僧に帰依する。ここで大切なのは「思いやり、慈悲」に基づいた教えがそこに流れているかである。そしてそこを見極めるのが智慧である。個人崇拜は偶像崇拜と同じで心に愛を確立するにはマイナスになる。そこからはいのちの平等という大事な美徳が見失われ、真理への信心が見えない。そして何処の世界でも、真理（愛）である、いのちが一番重いのは明確なのである。

〔男と女、心よりカラダで慰め合い〕尾崎豊の「愛の消えた街」の一節である。ある男が言う。「酒を飲み交わすなんて時間の無駄だと思うんだけど」パチンコなどギャンブルが大好き。肉欲と金銭欲。人々を苦し

める要因となる。しかしどうだろう。[嘘でもだかれりゃあたたかい] そんな演歌が聞こえてくる。錯覚の愛でもつかんでいたい。肌をよせあう。確かにひとに恋し愛するとき美しい喜びとともに幸せは訪れるのかもしれない。だが生活が混乱し淋しさをうめるため「カラダ、酒、ギャンブル、過度の金儲け」にはしる。これは良くない。信仰がないと不幸は必然に。汚れ汚れた果ての眼前にあるもの、欲望なのか愛なのか。ちゃんと考えよう。御見合い。年収でひとの価値を量る。聖書。[その量るはかりでその人も量られる] 相手に対し欲求ばかり。二人のその先は、見えないふりをしよう。愛が信じられないか。悲しいことだ。だが先の男の言うことも解る。実は飲んでいて本当にお互いが解り合えた。そんなことは一度としてなかった。誰もが必ず私より上にしようとする。やはり。真、善、美、を語るとき酒を飲むのはよくないか。確かに「他人と関わらず」、楽である。散財も無いし、心の調和は保たれる。いいことづくめ。でもそれで本当にいいのか。私は淋しくはない。聖書があるからだ。親友である。人に関わるときの、悲しみを解っていてくれる。今回の文章、ひとというフレーズが多いなあ。

私が神であるか、ないか、そんな不毛な議論をしても仕方がない。そして私は文章には表すが、宗教の話をすすんでしたことはない。その人、その人の「根、情、欲」、心の熟成が当然、大切になってくるからだ。障害年金を止めるという。私は現段階では自死を選択しなければいけない。勘違いしないでもらいたい。

困るのは私ではないのだ。神を自死へ追い込む、そんな世間に未来はないのである。神は愛であり光である。それが消される。暗闇だけの世界が訪れるということだ。悪魔の業とともに信仰を邪魔するものに生活の心遣いがある。つまり香典などの儀礼がある。相互扶助。いいことのように思えるが、お金の額が対象の生死の価値を決め、人の心に離間をもたらしている。形式的様相は女性や商売人に多いように見受ける。自分が悪の心を持てばひと悪で返す、善で向かえば善でかえされる。ひとは鏡である。つまり愛で向かえば愛で返ってくるのである。人の繋がり単なる互助会ではいけない。むくわれない恋もある。しかし愛は消えない。それをあざ笑うような人間とはオサラバするだけである。年取などというおのれに執着した人間たちに本当の幸福など、存在するであろうか。結婚の目的をはきちがえる人々。恋をしたこともないひとたち、いや忘れた気になるひとたち、悲しいなあ。どんな愛を育てられるだろう。俺は手を握り「愛している、君を離さないぞ」というだけである。これが本当だろう、なあみんな！

相田 みつを、嫌いだ。「人間なもの」安易すぎる。「欲深くてもいいじゃないか。人間なもの」こいつは何が言いたい。詩人らしい。仏教にもとづいて、どうも真宗くさい。悪の肯定である。事実は曹洞宗と関係あるみたいだ。禪宗である。「みんなが美しくみえるのはあなたの心が美しいから」本当かい。完全に受け狙いである。仏道は厳しいものだという立場。安楽に

生きるのが仏法の目的。だが彼のように欲深くて、真実、幸せでありえようか。人間臭さを売り物にして、仏の教えを人生論的に歪曲する。ホッとするやつもいるかもしれない。だが、安直で、自ら求道し探求し続け仏の道をきわめんとするものにとっては同じ三界にて存在するのはまこと喜ばしいことではない。無責任で自省のかけらもない野放図なやつと顔をあわせていたいかい。人間だからこそ神仏の方を向く。足もとの地面を見下ろすようなさもしいことをしてはならない。私は必死になって、自分を否定し仏という訳の分からぬものを目指せといているのではなく。人間の業、強欲、愚痴、怒りなどをおおびらに認めてしまつては、本人だけではなく周りのものすべてが苦へと向かうこととなり、まさに地獄、餓鬼、畜生、修羅の世界が現出されるのである。そのままに生きる。ありのままに生きるということが、ただ欲望の奴隷になることはいけない。善をもとめ、すこしでもまともな人間になるよう、努力は続けなくてはならないのである。己への執着から離れ、喉が乾くような飽きることもない欲望から脱皮し、ものごとは移り変わって行き、またすべては関連のなかにあるという法則をつかみ、森羅万象と共に成仏する。それが本当唯一の幸福である。それには安楽行、南無妙法蓮華經の唱題、仏法しかないのである。親鸞は歎異抄のなかで弟子、唯円に語る。ひとり殺すのも万の人を殺すもすべて業縁であると。その意味とは。唯円にはひとりさえ殺せない、心に仏と戒律が存在するからである。ソ連のスターリンはドストエフスキーの作品カラマーゾフの

兄弟のなかの科白「神がいなければなんでもできる」その言葉をもって一千万とも二千万ともいう人を不幸な死においやった。だがもし彼がそのことに躊躇していたら、ソ連は列強の仲間入りは果たせず、アメリカへの核抑止力もなしえなかったかもしれない。犠牲か。殺された人々にはささやかな暮らし、幸せがあったかもしれない。信長、にも言える。独裁者、二人に共通するのはどちらも早急に革新を目指したことだ。私はいう、ひとを殺すことができるというのは決して業縁ではないのだ。心に神、仏がない無神論からであり、そして悪に手を染めるのである。そして信長は権力をもつ神になろうとした。信仰心なき科学は悪魔をつくる。また信仰心なき政治もまた悪魔より始末のわるい悪党をつくるのである。北朝鮮が労働党、結党70周年の軍事パレードを行った。バラ色の夢の国、北朝鮮、まことしやかに伝わってくる彼の国の経済制裁からくる窮乏。イギリス、フランス、いずれの国でも囁かれる、エスタブリッシュメント（特権階級）の存在、そしてヨーロッパに流れるシリア、リビアなどからの難民たち。すべて欲深い怠惰な、心に神のいない権力者たちのせいである。[人間だもの]なんて言っていていられるかなあ。

こんな歌がある。[あんたが、あたいの寝た男たちと夜が明けるまでお酒飲めるまで、あたい男をやめないわ、男、フムフム]つまり嫉妬心をのりこえてしっかり愛してくれということであろう。女性が発しているのだから衝撃的である。幾人もの恋人というか男達と

暮らす娼婦の話があった。結果はこの実験的恋愛形態は、破綻したのではなかったか。左翼の考え方に「私有財産を認めない」がある。唯物論つまり異性もモノとして扱う。みんなで共有しなければいけない。こんな愛情を無視した思想が生まれるのはそこに神がないからだ。これが理性的といえるだろうか。すべては御縁である。やはり、愛する人との出会いを大切にすべきだ。嫉妬について考えてみる。彼女の前の男が気になる。そのために別れも意識する。愛しているからだろうか。自分に傷がついたような気がするからだろう。若気の至りだが思いやりなく最低だ。先ほどの歌が気になる。つまりマイナス、ネガティブも受け入れて囚われから離れ、全身全霊、愛さなければいけないのであろう。いま過去のその人に再会したらどんなマイナスの条件があっても魂がきしむくらいにその細い肩を抱きしめるであろうか。ただ幸せを祈りたい。

ある女がいる。どんな男とでも寝る。考え方によっては天使と呼べるのではないだろうか。もったいぶった虚栄心の強い、そのくせ金には弱いそんな女どもと比べれば、間違いなく博愛の精神を持った、素直な素晴らしい女性と言えるであろう。目の不自由なマッサージ師と結婚した。子供も出来た。私は「姦淫するなよ」とさとした。だが同意した言葉も乾かないうちに彼女はまた自然に生きた。たぶん私もEDでなければ関係を結んでいたかもしれない。欲望に苦しむ、ある男が彼女を仲介してくれと訴えてきたが、「自分で話しをしろ。でもあいつは人妻だぞ」と抑制をうながした。彼女を抱いたある男が、心臓病で亡くなったと風

の噂で伝わってきた。たぶん他の女にならキモイと毛嫌いされてしまいそうな男であった。私は彼女を病院の屋上にむかう階段の踊り場できつく抱きしめていた。なにかがこみ上げてきて、なぜか涙がでそうになった。彼女は苦しむ者へ、その身を捧げる聖女ではないか。見栄、体裁、かけひき、疑惑、枠組み、計算そんなものは一切ない。マッサージ師の旦那さんには悪いが彼の宿命なのかもしれない。体を揉みほぐしてもらうために訪れるお客にお茶を出す。目の見えない旦那はどれだけ助かっているだろう。彼と一緒にいるのもふたつ返事で仲人にうなずいたという。そこには肯定しかない。彼女は結婚して二人の男の子をもうけた。「多量の薬を飲んで自死を図ろうとしたことも」。幸せになったのは間違いないみたいだ。いま私は嬉しい。

R会の開祖、彼は天才である。名誉欲、出世欲、金銭欲。パチカンと手を結ぶ。また会長の世襲制をすべてに容認させる。まるで針のさす隙間もなく彼の持論は展開される。仏陀はその散り際に、「私という人物を灯とするのではなく、法つまり教えを灯明とし主体性を失わず道をすすんで行きなさい」と。偶像崇拜を禁じた。だが彼は自らを、崇拜の対象の位置におくため、法華経の教えより逸脱し、釈尊個人に帰依するよう、釈迦如来の立像を本尊に仕立てた。釈迦は偉い人だ。それを受け継いだ私は崇拜に値するものなのだ。まったく凄いいテン師だ。希代の策士である。宗教と成功、欲望から生まれる矛盾も上手に平らにしたのだ。宗教界のノーベル賞ともいえる、テンブルトン賞を受け、

その嬉しさに涙している。では会員の方はどうだろう。奉仕にてお互い助け合う体裁のいい互助会である。またいつも同調を是とする。宗教の真理に向かう意味合いなどは関係ないみたいだ。日蓮が「日本一の智者」と祈ったのも、「我、日本の眼目とならん」と宣書したのも彼が存在したことにより、法華経へとみんなの目が向くと考えたからである。法華宗では菩薩として日蓮は釈尊を超えない。真実、仏として釈尊と並んだ日蓮大聖人は南無法蓮華経と大音声する。日蓮大聖人を絶対者のように帰依し、ただ命が惜しいために奴隷のように拝む連中がいる。個人崇拜は偶像崇拜と一緒に自分の心の成熟を疎外するものである。大切なのは仏陀の説かれた御教えである。仏種へと働くのが末法の南無妙法蓮華経である。親鸞が好きな男がいた。「悪がなければ善がない」確かにそんな気もするが。そもそもなにが悪か善であるかはわからない筈だ。だからこそ思うのだ。心に愛、慈悲が存在するか否かが大切だと。悪としての存在を肯定し阿弥陀如来に救ってもら。地獄に落ちずにすむための方便である。自らの悪を真っ直ぐ見つめ、罪は己への執着、欲望への渴愛であると見極める、釈尊の教え、末法には何度も言うが南無妙法蓮華経しかおのれの良心のうずきまでも慰めるものは存在しないだろう。そして宗教とは自分が先祖からの因縁を思い自覚しなければまったく関係のないものになる。真宗の家に生まれた男は言っていた。「うちの宗教なんか坊主のもんだ」。結局そこにくる。葬式仏教と椰楡されるが、毎日の生活の営みの中、育まれるのが宗教である。その延長線上に葬

式がある。釈尊の教え、経をあげることと、故人を想う心。生死を超えた世界。霊となった先祖の供養には読経しかないでしょう。無神論の念仏、葬式はいらないと親鸞は言った。ところがそれでは真宗僧侶は食っていけない。日蓮は言う。念仏無間地獄、禪天魔、真言亡国、律国賊。この事実、思いやりのなか、隣人愛、慈悲を想うとき、真実の神仏の御教えとして心にピタリと理解でき得るものなのである。常に善を願う大切である。日蓮は神である。ならば南無妙法蓮華経は愛である。その作用（現証、功德）で判断される。正しき思い大切である。

責任感。父母へ、子へ、仕事へ。ひとつのとらわれである。自由になれない。ひとが何者かに尻をぼったけられるとき、逃げ道を奪う、周到たる手段である。瀬戸内寂聴は我が子を捨てて男のもとへ走った。韓国、セウォル号事件。船長が乗組み客をぼったらかして真っ先に逃げ延びた。かなりの社会的非難を浴び、また司法にて裁かれた。ここである。イエスは言う。福音のため父、母、兄弟、娘、息子から、また田畑、生活のこころ使いより離れなければ永遠のいのちは得ることは出来ない。なぜ夫、妻は抜けているのであろう。私は夫婦の愛ほど失うのは簡単であり、また責任感を保つという意識まではどうだろう。話が飛躍するが、結婚相談所、年収の多い少ないが絶対条件であるという。いったいどんな愛が育てられるというのだろう。戻ろう。責任感、人は縛るものである。なにも私は愛を捨てろと言っているのではなく、責任の意識を

捨て神にすべてを委ねよと示すのである。世ではどんなに非難されても仕方ないと諦める。妻子を捨てた釈尊がいる。ただ明るく素直に温かく。企業の倫理、論理に洗脳され鬱病になってからも自分を責める人がいる。自分は自分のために生きていい。それでいいのだ。自分の価値観をしっかり持ち、己を見失うな。[この会社は優秀な社員しかいない。不文律を守り、会社の利益のため働け、管理のもと。辞めていく奴は無責任の負け犬だ] とんでもない話だ。ひとは自分らしく自由に生きてよい。公に尽くすとは、己を含め、人々の幸福をつくりだすところにある。決して会社の利益をあげ内部留保を増やすことにあるのではない。比較し競争し、責任感という縛りの中にある限り、人は真の幸福をつかむことは出来ない。自由を求めるのは使命である。また平和を守ることも使命に違いない。だがその矛盾を解決することは神にただ委ねる。つまり真実の愛で心を満たす。そして自主的に主体性をもって積極的に生きて行く。受け身はそろそろ卒業しなければいけないみたいだ。

お講というものがある。昔から続いている。日蓮宗と法華宗の各家、持ち回りの合同先祖供養である。私はかつて日蓮宗には悪魔が存在すると表したが、当然のことである。法華経のなかには鬼子母をはじめたくさん鬼たちが帰依したとある。そして日蓮宗では日蓮を本仏とし釈尊は過去へおいやられることになる。法華宗では日蓮は釈尊を超えない。なぜなら彼は釈尊つまり仏陀の教えの真実はなにかと真摯に求め続けた

のであり、釈尊をないがしろにするわけではないからである。日蓮は比叡山で求聞持法という空海と同じ密教の修行を積んだとして、真言密教を否定するが、日蓮宗では法華經第二十六品、陀羅尼を唱え加持、祈禱を行う。一方、法華宗は釈尊の基本理念ともいえるマントラ儀式的偽りを指摘する。なぜなら祈りとは人為的ではなく天が叶えるところにあるからだ。つまり顕教に徹する。ふたつは相容れないように見える。だがそれは信者の見方からだといえる。日蓮としては自分の立つ位置よりも法華經、つまり南無妙法蓮華經にみんなの心が向かえば満足なのではないのか。つまり二つの道をしめしたのではないか。加持、祈禱において衣食住の保証をなし、顕教によって心の平和、平安、仏の道をしっかりめざし進んで行く。法の堤から幾筋もの川となり、そして大河はまた日蓮、南無妙法蓮華經という深い海に流れ込み、大いなる命を生み出して行く。日蓮は大聖人と絶対権力に祭り上げられる、一方上行菩薩として釈尊を慕いつづける立場にあり、法華經、南無妙法蓮華經によって人々が救われていく、日蓮にとってはどちらも方便として意味があったのではないだろうか。そこには日蓮の自意識にもとづいた名誉欲、権勢欲は存在しない。つまり空の教えとリンクするが偉い、偉くないというのはこの世の価値観であり、日蓮は法華經実践の素晴らしい行者であった。つまりこの世の位置、力関係などはどうでもいいのである。けど末法には日蓮大聖人の仏法、南無妙法蓮華經しか大乘の教えが成就しないのだ。私も同様なのである。信者は虚心坦懷で耳を傾けなければならない。

なぜ題目でなければいけないのか。諦め、無関心、悪を肯定する念仏を信じる悪風と対峙するために。ただ明るく、素直に、温かくネ。私の布教を強引な析伏と呼ぶかな。

お釈迦様はお坊っちゃんである。暑い寒い、食べるものも心配しないでいられる。そういう境遇にあった。だが何故、苦悩し出家したのか。四門出遊、老いた人、病に苦しむ人、死に行く人、そんな現実、人間の人生の空しさを、それだからこそ深く認識されたのだろう。そしてただひとつ北の門を出るとき沙門とよばれる出家者の清々しい姿をみる。何の囚われもない。静かな真の美しきに満ちた姿があった。そんな風に生きてみたい。お釈迦様は少し希望を感じた。ある女性がいる。貧しき家に生まれる。馬小屋みたいな家だったという。7歳の頃から牛乳売りを始め学校もろくすっぽ出ずに、奉公にでた。父親は足が不自由でそのことをからかわれたという。彼女は奉公先の主人に可愛がられ呉服屋を営み成功する。ここである。釈尊が生きた時代も貧しき人たちがたくさんいただろう。その人たちの本当の願いは家族の健康と衣食住。つまり生活苦からの脱却だったのではないだろうか。釈尊というか仏陀の教えはどう貢献したのだろうか。仏陀は応病与薬、その人、その人に合わせ法を説かれたのである。さきほどの女性とすれば自分を助けてくれた恩人に感謝するだろう。それは大切なことである。前後するが釈尊は餓死寸前まで行く、激しい修行をされる。

が、結果的に人々は苦を求めるから苦しまなければいけないのだ。という結論に達する。ということは楽を求めればいいのである。各人おのおの、固定観念を持ち、しがらみ縛りがあると錯覚し、欲を深め、自分を鍛え上げ他人よりもすこしでも上にあがりたいと思う。それが不幸をもたらすのである。大事なのは優しい顔、柔和な心、愛情ある言葉、つまり思いやりを広げ、明るく、素直に温かく生きてゆく。変な功名心は捨てて相手の方に向いてあげる。そこに安楽、幸福があるのだ。世の中、仕事をすれば様々な利害関係にわずらい苦しむこともあるだろう。しかし人を利用して使い捨てカイロのようにすることは絶対にいけない。話が飛ぶが国と国との外交、「これは自国の国益のため、いかに他国を利用するか考えるのが当たり前だろう」といった、中国生まれ、日本で会社をつくり 200 億の財産を築いた男がいた。もしかしたら、この男は人までも単なる利用の対象にしているのでは。結局、世の中それを是とするものが大人とよばれ、強者になっていくのだろうか。そこには自由も愛も平和もない。200 億も何に使うのであろうか。失うことへの恐れでいっぱいだろう。本当の意味での友情、愛情を培うことはできるのだろうか。仏陀の教えは生活の向上よりも自己への執着から離れ、永遠の平安を目ざすものである。そして信じて行えば、物心両方、困窮しないよう因縁に基づき果報は訪れるのである。いろいろな心配ごとはあるだろう。それを神仏に預けて、つまり南無して、自分が楽な方へ素直に流され

ていく、そしてすべてに「ありがとう」と言おう。
心が少し穏やかで幸せな気分になってくるからね。
南無妙法蓮華經。

私はテレしていた。「いや、たいへんよ。いいね、あ
そんどれて」。だが私の心の奥は「俺は働いているん
だ、苦しくてもな。お前とは違う。」そんな傲慢な思
いがあった。差別が憎い。その気持ちのうらはらで私
は仲間と呼ばねばいけない人達を軽蔑していたので
ある。[理屈なんか知らない、甘えだというのもよく
わかったから]尾崎が偏見をもつ大人たちに答えた言
葉である。現在、障害年金を受給して仕事をしてない
私は、働く人達に申しわけないと思わなくてははいけ
ない立場にあるのだろうか。[兵隊さんよ、ありがとう]
それだなあ。すると非生産者、つまり子供、病人、老
人は、生きてちゃ、いけないか。働いていない奴は駄
目なやつだ。世間にいないやつだ。そして自分で自
分を追いつめるやつがいる。自らの生存を心配し悩み、
その結果、自分も他人も傷つけるのである。すべて神
に委ね、心安らかに隣人を愛する。このことのみが真
の安楽へと向かうだろう。仕事が無くなったなら何をし
ていけばいいかわからない。典型的仕事人間である。
酒を飲んで寝ていてもいいし、唄をうたっていてもい
い。何かにケツを叩かれてきた人には仕事を取り上げ
られるのは、なにをなすべきなのか分からなくなるの
であらう。ワークホリック悲しきかな、企業の論理、
倫理にどっぷりつかっている。ひとの顔色と自分の位
置、評判ばかり気にかけて自分はどうかしたいのか哲

学してこなかった人達。さみしいものだなあ。人のことは言えない、私も発症する以前は典型的な仕事人間、ある意味では企業の大義名分が、のしかかった犠牲者といえた。話は変わる、ある女性がいた、彼女は婿養子をもらい娘もひとりいる。そして毎夜、ある男のもとへ湯を浴び出掛けるのである、男は病となる。女はある宗教団体の仲間に祈願供養を依頼する。しかし、男は死ぬ。女は泣きわめき、仏をののしり、教団の仲間の無力さを恨んだ。自己中心、自分のことしか考えていない。親不孝もの。そんな眼で教団の人達は観ていただろう。いつから彼女が男と親密な関係になったのかはわからないが、農家の長女である彼女にして田んぼが彼らの愛の障害になっていたとすれば、かなり同情の余地はある。かつて私も彼女はふしだらな情欲にはしる毒婦だと思っていた。だが今、待てと思った。周りのことが見えない、だが因習、常識、世間体そんなものを、肘鉄を食らわせ振り回し引きずり倒すように、己の恋に命をかけた彼女は、もしかしたら美しい心の持ち主なのではないだろうか。姦淫の罪。しかしその戒を意識したからこそ虚栄心をすて自らを皆のまえに投げ出したのではないだろうか。そこには戒というものと真摯に格闘した女の純然とした真心が垣間見えるだろう。一途。そして仏様は最善の結果をだされた。10才にもならなかった娘と、待ち続けた夫、かれらの愛を忘れてはいけなかったのだ。また愛された男は至上の死を迎えたと言える。

「私は悲しみで卒倒しそうだ」 イエスはいった。「父

よ、できるならその杯を取り除けて下さい。でももし御心ならそのままに」「私を裏切るものがある。その者は生まれて来たことを本当に後悔することになるだろう」ハッと思わないかい。つまりユダの裏切りを仕組んだのは神ではないか。そんな疑問が生まれる。人の子つまりイエスは悪人たちの手により十字架につけられ死に、三日後に蘇る。そのことは人間の原罪というものをイエスに背負わせ、人々を神の意に反して縛ることになった戒より解放させ、イエスキリストを想うという信仰によって贖罪するというものだった。イエスキリストへの信仰とは如何なるものか。それは「神を愛すること隣人を愛すること」につきる。そして愛で心を満たす。イエスはみずからの命運を自覚していたのだ。ユダヤの王として偽善にまみれた律法学者、祭司長などを含めた世俗の権力者にたいして、またイエスをローマからの解放者だと信じた民衆の失望にたいして。そんななかどういふ死に方が一番鮮烈で人の心に響くだろうかと思ったに違いない。なぜならその後、ペテロたち使徒が命をかける、布教精神の転換が一番の奇跡といえるからだ。では神はユダの裏切りを阻止することは出来なかったのでしょうか。ここである。つまり神は人間が悪魔にそそのかされ知恵の実を口に入れるのを止めることは出来なかったのか。もしかしたらそれは予定調和なのかもしれない。人間には自由があるか。いや自由というものに呪われているのかも知れない。尾崎はいう。「矛盾する世界でなにが心を支配しているのだろう。わけもなく流れる涙」一番悪いのは神でありユダは犠牲者とも言える

のではないか。しかし人間には意思がある。神は最愛の愛子まで、人々を回心させるため送り出して下さった。しかし人間たちはねたみ、自分勝手にイエスをあしらい愚弄し嘲笑を浴びせた。神は苦悶した。なぜなら、らい病患者の譬えのように「神の御心のままに」と言う男にイエスは「私は望む」とこたえ彼は癒された。この事実は、イエスは神と一体であり神はイエスとともに十字架についたのである。同悲同苦。神は愛である。もしユダが悪魔に心を売り渡さないのなら、杯はとりのけられたのかもしれない。神はイエスを見殺しにしたわけではないのだ。人間は自由であり歴史は予定されているのかも知れない。イエスは今で言うジーザスコンプレックスか。奇跡と復活がなければ、ただの荒れ野の頭のいかれた哲学者くずれであつたろう。神は、人間は自由だという。しかし人間は何者かに支配されているという。底に流れる愛を自覚するかしないかが大きな意味合いをもってくるだろう。なぜ多くの人間は自由意思ですべてを神に委ねることが出来ないのか。自らの生存ばかり心配して正義、周りへの思いやり、そして愛をないがしろにする。人間は必ず死ぬのかもしれない。その後、各位、自らに相応しい世界へと迎え入れられる。楽しくて平和で本当の優しさに満ちた世界。そう、その楽園が神の国に繋がる。何度もいうイエスと神は一体である。神は愛なのである。

個室（保護室）監視カメラが作動していたそうだ。ポータブルトイレ。鮮明な画像。陰茎の拡大フォーカス。

女性スタッフの眼前、そんなはずらも反抗的とみなされた、私になされていたのではないだろうか。尻を拭き指に糞がついた。手を洗いたい。ナースコール、向こうから馬鹿笑いが聞こえてきた。私は糞のついた指を壁になすりつけた。精一杯の抵抗だった。すべて見られていたのである。やはりイエスは辱められ、侮辱され、嘲弄される。正直に恥ずかしさ、淋しさ、憤りを感じる。[命を守るため]、大義名分がある。便器に顔をつっこんで死ぬ人間がいるか。配慮はないのか。これは、25年間、肉体関係のない童貞に近い私だからしめす心の現れであるのか。だが引っかかる。羞恥心に揺さぶりをかけてくる。そう悪魔は意識してもしなくてもいけない。自分が怖ければ怖いほどやつらも怖いのだ。神の自覚がそう思わせる。サタンと融和すべきか。ひるまず。裁定は私が下すのだ。007ロシアより愛を込めての中でジェームスボン、ベッドの上でのセックスを鏡の裏で一部始終、悪党どもに視察される。だが彼は気にもせず、戦いにのぞんで行く。羞恥心も意に介さない。男らしい。これこそタフガイだ。女性を口説くとき、楽しい会話から卑猥な会話へ。性的興奮に訴え、素早く肉体関係に持ち込む。それを目的とする。私にもそれが男と女の近道だと解っているが、出来ない。50を越えてから、そしてEDという現実から、言葉による意思の疎通からはじまる、プラトニックラブが必然でありまた運命であり志向にもなってくる。私は結婚前の女性たちを無責任に破瓜し彼女たちの純潔を踏みにじった男たちに対し、無性に腹が立ってくる。神への不敬、大罪である。なにも

知らない知的障害のある娘に偽りの優しさでもって、心の淋しさにつけ込み、カラダだけを目的として扱い捨てる、そんな男たちがいたそう。何度かくり返されるうちに娘もそんなカラダだけのツナガリが大人の男女関係であり、それが当たり前だと考えるようになる。愛が見えにくくなる。悲しいことだ。[男と女、心よりカラダで慰め合う]でも優しく素直な娘だ。すこし不良な容姿。なぜか私の言葉に耳を傾けてくれた「愛は愛することに存在する」ベアリング工場に勤める、すこし年上の男性と今度は真剣に愛を育んで行くだらう。私は本当に嬉しく思うのだ。

人間として原罪を自覚する人はアンガー・ジュマン(社会参加)に疑問を持つようになるだろう。つまり罪人に何故生きる意味がある。自分のことを本当に理解するものなどはないのか。心の奥を知るものなどどこにもいない。もしかしたら愛など存在しないのではないだろうか。そんな風に思ったものはホームレスになり、そして汗を流し、生きることに疲れ、青色吐息をはく。そしてまたひとつ街に命が奪われていく。尾崎は言う。「人は生まれたときから罪を背負っている。だが生まれてくるものたちは間違っていない。それはだれもひとりにはなりたくないからだ。それが人生だ」。ドアイさんが甥の生まれたばかりの娘を初めて抱いた。いつものドアイさんではなく嬉しそうだった。気分が昂揚しているみたいだった。私は思っている。人々の本当の友はイエスキリストしかいないと。イエスの暴言、暴挙を誤ってとり、聖書から離れて行く人

がいる。それは聖書が悪いのではなく読み手の方に責任がある。聖書は絶対である。それを良心で読み解く。それは例えば頭の良い東大出身者だから理解できるということとは違い、人生への怨念を消した精神障害者の方が得心できるものなのかも知れない。聖書は頭で理解するものではなく、心で読むものである。心の柔和な人でないと難信難解なものになってくる。頭の中に固定観念が存在する人には理解が難儀かも知れない。そしてイエスキリストである、私は自分の方から友を求めない。私の中にある、イエスキリストに感応してくる、つまり私の心に向き合うものだけが兄弟と呼ばれるのである。素晴らしくないかい、矛盾しているようだが俺は捜し続けなきゃならない本当の兄弟を。そしてそういった人は、ある日、神の靈感の自覚から聖書と、対話が出来るようになった自分に気づく。まるで聖書が自分ひとりの為に書かれたかのように。(聖霊の宮) 心から悪意を一掃することになる。あるエピソードだが精神科デューケア、出かけた研修旅行、宮崎海岸近くの料理店、お冷やが、配られた。どういうわけか私の周りにいた若者たちが「鉄の味がする、まるで血みたい」と顔をしかめた。なぜか私だけが気にもならずお昼の薬を服した。帰宅してからハッと思った。イエスが言った「私の血を飲まなければ永遠のいのちはない」彼らが失格したわけではないだろう。だが不思議である。私はその場で告げなければならなかったのか、その事実を。「私は神であり、イエスキリストである」と。宣言する勇気がないのではない。なにかが私を止める。まあいい、自己顕示欲、名

嘗欲にとらわれても仕方がない。ただ、時宜、その日を待つ。この世の終わり、新たなる旅立ちを、それでいいのである。義人と悪人は選別される。簡単である。皆自分に問いかけてみよう。邪心を肯定したもの、その報いは大きいのである。審判はもう始まり終わりに向かっているのかも知れない。まだ遅くはない。牧童の譬えのごとく、神は迷える羊を救うべく搜索を行い、放蕩息子の譬えのように回心したものには涙をながして歓喜されるのである。

あるテレビ番組を観た。顔にあざが、また病気によって不均衡な表情になった人たちのためのNPO法人の話をしていて。解散するそうだと。「なぜ閉じるのですか」の質問に代表は「サポートを求める人たちがばかりでサポートしようという人物が育たなかったからだ」といっていた。代表の眼はするどかった。「なにを基準に美意識をはかるのか」フォトのなか世間を睨む視線。しかし彼は自分勝手な詐欺師だった。結婚を機にライターをやめ安定した職に就くそうだと。つまり綺麗な奥さんが自分のものになったいま、後のことはどうとでもなれということみたいだ。私はなにも彼にわざわざ醜い人と一緒になれといっているのではない。きっと奥さんは問題意識から働いていた彼の行動力に引かれたのだろう。だが裏切られたと感じた会員も多かったに違いない。赤いあざが顔から胸に広がる女性が映っていた。発言としぐさから賢くて優しい、感情細やか、だがある面では自己執着が強い人、そんな風に私は感じた。理由があり、法人から離れたとい

う。この人はもしかしたら代表に対し、好意を抱いて、彼が希望を与えてくれると信じたのではないだろうか。涙でかなり辛そうだった。代表は思っていたのではないか。「みんな利用させてもらったぜ。自分の幸せは自分でつかめ、世の中そんなに甘くないぞ」自然界の醜さを思えば、それも一理あるのかもしれない。彼に悪びれた様子はまったくなかった。もうひとりの女性はアイドルを追っかけ続ける。「馬鹿じゃないのか」。もうよそう、俺もそのくちではなかっただろう。かつて自分の風貌を棚にあげて美人をぼっかけた。もし自分の外見が世の中に認められず疎外されていると思うならば、まず同じ境遇の人に同情すべきだ。どうなのか。自分の価値観を検証してみる。本当の美しさとはなんなのか。エレファントマンというデビットリンチ監督の映画があったが。私には現在、心の美しさ以外には考えられない。突き詰めてゆくと彼らの目的は外見の整った寛容なパートナーの獲得にあるみたいだ。それじゃだめだ。まずは固定観念を捨てて虚心坦懐に人々と接して行く。聖書にある、内側を清めなさい、さすればすべてが良き方に向かっていく。私はなにも醜い者同士、傷の舐め合いをしろといっているのではなく、主体性をもってひとり毅然と生きる。そのとき本当の幸せをつかむことが出来ると信じるのである。恋人、友達がいるから幸せなのではない。自由に自分らしく生きて行く、その覚悟ができたとき幸せの青い鳥は訪れるかもしれない。まずは人を思いやってみることである。自分に執着せず、ないものねだりをせず。みんな、愛を遍く広げて行こうじゃない

か。失望、絶望を乗り越えて。尾崎はいう。もし君が暗闇に光を求めるなら命を育む太陽の破片という嬉し涙が頬をつたうだろう。自己は自己、他人にはなれない。比較というものが存在するから悩みが生まれるのだ。自分は自分の人生を生きるしかない。自分は自分でしかないからだ。愛をもって。

郁子様へ

台風がいくつかあり、少し肌寒い季節となつてまいりました。お変わりありませんか。お心のこもったお手紙、どうも有り難うございました。私も少なからず生活に追われ大事なことを見失っていたみたいです。ただ私は今、これでよかったのだと神仏に感謝しております。この世は真実の愛と平安を見つけるための大舞台、苦しみも、悲しみも楽しまなければいけないのだと思っています。生老病死をも設定された深い神仏の計画だと思っています。ことさら自分を責めることもなく。だってなんにもない人生なんかつまらないじゃないですか。振り返って、病院勤務時代が一番生きがいに満ちておりました。決して強がりで言っているではありません。当時は人を憎んだこともありました。理想と現実のはざまに苦悩しましたが、自分を見つめ理性的に感情をコントロールし、憐れみと思いやりをもつことの大切さを知ったのです。ですから郁子様のお慈悲のこもったお手紙を母から受け取った時は、本当に嬉しかったです。そうですね、なにより共感が大事ですね。郁子様もさぞかし辛い経験をされたのでしょうね。思いが伝わってきます。ただ迷惑をかけるの

はお互い様です。それも因縁、かけられたほうが利他で幸福ということもあります。心の中の神とまた人の心中の神が感応すれば感動と親愛と平和が生まれると思います。本当にお手紙感謝でいっぱいです。幸せでいてください。そしてご家族様の健やかなることを心から祈っております。またお会いしたときはあの優しい笑顔をお見せ下さいね、では。

義人

御上人様へ

常日頃、久遠の釈迦如来、大導師日蓮大菩薩、のありがたさをかみ締めておる次第です。そして法華宗の真実をあらためて世に知らしめられた、唱導師日隆聖人様のご遺徳をもって、その因縁からこの世にいかされているのだなあと感謝しております。御上人様におかれましては如何が御過ごしでしょうか。察するとご苦労もありなのではとご推察申し上げます。負けず嫌いの御上人様ですから、優しさを口にだされることの方がお辛いかもしれませんね。いや、それだからいけないのではなく僧侶たるもの確固とした信心がおありでないといけませんよね。しかしお身体への私の心配はつのるばかりであります。御上人様の御健やかなることを心より願っております。さて私にはよく解らないのですが、永代供養と申すのですか。母から聞いた話によると高額のお布施が必要になると。それはそれでいいのです。私は今思うのは戦時中、肺を患い、19の若さで亡くなった、伯父のことです。いままで

心の隅にもありませんでした。申しわけないことをした。反省の気持ちでいっぱいです。ですから伯父への供養のためならできることはしてあげたいのです。決して自分が幸せになりたいためということではなく、ただ純真に伯父の冥福を祈るのです。眼にみえない世界で高額布施をしたから成仏するということはありません。そして御上人様もご存じのとおり貧者の一灯の価値、イエスも申しております。金持ちが自分のためにする寄付より、貧しいなか愛のために捧げるものが、価値があると。私はT P P交渉のようなことを行おうとしているのではなく、母共々、私たちの気持ちをお汲みくださり、真実、道理がお解りになり、お優しく情けのある御上人様にすぎり、貧者の一灯、そして心のこもった法華経によって御供養していただければ、それに勝る喜びはございません。私も持病からくる障害により、対話、会話に少し支障があり、こうした文面にての意思の発露となりましたが。思うは気にもかけていなかった伯父。本当に申しわけないことをしてきた。いま思うのはそればかりです。御上人様どうか善きにはからって下さい。おまかせします。そしてご健康にご留意されご自愛下さい。また参拝したときは宜しく願い申しあげます。いままでの数々の非礼もこの場を借りてお詫び申し上げたいと思います。また生意気に問答をふっかけることもあるかもしれません。そのときはまた無知なやつがと憐れみ仏の道を教えていただきたく思います。では本当にお身体を大切に、みんな応援していますから。それでは――。

吉本先生へ

ごぶさたしております。2年前に病状からクルクル回転してご迷惑をかけ、保護入院しました。それから私の近辺でもいろいろありました。申しわけなく、先生を裏切った形となりましたが、義理より恋を選んだ私。それはそれで正解だったような気がします。先生には最近ではE Dの問題を堂々と語れと叱咤され、それからは、私の中でも吹っ切れて、羞恥心からくる偽善に陥ることもなくなりました。いまではどなたの前でも恥ずかしくなく語れるようになって参りました。でもそれはいま性に関する卑猥な妄想が湧いてこないからだと思います。私は性欲の問題を乗り越えたのでしょうか。先生には当初からお世話になりました。一度目の入院。閉鎖病棟でみんなが敵に見えるなか、ただひとり忽然とデールームに現されたその御姿。その白い上下から光背に浮かび上がった神様のようにはみえました。薬を信じ飲もう。人生に絶望していた私、「一生こんなとこ、暮らしか」失望からはじまる予後。初めての外出許可。夕食時だった。噛み切れないステーキという名の肉片と、けっこうおいしいレーズン入りのポテトサラダだった。同時に許可の出た、いまは亡き松野君と手をとるように喜んだ。2回目の入院。退院ばかりを訴える私に、「君は退院しなくていい。この意味をよく考えなさい」と言われ「もっと前向きに考えなくてはだめだ」とおっしゃった。つまり私はおかせて頂いているのだ。もっと病気を治すことに専念

しないと。腰が定まったような気がした。毎週、様子見に帰宅するものの必ずといてもいいほど調子が悪くなった。ある晩遅く、なぜか矛盾しているようだが無性に退院したくなった。「吉本先生を殴れば退院だろう」入院期間は1年をはるかに超えていた。私は呼ばれその部屋に入っていった。私が意を決したイザその時、先生がゴホゴホと咳き込まれた。私は一瞬で反省した。「先生、大丈夫ですか。私を診なくて結構です。早く帰ってお休みください」これは明らかに神仏の仕業でした。私は危機を乗り越えました。先生は次の日だったか、旨いことを言ってくださいました。「鳴くまで待とうホトトギス、これしかないんだ」私はセブンブリッジにひたりこんで残りの入院生活を送りました。そして1年6ヵ月の期間にて退院となりました。先生はそれからEDに悩む私の為、前戯のもってきかたまで指導してくださいました。「朝立ちすれば機能には問題ないんだ」。ED、それは私に幸運をもたらしました。この25年女性との関係は一度も無く、そのことは聖霊の意思であり私の神聖を凌辱させず、障碍となる妻子を持つことを止めさせたのです。本当に良かった。私はただ清らかな愛を信じ、求め続けるのです。私のED治療もパートナーのことを慮ってのことで私の欲望のはけ口の為ではありませんでした。ならば同じように、世にはきつと真実、美しい愛をもとめている女性も存在するのではないのでしょうか。他人、世間の価値観に合わせるのではなく、自らの価値観を信じる。そこがぶれないことが大事なのではないのでしょうか。私の真実に乾杯してくれる、

純真で清らかな美しい花嫁を求めてまた旅をするぞ、人生という道程を。先生、今ほど薬が効かないなか、2度も正気に戻して下さい、本当にありがとうございました。聖書が2冊の本を先生にお見せしろと促すのでそういたします。お暇がおりではないのかもと想像はいたしますが、一生懸命つくったものです、その気持ちをお汲み頂き、お読み頂ければ大変、嬉しいです。本当にいつまでもお元気にご活躍下さい。陰ながら応援申し上げたいと思います。スタッフの皆様にも宜しくお伝え下さい。では——義人

吉本先生へ

私は現在市民病院のデーケアに通っています、みんなよくしてくれて楽しいです。真由子先生に失恋しました。彼の人の面影がいつということなく脳裏に浮かび上がってまいります。けっして病気の症状ではないでしょう。愛していました。入院時、私は神として、義のために大量虐殺ができるかどうか真剣に悩んでいました、そして私には荷が重く無理だという結論に達しました、神に天へ帰って頂いたのです。自由と主体性の象徴として伸ばしほうだいだった髭を剃りました。そのとき真由子先生が言って下さいました「大変なことでしたね。ご苦労さまでした」この人だけは俺の心を理解してくれている。そんな想いがやがて恋につながっていきます。吉本先生は言われましたね。結婚を考えるのなら統合失調症をよく理解して抵抗ないひとならありえるかもしれないと。もしかしたら、因縁ではないか。この女性が運命の人ではないのか。

もともと今回、軽いソウ気味だった私は、毎日が楽しくて仕方がなくなりました。入院中も退院してからも。深草の少将が小野小町にウタをしたため通ったように、私はワープロのキーをたたき、真由子先生に対し書簡を提出し続けました。それは奇麗事ではなく、自分自身に虚像をかぶせ、この世では社会的地位が違いすぎる、彼の人に釣り合おうと思いあがき続け、その愛を勝ち得ようとした、ただそれだけのものだったのかも知れません。聖書を開きました。「山から熊はおりなければならない」。つまり私がどう燃え上がったところで彼の人にステータスへの愛着、しがらみへのとらわれがある限りは、ことの成後は絶対、無理だったと言えるのです。パートナーがどんな辱めを受けようとも元気づけ寛容に受け止める。いやむしろ愛を深める。そして労苦を通しみんながあらのまま平等に価値があるものだとはハッキリと認識する。そんな風になるべきことだったのですが。私は愛を信じる。この世の価値観に浸る「若かった、お嬢さん」と片づけていいのか。でもそんな無垢なところが好きだった。彼の人のためならどんな悪人にもなる覚悟がありました。私が世間知らずだと。私は神である。道徳への忠節、クソ食らえ。世の中には悪人としての自覚がない罪人であふれているのだ。転任された病院、名字が変わっていました。受付に確認すると怪訝な顔をされました。駐車場で料金をきくと安くなることを整理誘導係のおじさんが教えて下さいました。「なんでもきかんにゃ、わからんかろ」その言葉は真由子先生に対して自分がどうであったか考えろと言われているような気

がしました。すべての責任を真由子先生に被せて。こんな私は無責任で。私は思う。ひとは優しくてタフにならなくてはならない。失意からの旅立ち。私に執筆意欲が戻ってきた。〔星飛雄馬〕大リーグボール2号は完成するだろうか。私は彼の人にとってひとつの障碍だったのです。もちろん私にとっても彼女は真実の愛へと向かう道標となります。私は自らの人生を振り返ってみました。虚栄、見栄、体裁、自己執着から離れていた女性はいたであらうか。ただひとり気になる女性がいました。それが老人病院で看護助手をなさっていたいずみさんでした。無性に会って今の気持ちを話したい、そう思いました。決して恋愛感情からではなく人として少しはましになった、自分を知って頂きたかったのです。結局、連絡はとれませんでした。でもよかったです、彼女のことを思い出して。先生、ありがとうございます。また私の道楽におつき合いさせてしまつてごめんなさい。とりあえず、まあ、私は本当に神みたいですよ。(笑) スタッフのみなさんもお元気で、それでは失礼いたします。

義人

事務長様へ

私は27年程以前そちらで職員として働いていた男です。体をこわし退職いたしました。決して恨み言を述べたいのではなく。ある女性のことが気にかかるのです。当時、介護に携われておられた方で、その寡黙で献身的な御姿が最近とみに思い出されるのです。ただ覚えているのは〔いずみ〕という御名前だけであと

は御苗字もなにも知見できないのです。そちらに現在も御勤務されているのかも、なにもかも。御年齢は50歳前くらいだと思います。もう御結婚されているかもしれません。私のような男が突如現れましてナニモノヨと怪訝な思いをされているかもしれません。ただ彼女にお伝えしたい儀がありまして、やむにやまれずという心持ちをご理解下さるようお願い申し上げます。なにぶん個人情報機密のおり私もどうしていいかわからずオロオロとし事務長様の御慈悲にすがるか術はないのではと、こうした次第に到ったわけでございます。結局なにを御話したいかと申しますと、もしいずみ様が、まだ御勤務されているのなら送付した書簡と資料を彼女にお渡し願いたいのです。その際に不審なものであるかどうかお確かめなさるのならそれは想定の上のことです。いずみ様の消息を確認するのが私の目的です。現在の貴院の批判、中傷を目的としたものではなく。ただ彼女に会って今の私の率直な気持ちを御伝えしたいだけなのです。ですから彼女にもし連絡がつながるようなら私の携帯の方へご一報いただきたくお願い申し上げます。もし私の思いが届かない状況にあるならどうぞ私が送付した一式、投棄なさってください。それで結構であります。不躰な礼儀もない書簡ではありますが、事務的に我が目的だけを記した次第であります。重職を担われ、お忙しい中、ナニゴトよと立腹なさるかもしれませんが（私の杞憂かもしれない）平に平にお願い申す次第であります。暑くなります。ご健康には十分ご留意されてご活躍されることを祈っております。では。 義人

拝啓

逢えなかったいずみさんへ。

おひさしぶりです。いかがお過ごしでしょうか。私の症状として夜半に赴くと積極性といえばいいかな。いろいろ計画が頭の中で誕生します。若干ソウ気味です。ここに起承転結のない書簡と一冊の赤くて白い表紙の資料を謹呈させて下さい。私の25年かけて変遷した大げさに言えば個人的思想史と呼べるものです。しかし「今さらなんになる、向こうは迷惑としか思わないぞ」という声が聞こえてきます。「でも普通の良心の存在する人なら必ずあの地獄の世界を今も思い出し苦しんでいるはずだ」そう私は信じるのです。資料の内容には少し自らがヒロイズムに浸った感もありますが、「愚直で負けず嫌いの男が策士を演じた悲劇」が根底にあるのがよくお判りいただけると思います。私はよく大きな声でエールのつもりでみんなの前でおどけてはじめていましたね。それが悲しいのは善意で献身的に介護、看護にあたっておられた若い女の子を含め女性たちの気持ちを結果的には踏みにじることになり心に大きな傷を負わせてしまったのではないかと悔悟の念があり、慙愧に堪えなく、いまはただ頭を垂れるしかないということです。しかし私の本当の目的は、怠惰な自己中心的な我儘者たち、貧欲な金権主義にはしる守銭奴たち、そういったものが生み出す悪意から、いたいけな真面目な人々を正義で守りたいその一心にありました。いろいろと責任の所在を考えると保身にはしる人が大半だったでしょう。そしてそこには信頼からの平和は絶対なかったのです。人が

素直に当たり前に思いやり、愛を尽くし働くそのことは困難なことなのしょうか。「善意で殺されるひと、悪意でめしにありつけるひと、そのつじつま合わせに生まれてきたぼくら」といううたのフレーズがあります。確かな民主主義というものがヒエラルキー（階層組織）で成り立つ職場に存在するわけがないのであるなら、やはり私はああいったトキの声を上げねばならなかったのです。悪意の顕在化、潜在化、いまも社会には不平不満をもって蔓延しております。自分への固執、執着、そして欲望への満足を知らない渴愛。ある女性とその一派を、拝金主義を標榜する大きなターゲットとして無謀な戦いを仕掛けた私は確かに愚かであつたでしょう。しかし義に生きるもののその行動はすべからず愚かに見えるもので神の愛もまたそのようなものなのです。私は自分自身の境遇が辛く、悲しいと思ったことはあまりありません。ただいろいろ見聞するといまだ人々のなかに愛を確立しえないことが本当に哀しいのです。生活のなかで傷ついている人たち、この負の連鎖は自分もそんな立場になるかもという想像力からくる恐れと、なにより愛に基づく思いやり以外、それを断ち切ることは不可能だと思うのです。なぜかな、愚痴をこぼしてみました。あなたもきっと問題意識をもって日々、利用者みなさんへの介護に携わっておいででしょう。長くなりました。暑くなります。体調には十分、留意されることを願っております。それではこれにて失礼させていただきます。

敬具

追伸 元気でいて下さい。しか言えません。

そして白くて紅い日々について

医療の白、戦いの紅。
悪魔が囁く、誘惑と侮辱の言葉。
競争、法人が発展していくとき必要である。
そんな日常を正常と呼べるか。
大きな声では言えないが我が身が大切だ。
先輩、上司は自らの安全のためなら新人を
潰すくらい何でもない。
都合のいいように自分に固執する男と女。
施される人格改造。
おもちゃのように扱われる利用者達
そこは地獄に見えた。
愛でその負の連鎖を断ち切りたかった。
皆、自分が可愛い。そこに気付かなかった。
そんな一途な漢の話です。
命とは、人間の尊厳とは。お人好し。愚直で不器用
な平和を愛した、ひとりの若者の切なる話です。
当時すべてが正しく見えなかった。
愛の居所が見えなかった。
それが悲劇であった。
だが名誉欲は私にもあった。
私も例外でなく彼ら同様、罪人である。
罰を受けた。 回心した。

悪循環のなかにあった。人々は後輩に追い抜かれたくないし、後輩は手柄を立て上にあがりた。だれが競争をかきたてるのだろう、みんな必死になる。一番最下所にいる人間にとっては、かなり不安だろう。しかし席次とは必ずつくものだ。雇用を打ち切られる、能力がなくともひたすら懸命に実力を訴えようとする。だがそれは大間違いだと気づくだろう。上にいるものも管理能力を評価される。結局、生活できる、みんなが食えるということが大切なのだ。新入りはとりあえず従順であることを示し、先輩をたてることを宣言しなくてはならない。さすれば先輩は位置の安定が少し保証された気になって優しく指導してくれるかもしれない。順番、年功序列は、神経質で締め付けの強い小さな商社にあった。あまり上からの締め付けが強いと若者はやる気を失い、仕事に対する士気も低くなる。私は商社を去る。この話は30年前、のんびりしていた頃の、事務屋のことだ。愛友病院に入ったばかりの私は処女のようにおとなしく、彼らがつまらぬ縄張り意識でもめるのを、ジット静観していた。だが心のなかでは娼婦のように計算高く、どうしたら改革の為此の既得権益、岩盤規制を打破れるかそのことばかりを考えていた。しかし上司の基本は部下の管理にある。私が自主行動するということは彼らの常識に適合したものでなくてはならない。この矛盾、私は縦割り体制を打破するため事務員でありながら運転手もシーツ交換も頼まれればどんどん引き受けた。私は病院内に風を通したかった、3年計画を立案した。「愛友の

常識は一般の非常識、一般の常識は愛友の非常識」みんな陰で囁いた。その計画は怠惰からの既得権益の撤廃と、仕事量の標準化をめざし、ある意味では成果主義的なものの導入が予想された。だがそれは上からの締め付けだけが強くなり労働者には利はなく、お互い大して報酬に差もないのなら仲良く適当にやるほうが良かったのではないかと今思う。厳しく大きな声は要だけでいい。清廉が苛酷になってはいけなかったのだ。私は商社の営業職の経験があり、かなり仕事にたいする強迫観念を持っていた。戦場のような職場から移ってきた、社会人としても未完成な私は、密室にこもり好き勝手をやりさぼっていることが確実に判断できる二人の先輩を軽蔑し、その不誠実に憎しみさえ湧いていた。その怠惰を要領がいいだけではかたづけられなかったのだ。彼らの職務怠慢への抵触要件は十分だった。病棟の現場で、死に物狂いでボールペンをにぎりカルテにむかう私には安息はない。その仕事柄、厳しい責任がつきまとうのだ。と思ったが。総務課長は「あんたには責任がない」と言っていた。つまり彼の依頼する仕事をことごとくはじきかえしていた、女元締めが責任者だと決めつけたかったのだろう。彼女の社会主義的な思想からくる、依怙最良にも問題があった。またみんな利用者に対する非道は自覚していた。だが自分が可愛い。そんな良心の不具合が職場を鬼の世界にしていたのは自明の理であった。私が内部告発をすればよかったのだろうか。では「具体的には」問われれば返答しえるだけの、知識も見識もなかった。私は「正義を訴えるのは労働者の権利」だと話すくせ

に、自らの手は汚さず、安全地帯に逃げ込み、保身に走り、実際に、献身的に看護、介護に携わる人を批判する。そういう事務屋の人間、体質、が許せなかった。怒りが常に心に燃えていた。まともではない。私が精神疾患で倒れたあと、労働組合の展開をめぐる盗聴騒ぎなどがあったことを新聞で知った。その後経営者が遷り、自己本位な彼らを結局、排斥することに成功したかたちにもなった。ではさぼりという悪行へのセーフティネットは準備され完成されたのだろうか。私は確かに病院内の神経質で幼稚で残酷なムードを清廉なものに切り替えたという自負はあった、だが無責任な自己満足の思考の域を脱していないかも。しらけた思いがあるのは事実だった。むしろ働く環境は、純朴さをなくし人間関係は冷たく悪化したのでは。いや私の一人きりの狂言は清廉と思いやりをもたらしたと信じたい。なぜなら狡猾な怠惰は苛酷に甘え、すり寄り存在していたからだ。それは親密に見えて、実は悪辣な非情が本質であった。また私に功績があり、本当に改善されたとするなら、それは継続していくのか。そして働く人々の幸せはどうなったのであろうか。すべての面での締めつけ、ノルマを厳しくしてしまっただけの、単なる苛酷のさきがけになってしまっただけではないのか。殺伐とした介護の現場、サタンに対し眼に見えない世界で影響を与えた神として、牧歌的な雰囲気を消し去ったと後悔するべきなのかと強く思うことがある。私は改革のための捨て石となればそれでよかった。後の人に構造改革や利用者へのサービスの向上、働く人のケアなどの案件に真摯に取り組んで

いただければ幸いです。本当にひと相手の仕事はたいへんですねえ。子供、わらうな、いま来た道。年寄り、わらうな、これからいく道。自分の未来の姿、対人関係。思いやりあふれる想像力が、虐待など悪魔の暴挙から、愛を取り戻す最善の方法であることは疑いのない真実なのである。世界中、愛に包まれればいいなあ。だが、自己犠牲は絶対によくない。これはハッキリ言っておきたい。自分も他人も傷つけてはいけないのだよねえ。「二人の男への私怨に過ぎない」。その疑義も拭い去れない自分が現在生きている。時宜という潮流に、私はかく乱されたのかも知れない。精神科閉鎖病棟、盗んだ、新約聖書。神としての自覚がここより始まった。その場で皆に配慮した、暗黙のさぼりは、安息に向かう起点だと今頃気付く。私は他の人間性に対し、あまりにも厳格だったと言える。それは潔癖と同様、独善的な孤立した罪を作るのである。私はいらぬ敵を作り、多くの人を傷つけたのかもしれない。その罰は、多くの痛みをもって受ける所存である。時代の変化とは、いつもそんなものであるのかもしれない。

ある男の話。私と同じく母子家庭で、年頃も近い。その男が近親相姦しているのではと噂された。かつてなら侮辱されたと怒り心頭であったが、なぜか冷静に対処できたそう。そしてその元凶の友人へ「そんなことはない」と否定のTELを半分笑いながらしたそう。その友人はあるスポーツマンの精神科に所属する看護師に性的興味があると吐露し

た。「変態」男は哄笑したそう。友人の母親は数年前、卵巣癌で亡くなっている。父親は売薬さんで、遠地で年の3分の2を過ごす。厳格な男である。どうも怪しい。友人は父親より祖父に生き写しなのだ。もしかして姦通、不義の子。友人は言った「僕には腹違いの兄弟がいるかもしれない」。聞かされた男、友人の母親の生前に渡辺淳一だったか、秋吉久美子主演の「ひとひらの雪」という映画がTVで流れた。「よかったですね」不倫の誘いかもしれないと思ったそう。男は美しいニューハーフが好きだ。過去に悲しい思い出がある。「彼女たちはけっして妊娠しない」そういつていた。そして友人の母親そっくりのニューハーフが、大事にしている一枚のDVDに姿を現せたそう。マスターバージョンを介在になにかの交流だったのだろうか。愛だったのか。男は言った。「あんな変態でケチな馬鹿息子とガチガチな面白味のない亭主に囲まれた彼女はカワイソウだったなあ。やってやればよかった」私は言った。「お前も俺もEDだ。所詮、無理だったろう」母親は姦淫の罪を重ね、罰が当たって死んだのだろうか。真宗を信じ、極楽へ行くと確信している戸籍上の父親。真相は藪の中だが。友人は言った。「お母さんは若いとき奇麗だった、だから年をとってからの写真を嫌がった」女の半生。謎と秘密に満ちている。友人はもしかしたら自分の姿を男に投影していたのではないだろうか。精神的近親相姦。私はみんなに尋ねたいことがある。「もしなんでもひとつだけ願いを叶えてやると神様が言ったら」私はかつてそ

の問いに「世界中の美女とやりたい」と答えた。しかしこれは体力的にも無理があるし、いろいろなしがらみを考えると現実にも可能性があっても私の性格では不如意だと思った。結局、最後は「欲望をすて無になりたい」と答えを訂正した。今でも思いだすのは「できることなら南無妙法蓮華經を百遍唱えたい」と願っていた年配の精神障害者の女性である。年月は流れた。健在だろうか。様々な女たちの思いを汲んですべてよろしく南無妙法蓮華經。母親は晩年、近所の女の子と紙風船を作り微笑んでいたそう。自分の人生はどこかに預けて。「しっかりしろ、この変態野郎」これが神の声だ。

王家の血筋。イエスも私も女体より初めて出る先頭の男子であった。その後、肉欲（性欲）人の欲（金銭欲、所有欲）から離れた神の子たちの誕生を迎えたい。釈迦は王子に生まれたが、生きとし生けるものの命は大いなるものに平等に生かされていると言う。日蓮は漁民の低い身分に生まれたと自称しているが、後に日本一の法華經行者だと名乗る、私は酒屋、イエスは大工。釈迦は乞食になった。つまり結果は魂と靈の帰結である。「日蓮の言う真言亡国。まじないにて、渴望を肯定し勧めることは、正しき道を求める心を閉ざすことであり、日蓮の発した言葉は警告のものである。南無妙法蓮華經は心からの感謝の言葉である。魂を善に向け、物心共に安樂が与えられ、その感謝によって愛の連鎖は永遠にくり返される」。昨今、僧侶も労働の趣がある。が、私

は、真心からの布施により、満足、心ゆくまで、たくさんの人たちに、釈尊の教えの真髄。イエスの説く神の国の奥義を語り、日々を送りたいといつも心に想い願い、これに優る幸福はないと領解しております。でも自利の欲望の域を出ないか。利他の菩薩行の実施が大事。隣人達と共に法華三昧、うちわ太鼓をたたき南無妙法蓮華經の唱和。それでいい。巷の念仏の春の嵐には負けないよ。

戦争とは、生きるために殺す。母親の泣く声も互いに後ろ姿で感じ、息子には届かず。敵に向かってまっしぐら。なぜだ。生きるために死ぬ。守るために死ぬ。そして生きるとは、守るとは。国体のために非情はなされることなのか。平和に楽しく生きることを目指してこそ人間の営みの矛盾は解決されるはずだ。弱さのなかに思いやり、憐れみは存在する。みんな弱さを誇りましょう。そういう人たちは人一倍、悲しみに敏感であり優しさを追究しているからです。そう、そういう人こそ本当の勇氣というものを見出し真に強い人になれるのです。人はいつも目覚めていなければならない。極端な、自虐、節制やまた反対に享楽、放蕩などは惰眠しているのと同様です。そして回心したとき、また眠りから覚めるのです。神も仏も大喜びされるのです。また神がいなくなれば聖霊の戒律はなくなり人間たちは自分勝手に倫理観を打ち出し、人々の生死は、もはやペット、家畜同様のあつかいに落ちてしまうでしょう。そこにはまだ愛はあるかもしれない。しかし個性な

き戦はもっと悲惨で酷く、ただの人形、物としか、心なき人は思わなくなるでしょう。殺される方も理性は恐怖によって白紙状態になり、感情も平板化され、物体性に輪を掛ける。それはまた殺す者の非情さにも拍車をかけ、兵士の良心をマヒさせ、その残虐さを助長するのです。それがジェノサイド（民族浄化）大量虐殺の実態であります。無神論とはこれほど恐いことなのです。なぜ目がある。なぜ鼻がある。なぜ口がある。なぜ我々はここにいる。なぜあなたと出会う。不思議、神がいるからです。そこには深い意味があるのです。そう思うことが幸福へとつながると信じてください。お願い致します。いつも私は祈っております。私の心にもあなたの心にも神が存在し続けるように。私は涙をためて祈り続けたいと思う。本当に。ああ、南無妙法蓮華經の音声聞こえてきた。

前に「義で大量虐殺ができるかと思い悩み、私には無理だと、責務を放棄し神に天へ帰っていただいた」と記した。後、神は観念として私の敬愛、信頼の対象となった。私はみるみる回復し、傲慢から離れ、神を愛する従順な人間に戻って行った。観念の神と私が一体であることは、統合失調症の重症患者ということであり、私が神として、この世界で普通に現実的に生活することが困難だということだ。「入院時しばらくは、閉鎖病棟の、電話ボックス、面談室、エレベーターみな、人々の外への痛切なコンタクト願望や、また様々な妄念がうごめいており淀んでいる場所でもあった。

私はその空気の持つ重さと、悪魔の攻撃に押しつぶされそうになり、一時の間も体をその場に制止させていることが出来なかった」。また入院直前は食品には添加物がふんだんに含まれおり、食せるのは塩むすびとゆで卵だけであった。テレビ、新聞は欲望を掻きたて、また不幸とクライシスを叫び、そばに存在するだけで苦痛だった。マスコミは悪魔に支配されていると確信した。私は薬を服用しながら、聖書が明かす聖霊に導かれ、自省し、神としての示現を保った。聖書とのダイアローグ（対話）が私のイエス、神だと言うことのエビデンス（証拠）を担保してくれる。神と義人の関係は単純に離れたり付いたり、この世の価値観から判別できず、次元をも飛び越え、例えると水銀のように集まるもの。深く神聖である。そして地位、名誉から離れたところに存在する、大きな権威であり、すなわち愛である。権力に対しての愛というと何かホンワリとした雰囲気にとらえられるかも。愛は大きく暖かい太陽の熱と光線みたいに按配よく包み込む、力強い、想いに満ちたものである。「あなた方は父を重んじているようで、軽んじている」イエスは言った。誰でも私を受け入れるものが兄弟、姉、妹、父、母、である。できものだらけのラザロは死して癒されアブラハムの隣に坐し、冷酷な金持ちは地獄よりそれを見上げた。終わりの日もそうなるだろう。憐みに泣いたものは笑い。嘲り笑ったものは泣くことになるのである。それが道理だからである。イエスと神は一体である。神がおらずにイエスが王になることはないからである。心美しく、正直に生き、この世で恵まれない人ほど神の

国に入る。成功者は悪魔の体制を肯定するからだ。そんな中、自分を打ち立てる、つまりアイデンティティーをしっかりと確認したものがサトリを得たと言える。生きものは危険より逃げる、だからこそ個体は維持される。弱肉強食か。いや逃げるのは作用である。互いに布施し合っているのである。欲望は自然で良きものと言う。だが煩悩となる。渴愛を滅し制御する。みんな難しいと言う。「千華物語」のあとがき、世の中、欲望からの悪心を肯定するもの、また自らの危険な邪心を意識しないものはたくさんいる。サトリに達するとは自他が発する悪意を除き、棄て、プラブラと何も考えずにいる。そういうことである。ただ存在し光のように生きる。プラブラ暖かく。

激
す
る
さ
と
り

嫉妬深いある男、欲深いある男、共に精神の病はよくならない。飛行機に乗るとき、私はその命運を自らの神に委ねる。だが登山、跳び箱、水中への飛び込み、鉄棒などは、なぜか自衛本能がはたらき、自分の中の神を試すよう思いきれず躊躇する。一度だけ危険をおかしたことがある。中学1年のときだった。廃品回収。私は悪友たちと卑猥な雑誌を獲得するのに必死になった。ある倉庫の高所にてそれらを隠匿した男がいた。男はそこへ私がたどりつくのは無理だろうと、馬鹿にしてニヤリと笑った。私は手持ち分だけある、鳩の糞の付いたさびだらけの鉄段を女性の裸体みたさに懸命に登った。性欲とはときに大きな原動力を生む。しかし扱い方を誤ると本当に恐ろしい煩惱となる。現在その倉庫口はセメントで封鎖されている。そして見上げるとき、その高さにびっくりするのである。当時我々の所業をみていた大人はいたのだろうか。落下すればただでは済まなかった。今、足がすくんで、震えるのである。強い肉欲はどこかへ去ったのだ。

ヘンな宗教冊子を読むより、自らの良心に忠実に、ゆとりと愛、思いやりを抱き保って行くことの方が大事であり、権力をもったこの世の神に追従することはやめなければならない。それは光の天使を装うサタンだからだ。良心は道徳から生まれるか。むしろ良心から道徳は生まれなければならない。戦時中、母に似た女性を殺せなかった、片目の男は自分が情けないと思っただろうか。母親のようにみんな助けたかったのか。欲しないことをやるのはよくない。人間としては好きなことをやって、嫌われて死ぬのも

よかろう。しかしストレスを周りにかつげ生きて行くのは最下等である。エホバの証人の勧誘員が雨の中、訪問に回っている。「あなたがたは断る、みんな不実で死に至るべきもの」と思っているだろうか。ただノルマ、役目を果たすだけ。自己犠牲と言う、つまり偽善者である。だが確かに誠を尽くす価値のない人もいる。私もそれを切り捨てる。所詮縁なき人だからである。栄光とは即ち、サトリ、何度もいうが、神を愛し、信じ抜くものは、必ず幸福になる。そのことを知ってほしい。あわせませう、どんな人とも、どんな場合でもいい。(南無阿弥陀仏)の世界。報われなくても、どんな時も、正義をもとめる。安楽に。(南無妙法蓮華經)の世界。HANABIという映画がある。愛する難病の妻。高額医療費を支払うため、ヤクザ、警察、銀行すべて敵にまわす。神はどうだ、愛する伴侶のため善を捨てる、男は利己的か。その慈悲は仏ではないのか、やはり仏は善に拘るか。神は妻を救えないのか。神の目的、愛を知らずことが第一。結局は皆死ぬことを知ってほしいのか。罪を作ってはいけない。それが救いである。「イエスを信じる」、神(愛)の心を持った人間。世間にたくさんいるかもしれない。何が善だろう。因縁が響く。絶対生命尊重、南無妙法蓮華經の唱題に灯がともる。親友よ、えらく出世したな、俺の今までの労苦を、お前は一瞬で刈り取るつもりか。でもな。俺は世の価値観では測れぬぞ。お前が望むなら、そんなに辛いなら、死んでもいいのだぞ。死ぬのが一番いいのだ。後はまかせとけ。もし死なぬなら南無妙法蓮華經と唱題

すべし。　　霊（心）と水（施し）をもって神を礼拝せよ。　　勤勉という道徳に呪われている人々。どれだけ便利になって、発展して新たな文明が訪れてもイノベーション（技術革新）という暴力に追い立てられ、安息は遠いところで手を振りもしないで、寝そべっている。効率化とサービス向上の大義名分にまみれ悶え苦しむ現代人。　　介護士。金やモノという価値観とは別のところに名誉はある。　　心の空しさ、追い求める欲望。幸福の観念がサタンより与えられたとする。愛が見えなくなる。そして呪わしきものを許すことになる。　　合同結婚式、意に沿わない見合い、神が決めた男女の結びつきとは違うのだ。恋こそが全て、美しい心で互いを想い合う、慈しみ、育む。これが神の決めた結婚という契約に繋がる。縁はある。恋愛と結婚は違うのでは。そんな声もする。いや、やはり特別な感情、愛のない結婚はいただけないな。　　ED、女性でも性的現役を終えた人はいるかもしれない。たとえ世界が存在しても自らがいなくなれば無意識になる。　　猫をお救いさせていただく。自分が辛いから。私の気持ちが救われる。　　仏陀が現出するのは、海の上、穴の開いた板切れに亀が首を出すほどタイミング。合えるのは凄い幸運。我々が誕生するのはどうなのか、神の技に包まれる、世の母親たちは利他の精神、人助けのつもりで子を育てなければならない。ひとは腹が減り死ぬと思うから喰う。会う。もし死んでもいいなら布団にくるまり寝続けて、喰わないだろうか。　　与太郎は仕事がいや。死んでもいいのか。査定からくる能力の差がある。しかし苦しみはどこの

位置も同じである。聖書、使徒行伝、アテネ人に向けたパウロの言葉。「この世界と万物を造った神は天地の主であるのだから手で造った宮などには住みにならない。また何か不足しておるかのようによ人によって仕えられる必要もない。神はすべての人々に命と息と万物を与えまたひとりの人間からあらゆる民族を造り出して地の地面に住ませ、それぞれの時代を区分し国土の境界を定めて下さったのである」先本の明治天皇のたとえの如く日本の皇室も遡れば聖書の神へと行き着くのである。そして神は与えるばかりで何も求めているないのである。いやひとつ望んでいるとすればそれは愛が広がることそれだけである。皮膚の色素が欠乏するという個性をもっている背は少し低いが器量よしの女の子がいた。[いずみさん]といった。私は病院の事務職員。怠惰を憎み、権力闘争に明け暮れる中、寡黙に献身的に利用者の介護にあたっていた。なぜか私にだけつっけんどんに甘えたしぐさを見せていた。いや勘違いかも私に文句があったのかも、どちらともそうだといわれればそうだったのだろう。時は流れた。責任のある年配の女性は「私の学級クラスにもそういう人いたよ」と、気にするなというニュアンスで立ち去ったが、軽い知的障害のある娘は私の「障害者で良かったね」という言葉の意味をちゃんと理解し「そうだね」と微笑み返してカレー用の皿を拭いた。彼女と私はいま就労支援B型のカレー屋さんにいる。神は祭り、犠牲をもとめていないとある。ただ愛に基づいて生きてほしい。熱狂的な祭りそこには理性のブレーキの効かない群集心理が渦

巻いている。戦争のように危険だ。そして命をかけ立派な最期をと、呪われる軍人たち、兵士たち。死、どんなみっともなくてもいいではないか。その時はただ死ぬ。勿論戦死など、そんな因縁は御免被りたいが。犠牲に名誉を見出してはならない。死に、報おうとするから戦争は終わらない。ただ明るく素直に温かく、そして心に神を愛す。それが一番大事。真実の想いがあるなら悪因縁は去っていく。聖書の中味は、自らによる未来の、幸福の示唆。富は比較、追従、虚栄、高慢、貧欲、嫉妬をうむ。貧困は心に神が宿れば賢さをうむ。釈尊ととらえると乞食から、のたれ死となるが、仏陀としたら人間の本質的自由、苦しむ輪廻からの解脱を示したとなる。つまり仏教、仏道は仏陀の存在と御教えにあり、すなわち仏陀とは法である。釈尊はあくまで個人崇拜を示さなかった。生きているだけでいい。だがそう思わぬ人は仏の手よりもれていく。イエス、日蓮は皆の自責の念に対して救いを呈示した。念仏は地獄におちたくないための、気休め。仏教がむづかしいというのは簡単がいいという自分が存在するからだ。私には善意を追求するとき、仏教の教えはそのまま心頭にくる。即ち自分は自分でない。義人である。姦淫した妻を追いつく、悪感情に生まれる悲劇である。だからこそ戒は愛である。また人は愛に生きる。神である、私にとって神の子との性交渉は近親相姦となり許されないのかもしれない。ひとは神を信じ、自ら行く末を守ることが肝要である。心配なく聖霊が内に宿る。職安でパワハラが問題視される時代となった。

神も社会の一員として生きてもいいか。憲法解釈みたいだが就労支援A型作業所は雇用となる。労働と生殖から離れている神に許されるか。まあ愉しくやればこだわらなくてもいいのでは。 荒野の七人。チャールスブロンソンが彼を慕う村の子供たちに言う。

「本当に勇気があるのは、お前らの父親たちだ。俺は恐くて家族などもてない」妻帯して諦観をなす親鸞は強いのか、弱いのか。すべて業縁であろう。我が子に対する無責任、世間に対しての虚栄心。そんな親に心の平安があるだろうか。親はただ神にすべて委ね、南無妙法蓮華經と唱題すべし。 釈尊は妻子を捨てた。すべて生きとし生けるものの幸福の追求のためであった。そして御自分はインストラクターになり、教団の為に規律をつくることを認められた。団体生活には必要だったからである。むしろ規律はいらない。なぜなら釈尊は御自分ひとりでサイの角のように悪魔の誘惑を退け仏陀になられたからである。死に際し阿難に規律の削減を申し渡している。自主性に関わる法が大切と遺言した。 悪魔は人間の世界では支配者とみられる。人々を抑え、世間でいう偉い人たちは権力を握っている。しかし神に仕えるあなた方はそうであってはならない。あなた方の中で偉いといわれる人は皆に仕えるものである。一番上になりたいものはすべての人への奉仕者となりなさい。人の子（イエスが人間として立つときの表現）は仕えられるためではなく、仕えるために、また多くの人の身代金として自分の命を捧げるため来たのです。 すべての人々は神の声を聞く機会が与えられた。ただそれを受け入れるかは、

各人の主体的な判断に委ねられている。この優しいが
厳しい姿勢はキリストの教えを通じひとつの例外も
なく貫かれている。楽園は神の国へ至るまでの安
穩の場所なのである。そして安息へ向かう。水滸
伝、林冲は高俅一派の罫にはまる。妻は衆目の中、膺
に指を入れられるなどの辱めを受ける。みんなに問い
たい。これが母親なら、姉なら、妹なら、だが乗り越
えなくてはならない。侮辱、凌辱は心に映すから起こ
るのである。齒を食いしぼり、また解こう。傷をいや
し悪に立ち向かおう。強い気持ちを起こそう。

私はかつてこの文の目的は「心の革命」であると
宣言したが、ある宗教団体のお偉いさんも言っている
みたいで亜流、二番煎じみたいでハッキリいって嫌な
ので、今回廻って「魂の改革」とします。人格改造み
たいな気もしますが、受取手の問題になるでしょう。
聖母マリアは伝導のヨハネに伴われ各地を転々とし
天寿を全うしました。私は希望を与えに来たので
はなく失望されるためにあるのかもしれない。だがそ
れは各人の錯覚であって私自身は、変わりはない。
愛を掲げるだけである。死は、実は孤独ではない。

「欲望を叶える」が幸福ではない。感謝する心が基
本である。皮膚の色素が欠乏するという個性をも
っていた女の子。介護の仕事に対し、どんなときも寡
黙に献身的に携わっていた。その憐れみの気持ちは障
害者が一番理解するだろう。人は欲望がある。幸福に
なるには、たくさんのひとに尽くし、その想いに添う。
そこに愛の道がみえるのだ。空しさから愛が生ま
れるとき大人になる。南無妙法蓮華經 ある貧しい

古い師がいる。ギリギリの女所帯だ。偉そうに上から語る。どん底な生活。だからこそ困窮の中、生きてく術を教授できるのではないだろうか。そこにレゾンデートル（存在意義）はある。愛は神との約束。自らの生き方を肯定できないから他人に依存、取り入ろうとする。清き神の国を打ち立て、人々の精神世界を愛によって、神は独裁する。もし死を迎えるならパラダイスにある。私はこれをめざす。一時の御守護ではボディーガードと一緒に。教義が正しくなければならない。宗教においては真の意味での完全なる懸念なき、たましいの御守護が大事。「父母へ、子へ、仕事へ」の責任感を捨てよ。すべて神に委ねよ。まず心を正すこと。愛により懸念なく、安心へと繋がる。「仏教は難しいと人は言う。慈悲を自覚していないからだ。心を善で満たす。なぜか。そうでないと世間に対し、仏の子は良心の疼きから苦しくなるのである。「難しいとか易しい」とかでなくピッタリくる。それが大切。心を愛へ向けよう」。釈尊は我が子を捨てた。だからこそ人々を執着、良心からくる苦より救った。口減らし、間引き、奉公、捨て子、墮胎。「良心を意識するな」と。偶像崇拜とともに無神論、念仏がはびこる。善きことは、天地人、因縁があるとき行えば良い。とくに人の和が大切。これで私だけで全世界の苦悩を背負い込まなくてもすむ。仏は遍満している。誰でも成仏の可能性はある。やはり教理こそが大事。仏法、南無妙法蓮華經に尽きる。それが絶対善。人々は神と同じ心をもつとき神と同格になる。戒の文字が聖霊により体になるキリス

ト者。仏が文字になる南無妙法蓮華經。　たとえ他への執着があれども、別れるべきものは別れ、真に幸福を分かち合う異性と結婚すべきだ。鬼による分断か。まずは、ただ己が身のことだけを想えよ。自然に偽善からは解放される。　人は言葉ひとつで鬼にも仏にもなる。　戦争をする、死ぬ。誇りはいらぬ。殺し合いの誇り。絶対に間違っている。　人はわがままに生きたいと思うもの、だからこそ、あえてサンガ(宗徒集団)が大切であった。独りで悟りを開いた釈尊(仏陀)だが、お弟子たちには、サトリに一番の近道、思いやり、愛、友情を学んでほしかった。　名誉の戦死でも遺体は腐り、うじがわき、破損する。名誉勲章をもらっても、死んだらみな同じということを感じる。人は生きる為によすがとなる愛を、何かが親以上に与えてくれると期待している。オウム真理教を代表としたカルト教団、天皇による徴兵などだ。それよりたったひとりのパートナーを愛そう。　無私であっても慈愛は消えない。　我執、我欲にあやつられる。捨てるべきは己の冷酷と渴愛である。　善行、心に愛を意識しなくても大丈夫。無意識に慈しむ心は湧いてくる。南無妙法蓮華經。　なぜ誰かが勝手に競争にもちこみ能力の差別をつけレッテルを貼るのか。どういう状況であろうと自分の意見というのは大切だ。いいことを照れずに言えるようになってほしい。わからないことをわかったように言う人は怪しい。自己をどこで評価するか。短所を克服した自分よりも、長所を素直に信じる自分が大切だ。　高慢を否定する。自尊心は大事。だがそれを挫く労働。認められな

いはらいせに何かをする。世間に恨みがある。自他ともに傷つけることになる。冷静に下がることを学ぼう。自己の尊厳を傷つけないために。欲望を押さえることができ、神を愛するために独身を守れるなら、その方がいい。情熱を押さえられないなら、宇宙で一番美しい契約、結婚を、神の前にてするべきだ。それは鮮やかに光るだろう。そして姦通へのハードルは高く青天井になる。姦淫は絶対に許されない。神、正義を誠実にもとめ続けるとき、聖霊が内に入り、戒を冒すような因縁は、たとえ欲情しても向こうから避けて行く。私は在る。だがいつまでもいるわけではない。つまりイエス、神の業をみて、ただたむろするのではなく、ひとりひとりが自分の中にイエス、神を確認し、それに基づいた、他を思いやる人格が芽生えなければならない。(聖霊の宮)そしてひとりひとりが、神を愛し、信じ、疑念なき、素直な心で自由、平和を祈念することが肝要なのである。法華経は宇宙の真理、即ち久遠の釈迦如来。神の具現、日蓮大聖人を通して、神すなわち私は法華経である。これが仏陀の智慧、慈悲。末法の即身成仏、南無妙法蓮華経の真髄である。永久に生き続ける神と仏法。これが神の義でもある。イエスはここに在る。R会、既婚者。「忙しい、忙しい」自分と家族のことだけ。家庭成仏こそ人々を離反させる排他的教えであり、スローガンである世界平和は皮肉となる。自己満足のデパートである。こういう人たちは世に迎合し本当に大切なものに背を向け、不敬にも唾をかけるのである。神は、正義感の塊の、父と母を選び、私を誕生させたのだ。神の霊、

観念は私を導き、支配し、真理をあかし天にかえった。私は神となった。神が離れたとき私は聖霊に包まれた預言者のひとりになった。私は人間でありこの世では、観念の神は存在を示せない。あまりにも人々の妄念が強いからだ。欲望を掻き立てるものが人々の周りを取り囲んでいる。サタンはその支配体制で、人々を散財、浪費（生活苦）、守銭奴、（生活不安）へと追い込んでいく。人々は救われない。そこには愛がないからである。神は人間として示現し、神ヨシトとなる。イエスを殺したのは富、名誉、地位を求める、妬み、そして欲深な人間たちである。悪魔、鬼は懷でかい法華經に帰依する。そして皆、自らの渴愛こそが不幸の元凶であることを知らなければ。父が子を殺し、子が父を殺し、兄弟同士で殺し合いが起きる。神を大切にすることがなくば、平和な神の国は生まれない。神を愛するとは、隣人すなわち親切な他人を愛することでもある。血族の安寧や、欲得だけで祈りを継続するものが大勢いる。だが真実、神と平和と自由を愛するものは、家族で殺し合うだろうとイエスは語るのである。そして旧約のアブラハムとイサクの関係。イサクを殺そうとする一瞬手前で、神はその信心を領解され、子殺しを止める。アブラハムの忠実な気持ちを確かめた。「皆もそうでなければ」、示唆がある。聖霊からの良心とは、内なる神にて他を想う己の心であり、疑惑などの悪意も持たず、また誘惑などの悪魔の試みを自然に退けるところにある。進歩、発展のための技術革新。その内側で犠牲になる人がたくさんいる。時間をかけ少欲知足が幸福につながる気がした。

少欲知足が道德への迎合と感じ、「誰かの評価を気にしている」と問題意識を持つ。その時、犠牲から離れ、無欲から本当の質素、儉約を知り、金は水のように流れ、私は完全にサトリに。いと高き頂きに立った。イエスの存在は私が仏として利他で霊（思いの根本）を善へと進めるとき己の良心にある。　仏は仏性をもつ人間の内外から、早く気付けとジッと見つめ支えているのだ。　良心は行動を止める臆病につながるともいう。人は物事の怖さを知り、乗り越える。聖霊の戒律のある所。神の住む一等地である。臆病は蛮勇において働けばよい。　医者がいるのは病人だ。精神の障害には正しい智慧と慈悲が必要。南無妙法蓮華経。　一生懸命やることが果たして他人の幸福につながるのか。逆に平和を乱すのでは。　「自分の権力を守りたいため、人の意気をそぐようにしむけるもの。　猜疑心を常に持ち、錯覚した安楽に満足かい」。イエスについていくとき、父母、子、姉妹、兄弟を捨てなければならない。このことは子離れ、親離れのこと。伴侶は捨ててはいけないうか、後、姦淫の罪につながるか。イエスの真意は愛の大切さを訴えたかった。やがて彼に信仰を持つ者は、皆、神の御使いとなる。

老人末期医療。痴呆症病棟、尊厳（命、精神）への理不尽。彼女は愛をもち、心の平和を保つことが辛すぎた。仕事は金の為だけと思い込もうとした。当時の私には、それはやはり乱暴で残酷な意味合いがあった。愛を掲げた私を敵視、彼女は己を慰める悪意に同調し保身に入った。（先の女元締めの場合である）彼女は富と名誉に固執し亭主の出世に資する金が欲し

かった。当時私には信じられない人であったことは確かである。聖人でなければ、差別はある。人種、性別、職業、収入、結婚、実際に存在する。では差別は許されるか。エスカレートすれば暴力、戦争に突入することもある。そこに悩むものは抑止力になる使命がある。暴動、紛争、生活不満からくる、道徳規範の逸脱だろうか、殺伐とした理由がある。そこに差別が絡んでいる。よくない、当然のことだ。偏見は育った環境の感覚から生まれる。それは聖人でなくても解る事実だ。想像力を働かせ、人の痛みが解る、大切なことである。差別は絶対悪である。キリストの死は、神と人の和解を取り持つためであった。からだか心か。金か愛か。群集心理に巻き込まれない。つまり孤独を好む。その方向で釈尊は最後ひとり修行を成し仏陀になったかに見える。彼の成道のとき、悪魔を含む、たくさんの生きとし生けるものが彼の周りを囲んでいた。結果。彼は、諸法無我、隣人の大切さを痛感した。「人は独りでは生きていけない。愛を信じる。孤独を選択し生きてはいけない」。まじないが人を救うことはなく、感謝というものが人を救う。神の国の王で障害者。神の国の王と自称した障害者金銭単位ミナとは愛。愛があれば魚もパンも与えられ、皆飢えない。優越感がないとは劣等感もないことだ。命はなくなってもいのちはなくなるらない。釈尊は名を残そうとは思わなかった。真理を見つせず、無意味に野たれ死をする。その覚悟で城を出たのだ。そのとき名誉欲というものはすでに捨てていたのだろう。そうだ友情がキーワードだったのだ。(就

職) 罪を許さないは、許されない。許すものは、許される。古いパンは捨てよ。小さい固まりから新しいパンはふくらむ。人は父母を離れ、男と女、一対になるべきもの。神の合わせたものを離してはならない。つまり神が合わせたものは、真実、因縁があるものである。本人らの意思なく離してはならぬ。神の意思に基づき、聖霊による本人達が決めた離婚は許される。不倫、暴力、借金も婚姻も破棄することは許される。そして真実の人を再び捜す。その底にあるのは愛でなければいけない。結婚とは「自分が幸せになる」ではなく、「愛する人を幸せにしてあげよう」を忘れてはならない。そこに安易な離婚は姿を消すだろう。だがとにかく愛が大切である。キリスト。肉は霊であり血はその水である。つまり霊(愛)と水(安息)を喜び飲んだものが終わりの日によみがえるのである。イエスの肉と血。十字架の死の贖罪を真に把握することが大事。法華經に守られ健康な肉体。法華經は悪、鬼をも包摂する寛容な性向をもっているからである。だが、その老婆、行いや心が、神に許されているかどうかは別問題である。緋文字(ホーソン作)の悲劇。開拓当時の米国、清教徒社会のきびしい戒律。姦通の罪を犯した人妻とその相手。非道な老医師と心ならずも結婚した女。その女を愛してしまった牧師。当時不倫、姦通は死刑に相当する重罪とされていた。21世紀の今日、米国はもとより日本でも、不倫は日常茶飯事となっている。作者ホーソンはこういった風潮をどのように考えるだろうか。不倫の是非善悪はともかく、みんな愛というものを真剣

に考えてほしい。人は本当に愛すべき人と結婚すべきだ。それが唯一、神の決めたものなのである。またこれが難信難解だが、一言「元気」と笑いかけられる。そんな人が一番ではないだろうか。独りになりたくなくとも、一人になってしまう。孤独との戦い。つまり誰も知らない自分の心。殺し合いをくり返す人間。最後は自分だけで「闇の告白」答えを出した尾崎豊。いまはサタンの体制であるということだ。死に場所を求めて彼はさまよった。欲望、煩悩ではなく安楽を、南無妙法蓮華經。知的障害者を雇用する。行政から補助金がでるのだらう。働く人たちが困るという。なぜだ。自分たちと同じ仕事の質、量をさせようとするからである。「あそんどられ」これでいいのである。職場でひとりぐらい鬼にならなくてもいいではないか。なぜ経営者でもないのに働かせよう、効率をあげようとするのであろう。ズルをこいて怠惰に走っているのではない。「まあ私も自分らしくやるわ」と従業員、皆が思ったら、このことは大正解となる。お上の意向とは違うかもしれないけど、知的障害者への世間の風当たりが優しくなることは、障害者、健常者問わず、明るくてさわやかな風が、頬をかすめてゆき、心がホッと温かくなる。幸福がひとつ実感されることになる。求めるところに門は開かれる。「尾崎の死。金か夢か判らない暮らし。夢、デビュー。若者の代弁者。サタンは分裂と恐れ。ひとつの愛をつかむ。バンド、メンバーの入れ替え。生存競争。人の罪。自由が失われる。だが歌わなければ。重い責任。覚醒剤により逃避。孤独。誕生。ひとはひ

とりでは生きていけない。だが皆、罪人だ。舞台裏のルーレットは回る。自分を撃ちぬく。母にありがとう」。周りはキリストの頃のユダヤ人と同じ。本当のイエスを知らない民衆。抵抗勢力へと変わった。短所と悪いところはちがう。結婚も仕事もどうでもいいこと、そこからはじまる。愛がまず先である。仏界とは即ち地獄なのかもしれない。欲求が否定されるのをクリアするまでは。また仏界に長くいると、人の生活が見えなくなる。同情をなくし、苦しむ者達への、慢心からの視線が。己を高くするものは低くされ、己を低くするものは高くされる。利発な反抗者よりも知的障害をもつ少年の方が気にかかる。マリアは聖書にイエスの弟子ヨハネに伴われ各地を転々として天寿をまっとうしたとある。愛があれば金はまわる。金があっても愛がなければ破滅へ向かう。金か愛かなどというくだらない話は、最早なくなる。競争、党派心によって生まれる富がある。愛をもってこの世の価値観の外側にいる私こそが、偉大な富者であり栄光は輝くのである。イエスの復活、再臨を信じるものは滅びることはない。仏教の真髄、諸経の王とよばれる法華経から南無妙法蓮華経を仏法として顕した日蓮と、神の義と愛を訴えたイエス。その総体の統合の象徴である、絶対者として義人は現れたのだ。つまりこれこそ神仏習合である。神は政治に寄りそっている。民衆の救済を求めたのである。そのことは幕末の吉田松陰の心には届かなかっただろう。門下生主導、長州藩の禁門の変はテロリズムであり、焼かれた京の町の人にしてみれば参画したやつら

は皆、悪いやつと見えたであろう。やがて薩長門閥政治が軍国主義を生み、国土は焦土と化した。結局、亡国、松陰の恐れたことが現実となったのである。日露戦争、日本がなくなっていたかもしれない。非戦論者内村鑑三がいる。釈迦国は滅びた。しかし釈尊の名は多くの人に教えとともに残った。つまり国の概念は移り変わる。EUのような東アジア共同体が出来上がれば、括り（国体）は滅びてもいいのだ。括りがあるからこそ悲慘がある。現に太平洋戦争ではポツダム宣言を受諾して大日本帝国は滅びている。枠組みより人々の生命、生きるための手段となる財産を守ることの方が重要である。天皇のあり方も問題になるだろう。執政する聖徳太子が理解したように世間虚仮、唯仏是真。世間のことは嘘であり仏の教えだけが真実である。釈尊の辛い気持ちが理解できたのだろう。カテゴリーの変遷は歴史を見れば一目瞭然である。ただ新しい豊かさがその段階で誕生したかと私はうつむいている。すべては時宜なのかもしれない。私は幸せである。何の取柄もないが、現在の日本で飯を3度食っている事実がある。へりくだるのは卑屈と紙一重になる。気を付けねばならない。つまり人を写す鏡となり相手に合わせ、反応し対処すればよい。人間ならとりあえず傲慢に毅然と生きよ。「宗教からの自由」。これは「宗教を捨て、科学を重視する」ではなく、私の因縁で神の靈感に繋がった様々な宗派。その本質の核をつかみ、真実の愛に転化させる。それが義である。つまり邪教かどうか、見定め、神の教えに照らし、私の養育者である、内に棲む聖霊が彼らの罪を定め、退

場させる。そして憐れみ慈しみでもって、神は人々に真理の行き先を、示し促すのである。これが宗教と言う縛りからの真実の解放、自由である。宗教が生まれる前に神は存在した。イエスには愛しかないのである。人々の病気を治しに来た。それは人と人を愛で結びつけ互いの尊重を促すためである。神であるイエスは人の気持ちを心底、理解している。尾崎が言ったように「自己、他己みんな悲しい。だからなんとかうまくいく方法がないか考える」。神仏、担保するものは思いやりである。人情論と思う人がいるかもしれない。だが慈悲を抜きにしては神仏の教えは語れない。死んだら律法から解放される。それよりイエスの死。戒律は、内なる聖霊の意志へと遷った。しないことをしない自由。しなければならぬことをする自由。したくないことをしなければいけない。それは難しい。「自分を大事にせよ」と勧めるのは利他に繋がる。「人を想うために自分を大事にせよ」と勧めるのが南無妙法蓮華経であろう。「自分は悪意がない。俺は神であるか」。自己への疑念から確実に自分が神であることを覚る。私は神でなければならないのだ。みんな自由に神を愛してほしい。南無妙法蓮華経。本尊。当体、日蓮大聖人が、久遠実成の本仏釈迦如来と一体となる。神は宇宙のために存在する。イエス、神一体。賢治の姿勢が時宜に伝わった。農民たちは娘を売らず、めしが喰えるようになった。失恋、裏切りを通し、悩みが生じた人々は、情を通ずることに無頓着になる、そして思想を求めていくうちに心持ちはイエスにつながっていく。神の愛へと。神を

愛するものには、パラダイス、いつもここちよい酒と優しい遊女が。そこに入る資格は明るく、素直で、温かい隣人愛に満ちたものたちである。差別も蔑みも名誉も地位もない世界。あるのは愛と呼ばれる思いやりだけ。たがいが尊重され自慢めいて人を貶め、上を行こうとする権力志向の人間もいない世界である。神は生殖から解放されている。なぜなら性感から妊娠へ、子の誕生。己を縛ることへ進んでゆく。また神は労働も適さず、そこにつながる搾取、格差、悪意から解放されなければ。そこに示唆されているのは、働く皆の原罪、懲罰からの解放、それは神の努力義務となる。すべてにおいて神が美しくおれる世界。嫉妬、憎気がない世界を神は望む。キリストの花嫁は何人でも良い。つまり肉の欲（性欲）から生まれるものではないからだ。製本は私が神と一体であるということのエビデンス。神の業である。あえて私は相手の価値観に合わせる。齟齬から離れる。そこから愛へ引き込む。欲望をコントロールして煩悩にしない。生きる意欲に結びつける。しかしなぜ生きなければならぬ。我欲に基づき再び苦が始まる。だが欲望を肯定しなければ、現世では生きて行けないか。達観し己を忘れ（意識しない）渴愛を滅す。ここにサトリはある。神はきたない田舎のスナックの片隅で安い焼酎の水割りを飲んでいる。そんなものかもしれない。自分がイエスだと強調し信じる。イエスの復活宣言を邪魔したペテロに「下がれ、サタン」。奇蹟は布教ではない。「誰にもいうな」イエスは強く自覚と自信をもつ。自分の生活だけを思うものは命を捨

てる。みんなのために尽くすものは永遠のいのちを得る。婚姻において同胞意識を互いにもつものは姦淫をせず幸せになる。イエスは言った。「私が王になるのをさまたげるものを打ち殺せ」つまり毀誉褒貶に負けるな。幼き頃、大人は「人格を向上させたい」を目的とし努力していて、みんな大概、立派な人なのだと信じていた。だが違った。ただ金儲けにうつつをぬかす、欲ボケの恥知らずたちだった。そうなりたくはない。では何が現実、幸福な大人への近道か、考究した。やはり金がすべてか。行き詰った。そして唯一の進路は仏へ向かうことしかなく、それはやはりパウロのように、天に選ばれた者であると天啓を受けた。己から離れ、利他の精神を大切にする者である。神は俺でなくてもよかったのかも。いや、やはり俺でなければいけなかった。俺は義を行う人間だった。神は示現したのである。すべては予定調和。優しく道理を通す俺しか神にはなれない。ただ、働き、食べ、クソしSEXして病を得て死ぬ。己の生を果たす。けして思い悩むことが無いのなら、それはすなわち元々の仏なのか。妄想がないからである。しかし煩惱、即菩提。苦悩から彼岸に到達するのが仏道でもある。科学の発展が幸福を生む。本当だろうか。当初、科学が発展すれば仕事が楽になり、空いた時間を有意義に使えると。しかし近況は見ての通りである。人間の欲望は尽きない。「もっと快適に」の下、過労死の続出。大乘の精神を持てば皆で幸せになれると信じた。競争を意識せず、あまり無理をしないことだ。釈尊はなるほど仏陀にはなったが、個人崇拜では

なく尊いのは仏陀の想いから出る教えである。つまり偶像崇拜ではない。仏陀は法である。釈尊も言われた。「私の卑小な身を見ても何にもならない。法を知るとき仏陀をみる。大切なのは法すなわち久遠実成の本仏である」 R会は「本仏釈尊に帰依する」がスローガンだ。親の心、子知らず。大きな要点をとらえず、釈尊への個人崇拜、偶像崇拜に置き換えた。そしてその趣意は飛躍し、開祖による代表者の世襲制の決定へと。庭野の専横はピークに達した、マインドコントロールは一段と進む。私の神であるという宣言は断じて我欲からではない。天下堂々、生きなければ。煩惱を打ち消して、仏になる。も、平和と繁栄をめざす王になるも、すべて因縁。徳によって治めるという転輪聖王。と、神の国の王。少し考えてみた。一緒なのかもしれない。私が誕生以来、いずこの組織に残留しても良いことはなかったろう。流転が求道者の宿命。法華宗。なぜ日蓮は釈迦を超えないか。日蓮は神、(梵天勧請)つまり仏の弟子だからである。また神であり仏である日蓮は久遠元初、釈尊に仏になる為の種を植えた師匠でもあった。イエスもダビデの子孫、だがダビデより以前からあるという。これ即ち久遠の本仏と同じ意味合い。神の摂理、永遠のいのちサムシンググレート（大いなる気）と言えるだろう。いのちと法は一体。旧約聖書の神はなぜ、人間に対し荒々しく残酷なのか。それは新約聖書のイエス。彼から命の重さと潔い身の処し方を学ぶ為に、対比させた、善への演出である。神（私）は人間の自由意志に任せている。だから現実的に繁雑ではない。

真実の美しさは絶対に汚されないのだ。楽園（パラダイス）は神の国へ至るまでの安息の地なのだ。

父は悩んだ。「自分は結婚していいか」。貞節で明るい母がそれを思い切らせた。男は破瓜をすれば、その責任をとらねば。婚前交渉は心ならずも、女は純潔を汚すことになる。みな戒を愛さねばならなかった。そして罪を感じている良心を救う為イエスは現れた。道端、悪魔に御言葉を奪い取られる。岩の上、試練のとき根が腐って枯れる。つまり信仰を捨てる。生活の心づかい、富、快樂にかまけて、実が熟するまでに至らない。祈れ、因縁のあるものは聖霊の宮となる。男女は平等であるが同等ではない。神仏を感受することにより、その真実の愛によって自らの内に聖霊が入る。それは内なる愛の確立である。イエスの罪の贖いに感謝したものは、犠牲ではなく神の意志とした殉教までも喜びとなる。義人は神の応身、つまり愛の摂理。仏陀の法灯明、齟齬はない。幸福に最も下はない。それは福音の内に不幸はないことだ。幸福は幸福、上下はない。幸福はけして煩惱を煽ることからは生まれない。単なる欲望を満たすことではないからだ。つまり幸福とは、決して乱れない、いつもすべてに満足という仏（聖霊の宮）の境地である。釈尊は人間である。仏陀との違いを認識しなければならない。「私を見てもサトリは開けない。仏縁を得て法を知る。この醜い体をみてもしょうがない」釈尊は偉い人である。（労働）と（生殖）は生活に巻き込まれることだ。あくまで布施、互いの善意によってつながる。神とは智慧で働きかけ、慈悲

を生み出すものであろう。歴史上、行われてきた、数々の宗教会議は人間が決定し異端、正当と区別したもの。神はまったく関与していない。神はただ聖書を通して人々の良心へと訴えかけるのだ。権力、組織は神の真実の愛を疎外するものである。徳を積むことと、向上心は違う。母は信心深かった。父がてんかんを起こす。だまされたと思ったという。すべては因縁である。祖父は信じていた、慈悲深い女はいると。そして母が選ばれた、聖母マリアとして。父は神に近い優しさをもっていた。私には天の父として生き続ける。俺はE D。だが、サトリとして、それを乗り越えた。戒があるゆえ、たくさんの男と寝る。姦淫の罪を薄めまた博愛という真水に到達するため。そんな女がいた。嫉妬があるから戒がある。戒があるから嫉妬する。それを博愛へ向けみんなで幸福になることが大切かもしれない。「私の寝た男たちと朝まで、お酒がのめるまで、私、男やめないわ」男に嫉妬心を克服させ本当の純愛ともよべる境涯へ導くため、女は気に入った男と寝るのである。若くても女はうまく人を立てる。男はどうしても個我がある、だから精神年齢が低くみられる。「男なんて弱くて愚かだからこだわるものなしに生きては行けない」そんなフレーズが聞こえてきた。会社にとっての人材とは、上司にとって役目、立場をふまえて良き案を提示してくれるものが最良なのであろう。ゴマスリは取り合えずしておいた方がよい。公につくすことで男は女を超える。女は内向きになるからだ。そんな気がする。生きて行く上で禁欲的になる。無私無欲で

なければ、煩悩にまみれ苦しいから。ローマ人への手紙から「神の国は飲食ではなく義と平和と聖霊における喜びとである」こうしてキリストに仕える者は、神に喜ばれ、且つ人々も受け入れられるのである。

精神障害の者は服薬を続けることによって夢、希望がかなえられるとの話を聞いた。この場合の夢と希望とは、醜くなる人相風貌。ED。持続力、忍耐力の衰退。薬の副作用が大きい。「なぜ皆、服薬をやめるのか」。そこに重要な問題があると思う。就職、結婚は失望、絶望のうちに諦めざるをえないことになる。私が言いたいのは、人間は高齢になれば自然に出来ることも出来なくなる。即ち、みんなの問題なのである。つまり夢や希望を単なる欲望の達成と安易に規定するのではなく、たとえば「ラーメンさえ食わせとけばいいだろ、満足しろ」という上からの施しみみたいな表現は、我々精神障害の者への蔑みにも思われる。そうではなく美醜、人類の老いを含めた普遍的問題への解決法として偉大なサトリにたどりつく、それが夢、希望であると打ち出されたのなら私は拍手をもって頷いていただろう。精神障害者は心のバリアに向き合い乗り越えることで、自らの思想と戒律に基づきサトリの獲得が、実現されると私は断言する。酒場で知り合った、女性と一夜を共にする。「恋をすると辛いので優しくしないで欲しい」浜田省吾のだいぶ前の曲である。男と女まずセックスする。それからだという。そして女は、心が広く優しい男と出会うため、遊びを繰り返す。男も一夜の快楽として流す。妊娠はピルで大丈夫か。からだから始まる笑みは二人の心に愛を生

まれさせるか。戒律のある私には、まずは羨ましい境涯ではある。私はかつて離婚歴のある女性と見合いをしたことがある。私は車の中で言った「ホテルへ行こう」。私は軽蔑され破談になった。私の母親の耳にも入った。私はEDだった。それを知ってほしかったのである。彼女は「軽くみられた」と思ったであろう。立松和平常作、根岸吉太郎監督がメガホンをとった「遠雷1」という映画の中で永島敏行が演ずる主人公が見合いの相手、石田えりにそのセリフを放ったのだ。「お互い、この年齢になるまでには、いろいろあったであろう。虚飾をすてろ」と。彼らは一度目の出会いでホテルへ行き結婚する。なんか影響されていたなあ。これで私の信用は復権することになるのかなあ。母の名誉だけは守ってやりたい。中島みゆきの「悪女」、また「泣いた赤鬼」の青鬼にはならなくてもいい。自己犠牲。ただどちらも自分はいい奴だと解ってほしかったのである。自虐的にならず自分のことを素直に表現して自然であることが大切である。そして唐突だがそしりはよくないが善意による客観的、分析、悪口は物事を向上、改善に導くかもしれない。しかし聞かされる傍は少し辛いときも。イザヤは偽善者に対して適切に「人の民は口先では私を敬うが、その心は私から遠く離れている。人のいましめを教えとして教え、無意味に私を拝んでいる。あるものは神のいましめをさしおいて人間の言い伝えを固執している」と言っている。エホバの証人へ、マルコによる福音書13章に明言されている。「すべて外から入って中に入って人をけがしうるものはない。人の中から出てくるも

のが人を汚すのである」つまり彼らが忌避する、輸血はではなく己の不品行が大問題なのである。自然に不快の意思表示がでる。嫉妬によって表情が変わる。良くはない。それは修養し、なんとかしなければ。その基になるのは感謝と寛容である。私にそんな悪感情に満ちた表情を見せてほしくはない。しかしそれは、人の心が素直に解放されている証ともいえる。まあ人間として修行に足をかける。第一段階、一里塚ではないのか。そういう人は、感情的でも正直だと言えるからだ。だが嫉妬心、権勢欲が激しく、他の意見を封殺する行動にでたら、かなりまずい。自分は自分、人それぞれ。何度も言っているが比較に悩む必要はないのだ。 国の枠組みは大切だ。国民の生命、財産を守る。これを保証することにおいては。しかし国民を戦場に送り出すこともある国家。「そこに成功の目的をもって近寄り迎合し、道徳を打つことによって世論に擦り寄ること。 国会での答弁。テンプルトン賞を受けるという名誉。国連での軍縮のための演説。自らまるで役者になった気分で晴舞台に立ち吠え、涙ぐんだ、権力志向に満ちた男がいた」。幾多の生活に悩む人々から巻き上げたカネで裏工作をしたのではないだろうか。 宗教協力と称しパチカンと手を結び、信用と権威を得、乱暴な手口でR会を組織として盤石なものとする。保険、出版、劇場。事業、資金源。金になることはなんでもやる。酒屋の母を苦しめた競合組織と同じか。この先、葬儀場はまさかつくったりはしないだろうな。今はどこの世界にいらっしゃるか判らない庭野さん。「あんたは偉い」健全な、誰か

の犠牲によって成り立つ家族関係を作ることによって国家に貢献した。 私が思うには会員たちは、一握の砂さえも救われてはいない。マインドコントロール、洗脳が施されている。 そこには数字と正当性だけに、重きを置く、暴力的カルト教団よりも、別の趣で耐え難いものがある。会員は「法の親子という濃い関係」が維持され、成り立つ権威主義的組織。 国家権力にお墨付きをもらったR会は、マスコミはじめ、世論など、どこからの牽制にあうこともなく、真綿で信者の首を締め上げるように、逃避するものを繋ぎとめ、縛りつける。すべては組織のガバナンス（統治）と資金のためである。精神世界へ正しく導く宗教本来の目的を忘れ、法を離れたのは、糸の切れた風と一緒に、この先、罰を受け衰退へ向かうことは必定である。そして聖と邪、そのつじつま合わせに存在する頑迷で高慢な女性役員たち。真実を知ることを恐れる彼女らには、自らの錯覚と、正しきものへの拒否と黙殺、いまはそれだけである。内省と懺悔、これは人に強いるものではない。だが本質的に「自らの歩いてきた道をよく考えてみなさい」これが仏様の声である。寺山修司はその幸福論の中で「幸福であることが他人に対しても義務であることはもちろんだが、自らの毒気を消化し、言いたらない怒りをさえ浄化してしまうような「幸福論」は、ほんの気紛れにしかないだろう。」 と言っている。怒りとは私には神の義からくる憤りに思える。即ち、利他の精神。キリストの愛（アガペー）の激走である。

結婚は苦勞を背負い込むことだと聖書は言う。

R 会は日蓮大聖人を一介の祖師としか見ていない。庭野と同列、または下とみている。大変なる不敬である。真実を追求する気概もない。また一人絶交をした。

ス
ミ

今から紹介するのは、かつて「真由子先生に捧ぐ」の中で私の父親との対比にとりあげた独身を通した呉服屋のおばちゃん、スミさんです。なぜこんな突拍子もなくでてきたのかというと今まで発表してきた幾冊の本を献上したところ気に入ったのか。作家でもない、神を自称する私に彼女が「自分の半世紀を書いてくれ」と度々依頼したからである。いささかお耳が、遠くなり説明がうまく伝わらない。二言目には製本の資金を提供してやるとほめかす。私もスケベ心を出し予算を考え出す。良くない。彼女が期待しているのは小説風の日記調ものみたいだ。私には無理だと言ったのだが、私のやり方でいいと譲歩してくれた。[おしん]のように7歳のときから重い牛乳をかついでゆく。みちすがら、足の不自由な父親の存在があつて、あえて差別用語を用いるが「ちんばのスミ」と同級生たちにいじめられ雪の中へ押し倒された。そのくやしさが彼女の原点にある。その恨みと共に、村の有力者でもある、校長先生に埋まった雪のなかから抱きあげられ助けられた恩義に、感謝がある。そのエピソードから、スミの「強く生きる」人生ははじまって行く。詳しく順序立てて話すと、その先生は「スミ、辛抱せよ、学校の勉強なんか60点でいい。心を美しくせよ、人をだましたりしてはいけない」と諭したそう。そしていじめに加担した子供たちの親を呼びつけ、スミに対し頭を下げさせたという。スミはもうひとりを非常に恨みに思っている。学校の小遣いをしていたお婆さんだ。「ちんばのスミ」。先生はこのお婆さんに「父親は、ちんばかもしれないがスミは、ちんばじゃない。

なんでそんなこと言う」と叱りつけたそう。なんか変だがまあいいか。父親は村長の番頭をつとめた。そんななかスミも女中として村長の元へ奉公にだされる。スミはこの肉親である、父親を徹底して憎んでいる。ここが、私が書きたくなかったゆえんである。「貧乏人、親戚なし」。村長のおかげで借金して呉服屋を立ち上げた。貸衣裳にするとする家について、「あそこの家は、大事な美しい娘にどこの盗人か人殺しかわからんものが付けたものを着させられるか、ゆうて反物を買ってくれた」と嘘をつき、ハラハラしながら、今度はその家について同じ口上を述べ、両方に講ってもらったという。すべて借金のハンコをついてくれた村長に迷惑をかけないためである。金持ちの医者、人間国宝がつむぎだした反物を財産にするため、たくさんもとめてくれた。さあそうなると9人子供をつくった父親は家計を担わせた長女のスミに「お前は長男のため、犠牲になれ、お前が建てた家はわしが貫う」と無理を吹っかけてきた。彼女を応援する人たちは芝居を考えた。「スミを隠す、そして商売ができなければ借金も返せない。銀行が家を差し押さえる」。父親は困り果てた。スミはそこで現れた。卵を盗むのはいいが肝心の鶏を殺してしまっただろうもない。彼女は因縁と血族にこだわる。ある八卦見にたずねると先祖はクリカラ峠の戦いで、金を貰い、人殺しを行った。その血族だといわれた。「罰は三味線に当たるものではない」という。そして高野山でも「父親は足が不自由だね、経文の上に出てきておる」と言われたという。私は何度も話した「そこに救いはあるかね」。

しかし彼女の人を恨む念は物凄い。私はヘトヘトになった。高野山に世話になった村長の御堂を立てるという。多額な寄進をした前田藩とゆかりがある人物の仲介ということで許されたみたいだ。校長先生の銅像も立てたいという。だが彼女が希望する場所はどこも許可がでない。彼女の周りにはひとがいつもいる。見栄、体裁がなくある意味で正直であり、感謝を忘れないからだろう。そして利で動く人間の欲望と心の機微を見抜くその才に長けている。彼女の半世紀を描く。参考にと、相田みつをの言葉が載った、こころの暦というカレンダーを渡してくれた。彼女の感想が書き込まれてある。伝わってくるのは「人間ほど恐ろしくて汚いものはこの世にいない。みな我欲の固まりである」主流の感想だ。そして興味深い文面に会った。相田みつを、がいう「受け身、柔道の基本は受け身、受け身とはころぶ練習、負ける練習、人の前で恥をさらす練習」饒舌だった彼女がいったん息を飲み込んだかのように「なんのことやら、ちんぶんかんぶん」と記入している。私にはよくわかる。私の父があえて罪をかぶろうとした、学級の盗難事件。真犯人に対し、罪を被せられるハメになりかけたスミがとった暴力の報復。貧しい家に生まれたスミと、特段苦勞もせず育った私の父。同じ年生まれ。ジェームスディーン主演の「理由なき反抗」のような高校時代を過ごした父。金儲けに追っかけられたスミ。世に出るため流したというスミのいう清い涙。我が父はただ弱いもののために涙を流していたのだらうなあ。〔日蓮は鳴かねど、涙ひまなし〕法華經に会え、やがて成仏できる嬉し涙。

スミちゃんにも解ってほしいなあ。「同情するなら金をくれ」スミちゃんの心とはちょっと違うな。ごめんなさい。

泣

い

た

馬

あとがきを書いたが、なにか物足りない気がしました。幾枚か、いろいろな観点から、今、製本にまわさずに控えておこうと思っていたなか、ある輝いた文面が、暖かい想いから脳裏に浮かんでくるのに気がつきました。かつてある方にコピーを依頼し、大変な手間を強いて、本当に御迷惑をおかけしたというか、[そうだろうなあ]。その時、好意的に本当に献身で協力して頂いたお姿に、私は絶大なる敬意と感謝の意を抱き、何かを表したいとかねてより強く思っていました。その方が私にお見せ下さった作品です。悲しくも優しい、心を、揺さぶり涙を誘う、本当に作者の人柄が滲み出ている。そんなエピソード。是非、皆様に、私なりに脚色してお届けしたいと思いました。

[馬が涙をためて我が家を去った日]

田おこしという農作業に、まだ馬が活躍していた頃の話です。「我が家は、山奥の村から移設したばかり、わらふき屋根の家でした。土間の一部を区画して馬小屋がありました。馬くんとよびます。家族同然でした。結ばれた馬くんのお尻が向く方に囲炉裏の部屋があり団らんの場所でした。しかしときどき父と叔父がとつくみあいの喧嘩を引き起こし、幼い私は大変怖い思いもしました。それをとめるのはいつも祖母のタキでした。そんな最中でも馬くんは「人間ども俺を忘れるな。はやく食い物をよこせ」と馬小屋の板壁を蹴るのです。いつも、一番年少の私が、彼が食べやすいようにわらを短く切って、

木製の容器に入れ水やこめかを混ぜ、入口にセットしました。待っていましたとばかりに彼は大喜びでむさぼりつくのです。名前はつけませんでしたが私と馬くんは大の仲良しでした。我が家は貧乏で馬に乗せる、立派な鞍はありませんでした。ある日、好奇心からか、どういつもりかわからないが、私は壊れかけた鞍の上に苦勞してよじ登り、狭い細い農道に乗り出しました。広い県道の手前で馬くんから降りるつもりでいました。私はなぜか偉くなったような気分得意気でした。すると、偶然、選挙の宣伝カーが拡声器を大声で鳴らしながら県道を抜けようと近づいてきたのです。馬くんはびっくりし突然、県道に向かって走り出したのです。私はこのまま宣伝カーに突っ込むのではないかと恐怖と戦慄で身を固くしました。急ブレーキ、馬くんは県道へ僅か2メートルのところで止まってくれたのです。良かった、助かった。全身の力が抜けて行くのを感じました。しかし予告なしの急停止。馬くんの首をすべり台がわりに前のめりになり地面に手をつき、ゆっくりと着地したのです。危うくセーフ。ああ良かった。馬くんはよく働いてくれました。馬は人を観ます。自信の無い人が手綱を持って前にすすめと指図しても小馬鹿にして言うことなんか聞いてくれません。畜生の分際だと腹を立てる人もきっとおいででしょう。いろんな思い出を残してくれた。そんな馬くん。お別れです。農家も機械化がすすみ、彼らは用済みとなったのです。私は小学校4年生でした。バクロウ（牛や馬を売買する人）が家に来ま

した。バクロウが馬くんをよそへ連れてゆくため、馬小屋から外へ引っ張り出したその瞬間、私の目と馬くんの目が凍りついたように見つめ合いました。そしてその時、大きな瞳にいっぱいの涙を浮かべていたのを確かに私はこの目で観たのです。今ならなんとかあったかもしれませんが。子供の私にはどうすることもできませんでした。馬くんはどうなったのでしょうか。馬肉として食べられたのでしょうか。それが馬としての生涯をまっとうしたということなのでしょうか。でもあの年寄りの痩せた馬では、きっと美味しくはなかったでしょうが。

かつてみんなが貧しかった時代、馬以外にも家族の身売りや奉公など悲しい思いをされた方はたくさんいるだろう。だがそこには愛があったと信じたい。豊かなのか貧しいのか判らない昨今。なんでも金で換算する現在、でも愛はいつも変わらず目立たないように見えても確実に存在するのだと強く噛み締めるのである。何度も言うが恐いのは「金が無い」ではなく「愛がない」である。そこをはきちがえると堂々巡りの不幸の連鎖へ落ち込むのである。口をすっぱくして言う。大切なのは愛である。そう愛である。

本当に善なる増井夫妻様どうもありがとうございます。
私が捧げるオマージュをどうか受け取って下さい。

あとがき

孤独のマラソンランナーは当時、私の心の赴くままに

あらわした戯曲。十七歳の精神の未成熟さが文言の稚拙さに比例して現れている。でも今考えても「本当に、安易には流されたくはなかったのだな」「問題意識を持ち真面目に何かを探していたのだな」と振り返る。私は今思う。仏身は安息を願うところにあるのでは。人は安楽にと、願わなくては、いにしえからの目的、安息の日は迎えられない。人は安らぎを蔑ろにして苦しい競争にいそしむ。この矛盾。私は建て前と本音の使い分けがなぜかできない。つまりズルができないのだ。思いやりある真実を語りたい。「金や名誉より大切なのは愛である」。社会や組織になじまないわけだ。だが、その不器用さが精神疾患とともに本当のサトリをもたらしてくれた。放熱への愛は尾崎豊の最後のアルバム「放熱への証」へのオマージュからタイトルと致し、様々なバリエーションを用意した。その根底には、真実へ向け、熱を発しながら片手で頭を支えて横たわる拙者の素直な姿勢と、大切な神の愛が存在しているのがご理解いただけるでしょう。しつこく「白くて紅い日々」をとりあげているが、それは顕微鏡を覗くように、拡大レンズで細部までしっかりと仕事、世界、世間、社会というものを見分したいと願うからである。結局、検証から生まれたものはすべて特殊論でしか定義できず、一般論としては一口には語れないという結論に達したのである。しかし生きて行くとき普遍的な友情、愛、そして理性は必要不可欠だと覚知するのだ。題字として自然に浮かんだ、「激するさととり」であるが、果たして静かなイメージのあるサトリというものが激しく昂騰することがあるだろうか。以前

「千華物語」のなかで「生きよ、生きよとほったてるものそれがサタンである」と指摘した。その対極にある、沈静化したものがサトリであるとしても、内部で活動しているマグマに呼応して活火山か、太陽のプロミネンスみたいに、サトリはなにかのきっかけで熱く吹き上がることもあるのだ。つまり正義はまず憤りから生まれる。それが恐怖にも羞恥心にも打ち勝ち真に感情を含みながらも、確かな理性というものを一貫して救うのである。そこに真理の鍵があるみたいだ。スミさんは75をこえる縁談をまとめている。「独身を通す身で嫉妬まではいかなくても寂しくはなかったか」と言う問いに反物を売ることによって頭がいっぱいだったという。実は私も2人の穏やかな女性の紹介を受けている。仕事、愛に悩んでいた私には不適合で彼女らとは縁がなかった。しかし人はやはり、まずは義では動かず利で動くのだなあ。スミさんは欲望を掻き立て膨らます密教を信じている。私がタイトルに付けた、「激するさとり」はその反対側に存在するのだ。攻撃的になったサトリというもの、行き着く先はどこであるか。それは欲望とは離れた、大きな愛（アガペー）に違いないのである。仏教とキリスト教の和睦などともみっちりことは言わない。神と仏の交差路である。その譬えの方が粗略か。神は本当になんの見返りももとめてはいない。ただ愛と自由と平和が、すべての神仏を信じる正しい人が望む姿で現れ、また永遠に続いていくように願っているのである。私の文章を喜んで下さる皆様へ、また気持ちよく題字をデザインしてくれた、ケンジ、そしていつも正確に私の希望を実現さ

せてくださる製本スタッフの方々へ、感謝の意を表し、筆をおかせて頂きたいと思います。今回も御精読有り難うございました。

後ひとつだけ、人々の欲望を理解することが「激するサトリ」を著わすことから、私の中で進展した。

「欲望と想い、計算と配慮」。その違い。愛と思いやりをもって、皆の幸せへと貢献するため、これからも自由に勇気を発揮したいと思う。

最後です。ありがとう。

義人

林さん

はじめ

みなさんへ

Ｈ 2 7 年 3 月

林さんへ

なんだか開始までバタバタしましたが、本当にありがとうございます。御見聞のほどよろしく願います。御負担にお感じになったら即、中止しますので、その点はお気づかい無用をお願いいたします。今、午前0時15分です。睡眠剤の効きにくい夜みたいです。先日は失礼いたしました。携帯、夜遅くかけて、ソウ気味になるのか、薬の副作用で興奮が生じるのか、解りかねますが、ご迷惑をおかけしました。柴山さんがカレーハウスで、私がいきいきしていたと、評価をされていたとお聞きしました。けど急に気が抜ける。我々みたいというのは変ですが「燃えつき症候群」、個人差はありますが存在するのです。一見わがままみたいですが、本人は必死の覚悟で訴えています。悪気はなく気がねをしている部分が大きいです。ご理解よろしく願い申し上げます。メッセージが宗教関係なら難しく堅いのではないかとと思われるかも、なるべく実例をあげコミカルに、ときにはセンチメンタルに解りやすく、私の精神の広がり及び範囲から、お届けしたいと思います。飼い猫のソチや、私の幼き頃へとエピソードが言及するでしょう。ご期待くださいね。それですが私達は年齢も、住むところも近く、共通項が多くあり、感覚が一致し、思いも膨らむかもしれませんね。精神科医で作家でもある岡田尊司氏の新書を参考にして記述します。「精神障害者は発症を機に従来のライフスタイルや価値観さえも、見直すことが求められるといえます。頑張って成功を収めなければならない、働いてお金を稼がなければならない、とい

った強迫観念から自由になる必要があるのです。こうした価値観はマックスウェバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という本において明らかにしましたが、努力と成功、勤勉な労働による経済発展といったことを重視する近代合理主義の産物なのです。この近代合理主義が統合失調症を増やし、悪化させるのに一役買ってきたとすれば、一旦そこから脱却することが病を癒すのには必要なわけです。人生を、目標に向かって頑張るものと捉えるのではなく、ゆったりと人生を味わい楽しむという方向にライフスタイルをかえていくことが大切ではないでしょうか。仕事にしても、お金を稼ぐために働かなければならないという強迫観念のためではなく、何かに役立ちたいとか生活に張り合いもつ喜びのために働くというのが本当ではないでしょうか。今後修正をもとめられているのは資本主義の側なのです」私は他人の役に立つために生きることを忘れていました。神仏への帰依を勧め、またその原理だけは多様な面から受容的な態度を保ちつつ、広宣流布していかなれどと得心しました。今日、いやもう昨日になるか、つらつら書きましたが読者になっていただけて本当に嬉しいです。これからも宜しくお願い申し上げます。本当に感謝します。南無妙法蓮華經。

林さんへ

仏が所有するが、生存競争、今は悪魔の体制がある。この世界と向き合い、真摯に仏の子として立ったものは日蓮が頭をなでてくれるだろう。だが行き過ぎると

きは少し休んでからまた不惜身命、南無妙法蓮華經を
広宣流布しなければならない。自己犠牲や折伏という
高圧的な態度はよくない。なぜ念仏ではなく題目なの
か丁寧に説明する責任があるだろう。真宗の人に伺い
たい、還相、往相というものがあるが、極樂で仏に、
その後、娑婆に出る。これはまた同じ凡夫になって生
きることになるのでは。なぜわざわざ凡夫になる。「仏
は娑婆にはいないのだ」という。阿弥陀に救われた身
であるなら大きな矛盾である。娑婆は悪逆な凡夫ばかり
なのだろう。まずそれでは還ってきた仏と凡夫、ど
う見分けをつける。答えてほしい。仏はどうひとをす
くうのだ。答えは「娑婆では役立たぬが極樂へ行くた
めの念仏を勧めるだけだ」と言う。日蓮は言う。「こ
の娑婆で修行することこそが、何の心配もない、いわ
ゆる（ストレス）がない極樂で修行するより幾多の大
変さと功德があるのだ。仕事、人間関係、病気、失恋、
リストラ、すべて修行の一環である」と。水行をはじ
めとする荒行などの苦行よりも仏に近づくにはこれ
ら人生への難題に慈愛をもって取り組むことこそが
大きな意味がある。もし修験者みたいに肉体をいじめ
ることが修行だとしたら、あんな餓鬼、修羅、地獄の
住人の観があるオリンピック選手たちが高僧、大聖人
になってしまう。そして金メダルをつかんだ勝者が仏
になってしまう。おかしくないかい。こんな悪魔の体
制を明るく優しく温かく生きて行く人たちこそが大
菩薩なのである。そして神、仏はすんだ美しい眼でし
っかりと見ていて下さる。本当だよ。人は見た目でど
ういうひとかわかるものだ。神仏は心の奥底まで察し

ておられる。悪い考え、行いはその結果良心の呵責として反ってくるものだ。それが神仏の存在のあかしである。もうひとつイエスはある人にいった。「あなたは確かによいことを行っている。ではあなたの財産をすべて貧乏なひとに配り、あなたの十字架を背負い私についてきなさい」と、その人はいった「無理です」。イエスの弟子は漁師の子とか当時、貧乏でその日暮らしだった人が多い。イエスはいう。「金持ちが救われるのは、ラクダが針の穴をとおるより難しい」つまり財産への執着が強いひとには、その日暮らしのひとにはすぐわかる、一番大切な愛が見出せないのである。そして十字架とはその人の罪、使命、役目、負い目、また愛でもある。イエスの教えを信じ祈る。即身成仏。末法には安樂行、日蓮大聖人の南無妙法蓮華經この二つしか善なる道は存在しないのである。正しき信仰を持つ者は直ちに聖霊が内に入る。パウロと同じく回心は光とともに訪れるだろう。

林さんへ

覚えていますか。私が初めてカレーハウスを訪れたとき、「出戻り、子供二人、54歳」そう言い放たれると、アイスコーヒーを投げ出すように下されました。まるでアメリカ映画のドライブインにでもいる、ミアファファのような女優さんみたい。そのあけっぴろげな正直さ、でもどこか負い目を。そんな姿に私の持つ悲しみ、苦しみにも寄り添い、「一緒に共有しましょう」と、気持ちが自然と伝わって参りました。仏教という同悲同苦です。優しいひとだな。それ以来ファ

ンになりました。自分のことをスケバンと言い放ち既成概念の中、規格のなかであがき苦しんだそんな姿が眼にうかび、なお好感を抱きました。私が自由に生きたいと話すと「姦淫までするのか」と詰問されました。答えに私は「そんなことするわけない。つまるところモデルは寅さん」と答えると「それじゃあ、生きていけんねか」と事実をあっさりと言われました。そうなのですね、このひとは世間を知っていると思いました。いやもしかしたら大人ならだれでも解ることなのかもしれません。「尾崎豊が好きですか」アイラブユー、オーマイリトルガール、やはり彼の純粋で一途で上品で優しいラブソングが好きなのですね。私も曲ごとに様変わりする彼のパーソナリティーに非凡な才能を感じ、またそれぞれにドラマがあることを本当に素晴らしいと思い共感することができるのです。「少し私がこのところ思ったというか考えたというか大げさにいうと哲学したことを記します。幸福とは主観的であり、愛と自由に満ちているかどうかできる。のち客観する。命というものが存在しなければ命がけというものもない。つまりお互いの友情、愛を試す必要もなくなり、走れ　メロスのような悲劇が生まれないだろう。逆にいえば永遠のいのちというものが存在すればいいのであろう。競争社会、自らを罪人と思わぬものに罪がある。モーゼの戒を守り自由奔放に生きるこれが最上であると。やがてイエスへの信仰に生きる。仏の子は謙虚であるべし権威は神のみもつもの。へりくだるということは尊重するということ互いに愛し合え」。「自尊心をすてて高慢が残り、快樂のために命

を長らえることを望む、ああさもしきかな」。法華経は宇宙の真理つまり聖書も法華経なのかもしれない。最後、自由になるには般涅槃しなければならない。が、死にたいとは思わない、所謂、「歎異抄」にある業の深さであろう。人に依存してもいいことはなにもない。謀略、策略をつかってまで手にいれたいものはなに、真実から遠ざかっていくだけなのに。真理とは愛であり、真実とは互いに愛し合うことだけである。

林さんへ
尾崎の「壊れた扉から」というCDのなかに
Driving All Night
があります。その詞の一節です

見あきた街を通りぬけて寂しい川の上を走った
追い抜いたトラックの向こうに闇に埋もれた日常が
見える
あの頃わけもなく笑えた 俺の友達は
みんなこの橋を死に物狂いで走った
Honey 俺は何処へ走って行くのか
街のドラックにいかれて俺の体はぶくぶく太りはじ
めた
それでもまだこんなところのにさばっているのか
あの頃みたいに生きる気力もなくして
街までのハーフマイル アクセル踏み込む
スピードに目をやられ退屈が見えなくなるまで
少しぐらいの時は 無駄にしてもいいさ
色褪せた 日常につぶやく

俺はまだだめになりゃしないさ
今夜俺 誰のために生きているわけじゃないだろ
WOWWOW 行くあてのない Driving all night
WOWWOW 慰めのない Driving all night

精神障害者の私をうたっているようです。生存競争のなかひたすら走り去っていった友人たち。薬の副作用に悩まされる毎日。それでも自分の生きてきたみち、人生を否定しない姿勢、それには自信があるつもりだ。私は犠牲を追い続けたり他人を第一に考えたりした。自分が大切と思うにはだいぶ時間がかかったみたいだ。ただ仏陀と言う目標はあったが、これという目的はなかった。今は隣人を愛するしか自らの行くあて、慰めはないだろう。本当に尾崎は真摯に愛と自由をもとめ、格闘した結果の人生をうたってくれている。そしてその自己演出。アーティストであり本物の詩人と讃えたい。

林さんへ

人はまず一人だとわからなければ隣人を愛し、神を愛することが解らない。タモリさんは毎日数千万の人に観られていたという。自己顕示欲の強いものたちはスポーツ、芸能と、とりわけ目立つ仕事をめざすが、忘れてはいけないのは、だれもが一番大事な方、神仏に温かく見守られているのだ。これはただ大衆の前にさらされているのとは訳が違うのである。心の奥の善悪を裁かれ、罪と罰も定められる。喝采を浴び、成功したように見えるひとたち。羨望することは、神仏の誉、

賞賛からみれば、まったく意味のないことである。親鸞は「私は悪人、阿弥陀様にすくってもらわなければ地獄へおちる」。「真宗の仏はどう娑婆の人をすくうか」の問いに「南無阿弥陀仏と念仏をせよと勧めるだけである」という。諦めを広めようというのである。「念仏は娑婆で得したり役立ったりするものではない。法然に賭ける、騙されて本望。念仏を唱えるしか、地獄におちることからすくわれるみちはないと信じる」と親鸞。私は思う。すべてはこの世で役に立たなくてはならない。自分がこの世に不必要だと思ったときに世間は敵にまわり自らを苦しめるだろう。たとえ引きこもりでもニートでも君たちには繊細な思想があるはずだ。声を発せよ。自分を捨ててはいけない。見栄と偏見のふきだまり気をつけて歩いてほしい。ある心酔していた宗教思想家はサタンであると聖書にでてきた。彼は法然を支持し、親鸞を敬するスケベ爺一休の擁護者でもある。「信仰であまねく人をすくう」と称し、己のことだけに囚われ、悪人の非道を許容したものたちを、「縛りから離れた」。と彼は褒め讃えるのである。とんでもない奴だった。だがそのサタンも私の悩んだ節目、節目助けてくれた。つまり楽にせよと勧めてきたのである。私には諦観の毒は休息への良薬になった。彼により固い生真面目な多くの人達が救われた。しかし問題意識のない自分勝手な人たちは「肉を食べ、女を抱いて極楽に行く」と安易にさとりを開いたようになっている。これは本質的な利他の精神からはずれるのではないか。仏法には菩薩行が必要である。人とのつながりである。まずは人生

という厳しいみちがある。それを乗り越えること、大切である。すくいの善はただ一つ、たくさんの人との南無妙法蓮華經の唱和。これのみ、安樂行。人間は醜いものなのかも知れない。不幸な事件がある。ドロップアウトした身。「俺だけじゃないか」、それは否定される心持だろう。だが外の世界への関与を予感させる心象風景でもある。あきらめからの旅立ち。いずこへ行こうかな、風がおしえてくれるだろう。

林さんへ

また哲学です。がんばらない状態をつくること大切。なぜなら苦行とはがんばることだから、苦行に耐え立派な聖人へ。苦しみからは苦しみしか生まれない。怒り、恨み。序列から優越感がうまれ、思いやり、優しさをなくすことになる。もしも場に愛についての思索と安樂があるならば居心地のよさを感じるだろう。運動、訓練、学習、解放されたときに幸せを見出す者もいる。けど受け身が耐えられず、すべてを素早く見限る私にとっては、行動、意味、目的が理解できず、向上心と言う食欲は、苦痛をもたらすだけだった。「だやないけ」 宮澤賢治は立身出世を目指したみたいだ。童話で。彼の童話は面白くない。正直いって。法華經の藥王菩薩本事品二十三の訴える自己犠牲の精神を表したかったのだろうが、結局その最後、死の床において「原稿を燃やしてくれ」と言ったとき彼の人生、思想が完結したのだろう。献身と犠牲、自らに喜びがあるか。人は自分のために生きる。それでいい。だが極端な出世欲、名誉欲からは離れなければならな

い。そこで賢治は父親からの自立を目指したのだろう。諦観から菩薩行へと。欲望と犠牲この矛盾は素直に生きることしか解決の道は見出せない。そして彼の素直とはやはり体を酷使して、人々に尽くす。それより他にはみつからなかった。大きな使命であった。 釈尊は本当の意味での自由を求められた。自由は孤独感との闘いである。聖書に神として私の名が記されていると信じている。それならイエスのように病氣治しの奇跡でも行ってみろ。という。もしそんなことをすれば世界の経済は破綻し、また、それのみをもとめるひとたちで溢れかえるだろう。私はなにひとつ出来ないからこそ、全知全能であり、すべてはその意志で天から運ばれる、その報い、言葉、想いによって私は信すべきものに値するのである。浄土真宗では悪人の方が善人よりも極楽浄土に近いと言っている。その意味するところは「悪人がすぐわれるのではない、自らを罪人と思うものがすぐわれるのだ」と私は解釈した。しかしそうではなくやはりなんの計らいもなく悪事を行うひとの方が自然で仏に近いという趣意があるみたいだ。そしてそういうひとたちは押し並べてものごとくに無関心、真の意味で無責任だ。賢治が嫌ったのはそこである。もちろん日蓮も。あきらめ、悪事をはびこらせたくない、彼らの一途な思い、これが南無妙法蓮華經を布教する上での精神であった。不惜身命である。南無妙法蓮華經は宇宙の真理に帰依し、自らの生活、生き甲斐をもって安樂、穏やかに懸念なく暮らす。また愛と平和を築き、幸せな人生の起承転結を迎えたことへの、感謝の言葉である。けして食欲を肯定する、

いかがわしき呪文とは違うのだ。「俺、宗教なんか興味ないもん」これが現代の真宗の見地である。ひとが何故生きているか、どうして生きていくか。答えは神仏の正しい教えにしかないのである。

柴山さん、林さんへ
尾崎の「放熱への証」、アルバムのなかにある「贖罪」が日中、横になりうつらうつらしているときなぜか不思議に何回もリピートした。私になにかを気付けといわんばかりに。

静かに佇む色褪せた街並み
すこしずつ言葉を無くして行く僕がいる
日常僅かな仕事でつなぎ止め
無表情な人波に紛れ込み凍えている
何を待ち続け何を求めるの
名もない日々が訳もなく微笑む
時の流れすら見失いそうになる
凍えた日差しに怯えているそれだけさ
孤独なのか安らぎと呼べるのか
この暮らしに名を付けるというならば
何処へ行くのだろう何処へ辿り着く
名もない日々が訳もなく微笑む
僕は知っていたこれが僕の暮らしだと
偽りを知る度 真実に戸惑う
風は柔らかに時を運んで行く
寂しい心を優しくそっと包むから
何を待ち続け何を求めるの

名もない日々が訳もなく微笑む

私が聖書のなかに記されている事実は。最後の審判がくだることなのか。神の国はひとりひとりの心に訪れる可能性が高いのではないか。いやもう来ていると感じている人もたくさんいるだろう。きっと私にはこの詞のように「名もない日々が訳もなく微笑む」のだろう。正直、なにか閑散とした気もあり、またなんらかの期待めいたものに応えたいとも感じるのだが、みんなが今、幸福なら私はそれでいい。それでいいのだ。エホバの証人のいうように「みんな会の規則を守れば死なない、死んだものは生き返る」、人間の考えることだからどこか限界があり無理がある。聖書との整合性を維持するのに四苦八苦だ。まずはどういうところか解らないけど良い人は死んでから天国に迎えられる、で良いではないか。死ぬのはみんな初めてだからちょっと怖いだけである。みんな善い人になろうよ。簡単で難しく、難しくて簡単かもしれないね。そこを踏まえて永遠の命へと向かおう。

みなさんへ

限りある命がなければと。永遠の命があればとは同義語である。神は神、ヤハウエ、ゴッド、アッラーすべて同じ存在を神と呼んでいるだけである。つまり神には名前がない。ということは人間みたいに誰かに帰順、迎合して欲望をかなえてもらうのとは違う。お解りのようにエホバ、エホバと個人崇拜みたいに焚きつける人たちとは私は一線を画する。そしてつまり「私は義

の人であり義人である。名前としての（ヨシト）には拘らない」。神が示現した私にまずは、呼び名は無い。漢字から受けるニュアンスだけだ。だがその後、イエスとともにヨシトの名の意味を知る。すなわち（了解）。それは明日へと。これは「安息日にこだわらない」たとえだ。いつも善いことをする。あわれみには、さげすみと、同情がある。有名な宗教思想家は本物の宗教とは人間の生き方を教えるものであり浄土系が一番であると。では「真宗のあきらめの境地、それが本物の宗教か」。私が思う「本物の宗教とは心や体から、抜苦するもの。即身成仏、日蓮の題目、私を風と光、爽やかな快感に導いてくれた真光の言葉。そして神の靈感、聖書にある」。つまり愛に満ちた同じ創造主を称え、また帰依するところに人間の救いがある。神の国は戒を守ったから入るのではなく、戒に愛を感じたものが入るのである。神はつまりすべては助けない。戒を感謝でまもりその趣意をくみ、その後日、神の心を抱きしめる、（キリストの血肉を食らい、聖霊の宮となる。つまりイエスの十字架の贖罪へと信仰を持つこと。戒は形を変え、囚われない自由な聖霊の宮に活きることになる）、聖霊により善意で正しく生きる人がおのずと救われるのである。仏教では森羅万象に仏になる種があるという。みな平等ないのち。キリスト教では周りのものは人間の為にあるという。少し整理してみる。仏教では欲望のままに生きる愚かさを畜生道におちたと言う。またイルカ、クジラを非常に大切にするキリスト教圏もある。家にはソチという猫がいる。猫の命もゴキブリや蛇と平等か。または重いか。

そんなことは関係なく自然にその見捨てられた鳴き声が私の心に響いた。だから家に入れたのだ。ゴキブリは殺したい人は殺せばいい。恋と同じく情けとはそういうものではないか。主観的でいい。殉教した人たちは永遠のいのちを信じた。イエスの贖罪に対して感謝と報恩で一旦、この世を去った。決して自己犠牲ではなかった。わかったような顔で「とんぼとゴキブリ、命としては平等なのに扱い方がおかしいですね。ゴキブリは叩き殺される。」とかたる年配者に不具合を感じた。愛情とは自然なものだ。だからこそ理性的でなければ。なんの屈託、葛藤なく命を軽々しく扱うな。神であり博愛に生きる私は、昨夜、台所の天井を這う黒い友人に対し、母のように殺虫剤を噴射することはできなかった。

みなさんへ

ある人と昨夜飲んだ。話がどうも噛み合わない。サタンが私を悩乱させるため、場をセッティングさせたのだろうか。後で聖書を繙くと人生を悩み恐れているひとりの男であると。私は父が晩年、暴力をふるい、それを恨んでいると母に幾度も聞かされたことを「父の悪口をいう」くらいのニュアンスで話した。その人は相当自らの母親に思い入れがあるのだろう。母親を批判することすら許さない。だが、私が父の血を通じて理解できる母への怒り、そこから生まれる複雑な愛憎を私ほど分析、咀嚼することができないことを想定してほしかった。頑迷、高慢、偽善、を持つ母、そこに苦しんだ私に好意的に同情してほしかった。なぜ。隣

人だと思ったからである。だが彼は生活を維持すること、そしてやがておとずれる、死の不安で人の心をおもんばかりができないのであろう。親孝行の価値観しか訴えてはこなかった。そして話の流れからそれは私の宗教家と名乗ったことへの期待からか試している風にもとれることがわかった。私は聖霊のちからにより話すことを止められた。核心をついてこない、このエゴふきにどう対処すればいいか。はじめてこのひとに南無妙法蓮華經の唱題を勧めた。自らへの固執をといってもらったためである。イエスは火を投じに来た。ひとが働く原動力に家族愛がある。しかしこれが他人との間を分け隔てる大きな壁となってくる。利己愛である。家、車、着るもの、となりとの比較。そして生まれる嫉妬、他人の不幸は蜜の味、それを納得し肯定するものがこの世、常識人と呼ばれる。私は断じてと、悪徳の否定にまわる。排他的な親族間の内側、血の集合を神の義、真実の愛にてバラバラにするためイエスはやって来た。主体性と神の愛の優先である。もちろん家族も個の隣人として愛さねばならない。だがあくまで優先されるのは個の主体性である。これは自己愛、自分を大切にすることにつながるが、自主的に戒を守り（信仰により聖霊の宮となる）、神の子を愛するためである。それが永遠のいのち、神の国へとつながって行く。では命の価値とは主観的なものであるか。イエスキリストの死は命の重さのエビデンス（根拠）。そこに意味がある。復活する人々は、神を愛したものである。やはり命は尊い。それをこえる自死、ハードルの高い、低い。残されたものは自分を責めるが、い

つか死は平等に訪れるもの、泣き明かした後、そう考えるしかあるまい。冷酷なような気もするが過ぎ去ったものはすべてストーリーになる。死は神がつかさどる。

みなさんへ

日蓮は言う。現実の主従関係は重んじなければならない。つまり上司、部下の関係は大切であると。ある目的に向かうとき組織は必要である。「だが精神的、メンタリティー（心的状態）が本分にある宗教の世界で主体性を無視するのは如何なものか」。一般の組織の話、上司は部下を管理し逸脱しないようにチェックを入れなければ。部下の忠実さの現れとしてのゴマスリをも期待する。評価も下さなければ。そのまとめぶりが自らの進退も決することにも。そして自分の位置の安定。私はそんな組織、けして好きではない。だが必要悪なのである。日蓮が生命絶対尊重を説いても、当時人殺しを生業にする武士階級には受け入れられない。命の危険さえあった。そんなとき念仏ははびこる。「自分が上にたち、ひとを思うようにしたい」願望がかなえられない。だから上司にさからう。とんだ見間違いで恥ずべきことである。神である私には大きな霊的な精神世界がある。認めてくれる上司ならば指示に従うことはやぶさかではない。だがそれを無下にされる時、私は解雇を要求した。やはり思いやりと秩序は両立されなければ。聖書のなかのイエスは「私の肉を食べ、血をのまなければ永遠のいのちは得られない」と。「ひどい言葉だ」「このことがつまずきになら

ぬよう気をつけよ」と答える。つまり私が自分史を語ろうが、哲理を説こうが善意を正しくよみとり、あさはかな自分勝手な判断で、否定的になってはいけない。つまりつまずいてはならない。「血肉とはイエスの十字架の死により、霊になる。私のいのち良心である」。また聖書には「のろうもの、はずかしめるものたちのために祈れ」とある。つまり自分の好みのカテゴリー以外のひと、宗教信者でも親切な人（隣人）なら好くしてやる。罪人でも自分に好いひとには好意をしめすものだ。謝るものを許せ。正しいものは正しい。見える人はどこにいても見える。つまり愛を。明るく素直に温かく。皆で聖霊の宮、南無妙法蓮華經。カルト教団は正当性と数字ばかりにこだわる。肝心の教義、スピリチュアル（霊的）にはあまりふれない。数で量るのは悪魔の領域である。私はロマンチストである。自然に想いが広がるのを期待している。

みなさんへ

マラユスフザイさんがノーベル平和賞をとった。女性の教育を受ける権利、人権を訴えて、イスラム過激組織タリバンに頭部を銃で一撃されたが一命を救われ、イギリスに滞在する17歳の少女である。私の記憶違いでなければ。唐突だがテロから思う。北朝鮮は、もしかしたら結構いい国なのかも。この国が敵視するアメリカ。果たしていい国だろうか。激しい競争社会、一握りの人間が大部分の利益を享受し、ひとたび災難がふりかかればホームレス。肉親の情もうすい。博愛をめざすかと思えば戦禍を世界中に振りまいて

いるだけ。アメリカは世界の警察を標榜しているが、まずは利権のためであり、民主主義を根づかせると聞こえはいいが混乱を助長し武器をばらまき、またそれが金儲けにつながる。そしてそのことは彼らにとっての反社会的勢力、ならずもの国家をうみだす土壌になった。一方北朝鮮はプライドの高い国だという。大量の核兵器で世界中に睨みをきかすアメリカにも核兵器で対抗する。国の主権をおもえば至極まともな考えである。北朝鮮では政治的な話は御法度だが狸談は盛んにしてもいいという。単純に考えると一番少子化対策に有効なのではないだろうか。貧しいのも各国の経済制裁が原因にあるとも言え、本当は案外ある程度生活は質素でも家族仲良く生きているのかもしれない。軍国主義といわれているがそれは周辺にいろいろと彼らを侮辱する火種がたくさんあるから仕方ないともいえる。金王朝をただ守りたいからだ。国民を犠牲にしている。だが金正恩にどれだけの罪があるだろうか。彼はただ受け継がれた責任をわかいみそらで果たそうとしているだけではないか。若社長はまわりが助けなくてはいけない。だいたいどこの会社に民主制というものがある。そして言論の自由など、どこの場に真実あるだろうか。みな暴力と思惑がらみだ。政治体制などどうでもいいではないか、ただそこに愛があるかどうか大切なのではないだろうか。金正恩は遊園地の整備を命じたという。愛を感じないかい。訳も分からず我欲をむき出しにする自由民主主義というものが本当に正しいものなのか。結局欲にかられた強いやつらの利益が優先される社会ができあがる。おとな

りの韓国も激しい競争社会である。脱北者は帰国を望むという。一方からしか情報が入ってこないなか、神の前で平等を説くイスラム、分かち合い平等というものを手ばなさない北朝鮮。教育とはそういった隠されたことまで予想し明らかになることを目ざすための知恵を養うものであってほしい。そしてタリバンは、仏教をなのりながら多くの人を殺傷したオウム真理教と一緒にイスラムの意味、平和から離れた特異なものとして観るべきであろう。拉致問題、本音で言うと、いずこの国にもそんな主権、人権に関わる問題はあるはずだ。多分お上は、使える間は政治利用し年月が経ち、すべて家族の記憶から去り、更地になることを焦らず待っている。シベリア抑留を見てみなさい。家族は辛いだろう。だが――。

みなさんへ

妹の嫁ぎ先の姑さんが亡くなられた。真宗。姪二人共、涙を人前では見せなかった。隠れて泣いていたのか。そんな気配もない。冷たいか。いや姪たちは判らないのだ。祖母ちゃんが、あの世の浄土で幸せに暮らせるのか。実感できない。再会できるかも。私は南無妙法蓮華經。これをもって成仏を祈る。魂は天へと駆け上がる。感謝して自然に生きてきた人は闇をみないだろう。変な表現だが。しかし、この世への感謝、迎合から離れ、深く思索する人は闇をみるのである。父も愛を追究する中でサタンの試みに遭遇する。この三界の闇を自覚することになるのだ。根底に流れる闇の濁流、父の恐れも感じず敵対し、ただ睨む、峻厳に

見定める視線。夢の中微笑んだ父が私の前から去る直前に見せた表情。この世に存在する愛に反する真実。殺し合う世間。幾人が気づいたであろう。尾崎の「闇の告白」「いつの日か引き金を引く。ただひとり自分を撃ちぬく」話を変えよう。嫌いな人には嫌いといってあげることは愛することであろう。嫌いな人が嫌われてなにかに気づくなら。聖書にある悪霊を追い出すことは心を愛へ転換させることをいう。私にとっては自らの本の作成、想いの広報がそれである。健常者への劣等感を感じるひとたちはおしなべて、かつて障害者に対し同情ではなく差別、偏見をもっていたひとである。間違いであろうか。そんな感じがする。私はこの病に感謝している。みんなが言う個性より、一段と高い意識を持っている。差別はこの世では無くならないかもしれない。でもみな人生投了にむかって行く。年をとれば腰はまがるし耳も遠くなる。死を待つだけの身になるかもしれない。つまり人生を勝負とみれば必ず負けるのである。病、障害に縛られず克服する。これこそが心のバリアフリーの必要性にたどりつく。性的現役の終わりを宣言したあと、私を聖なるものと女性たちは認識してくれたみたいだ。人間同士の絆を考えさせることに繋がって行く。私は健常者、障害者、区別が存在しても、まったく人間として対等であると思っている。ひとは見栄、体裁、偏見なく優しくて弱い人でないと本当の勇気が分らない。強さを求める気持ちとの間に苦しみ、不安、恐怖に気が狂うこともあるだろう。だがそこから隣人を愛し、神の愛を感じたことで、きっと自立した真の強さを確立する人間に

なることができる。心の温かい人はみな素晴らしい。
愛と言う星座はすべてを運ぶ、羅針盤となる。

みなさんへ

記述に浄土とよく表すが、西方世界の極楽浄土、日蓮が身延山に映した、法華経のなか釈尊が説法される、靈鷲山。日蓮が靈山浄土と呼び死後にたどりつく彼の地となる。彼が真に求めていた道場である。そして密教のいうところの密厳浄土。いろいろあるが、私はみんながいきつく最良の死後の世界の象徴として(天国でも良いのだが)表したのである。浄土系に寝返った訳ではない。真宗の葬儀に最近2回立ち会った。南無妙法蓮華経を勧めるものとしてどうすべきか。日蓮系の教団では新旧問わず、その垣根を取り払う動きもある。しかしそう簡単に安易にハードルを下げることができるのだろうか。教義、考え方の違い。私は思った、宗旨、宗派、問わず、故人を送り出す親族の心情を察するとき、そこにはただ「ありがとう。安らかにお休み下さい」という気持ちだけでは。ならばそこにいる私もそう願わなければならないだろう。だからこそ本物のあの世へ送り出すための南無妙法蓮華経が必要なのだ。神仏はそれを愛される。常に大事なものは真実の思いやりをもった自分の心である。今後、葬儀に参列し真心から南無妙法蓮華経を静かに唱題しよう。どんなに高位につくお坊様でも読経の途中、お布施の額のことや遊興のことを思い浮かべていては言語道断である。私の小中のときの同級生、が真宗の僧侶になっている。「寺の経営、大変だろう」というと「娘

がいるけど心配やちゃ」と返ってきた。「僧侶が心配したらあかな」とトイレに向かう後ろ姿に投げかけた。そして最後「また有難い法話聞かせてよ」別れ際に挨拶すると「法話とは耳に痛いもんや」と敵をとるわけでもなかろうがそう私にぶつけて去っていった。人相からみても立ち振る舞いからみてもなかなかの悪僧ぶりだ。私の敵である。その後、近在で遭遇したが目すら会わず逃げていく。私の家の法華宗の坊主は一切説法をしない。寺社運営の金の話ばかりだ。なぜか。自分のような拙僧がなにかを説くよりは南無妙法蓮華經をひとつでも唱題することの方が、功德が大きいと思っているのかもしれない。それは言えるかも。仏、法、僧、三宝帰依というが、善き話を聞いても外へ出て三歩消えというひとも多いからである。話は変わるが、ぐうたらと怠惰について一説ぶつと、ぐうたらとは安息である。怠惰はみんなが真心からなにかをするときに、ひとりなまくらをするものである。つまり怠惰とは心が愛に向かってない状態を示している。私は怠惰にならず、高慢にならず、坊さんたちよく聞け。お前の法華經、自我偈より、私こと、日蓮大聖人の南無妙法蓮華經が人々に安寧をもたらすのは確実なのだ。

みなさんへ

[父の御名があがめられますように、御国が来ますように]。イエスが「祈りの言葉」として勧められたものだ。誤るとエホバ、エホバといいかねないことに。父である神はのぞんではない。愛が世界、宇宙の

隅々まで行き渡るよう、神に感謝し祈念することが大事と、イエスは伝えるのだ。ヨハネの第一の手紙、第3章、6、「すべて彼におるものは罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこともない者である」。この意味は私と面識があるとかより、私と同様の心、愛、また良識を具えるものは罪を犯さないということである。私はかねてから、自分の不徳とするところを表してきた。私がいつも真っ正直に生き、屈託、葛藤したが、そのとき、そのとき自分の最善とする道を選択してきたのである。核にある愛の深さは、人知はおよばないだろう。そしてそんな人たちは聖書、法華經云々をぬきにして全世界に散在するのではないか。弱者を思いやり、神を愛し、隣人を愛する神の奥義を理解する人間はきつという。罪とは神への無知からくる。懺悔したから消えるという単純なものではない。もう一度いうが葛藤、迷いそこから愛を見出したものが贖罪したといえる。そういう人は再び罪を犯さないだろう。美しい心をもつもの、また自分の不徳を知り涙するもの、むしろ罪の深さを自覚する娼婦こそ神は祝福するであろう。そしてパラダイスへ迎えるのだ。すべて罪を犯す者は神を見たことも知ったこともない者である。つまり自分の思い、行動に疑念をもったことのないもの、良心の呵責に苦しんだことのないもの、そういうものが本当の罪人なのである。そして愛を保ち続ける。戒を破り、罪を犯す因縁は向こうから避けていく。神を愛せなくなる。つまり互いに従属するようになるなら、この世の結婚は慎んだ方がいい。情欲をおさえきれないとき結婚すればいい。

だが終わりの日、真実の愛に目覚めるとき、大きなつまずきとなることを知るだろう。神と富の両方に仕えられないように、心とからだにも、言えるのだ。イエスは火を投じに来た。ひとびとは心の中、また実際に殺し合うことになる。心に神がいないと真実の愛を見出すとはそれほど苛酷で峻厳なものになる。イエスの十字架の死、贖罪を信じて下さい。すべてを神に委ねた時、聖霊がその身に入り、また包みます。その時あなたは救われています。ずっと利他を忘れずに。「お願いだ、路上で横たわるひとを誰かすくってくれないか。」

みなさんへ

病院の事務職、2度の就職の失敗から解雇に対し不安以上に恐怖があった。それが猛烈にして懸命に仕事へむかってゆく、ひとつの誘因になった。事実である。ひとつの強迫観念である。それが周りに善かったのか悪かったのか、たぶん善かったのだろう。私にとっても職場にとっても。崩れかけた忍耐。混沌、すべては利用者を意識した、意図的だが的外れな行動だった。結果的に見えない力が働き、正しきものへの喚起を促すことになったが。具体的には、特殊論的で説明するのは厄介でまた、ここでは必要性も感じないので割愛する。(興味深い人は白くて紅い日々をご覧ください。)仕事に対しての意識の清廉さを考えさせるのは、当事者、職員すべてが人生、愛まで考察する、いいきっかけとなったのではないか。賢治にも農民を救わねばとの強迫観念があったのは確かだ。一途な賢治。気持ち

は痛いほど解る。丈夫で頑健な体がほしい。彼は願っていた。そしてひでりの日には涙を流し、寒さの夏にはオロオロ歩く。農民との同悲同苦。そのとき彼が自分の無力さ、絶望的だが諦めることは出来ない。「ありがとう」と感謝の言葉がでるだろうか。偽善だ。彼は叫びたかった「バカヤロウ」と。それがもしかしたら本当の利他の精神からでる南無妙法蓮華經の音声ではなかろうか。劣等感は絶対よくない。だが持つ人は多い。そこから同情が生まれることもある。支離滅裂のようだが、メモ書きを参照しながら記しているので乱筆ご容赦を。ご存じワイアットアープの相棒ドクホリデー、肺を病み末期、ベッドに横たわる。殺人、賭博、オンナ、彼は過去を振り返りアープにかたる。「むかし、好きだった少女がいた。15で修道院にいつてしまった。もし彼女がいたならこんな風にはなっていなかっただろう」正義と愛情にあふれていたドクを変えた世間とは。欲得のなかスリルと酒で不安をまぎらわす。ドクは言う「ふつうの人生なんかないんだ。あるのは人生だけだ」アープにパートナーの大切さを伝えたのだ。神を父とよぶイエスも悪霊にとりつかれ気が狂っていると。彼は盲人の目を開ける。つまり愛にめざめさせる。木下順二作、三年寝太郎という芝居。私は若い頃、趣旨がよく解らなかった。私は世間の道德律に縛られていたのである。「彼は結果的に勤勉なひとよりなまけものとして得をする、名主の娘、可愛い嫁さんをもらう」。この芝居はそもそも金儲けのための勤勉や、高い評価を願う自分のためだけの努力よりも、自然で安楽な素直な姿が大切なのだと示唆

している。世間に向かい自由に反逆しているのだ。そこに気づいた私であった。

みなさんへ

少し思ったことを記します。仕事というのはライバルを意識せず自然に行う努力が大切なのではないだろうか。思いやりという職能をつくるため。私がたびたび学生の時、奔放だったと言ってきたが、これは女性遍歴が凄かったわけではなく、世の中のしきたり、常識、しがらみにとらわれず自然に生きていたということである。カッコいいことをいっているが、ようは怖いものしらずの世間しらずだったのである。あまり好きではないのだが、若い頃の映画の中での石原裕次郎のようなムードが少しあったのでは。生活は自由奔放。当然、ひとの思惑も解らない。バイトをしていた自家製のパン、ケーキを売る喫茶店。就職してくる未成年の少年たちを連れて車で真夜中、居酒屋へ飲みに行った。正社員の人間は気にくわなかった。法律違反を私が犯していることよりも、自分たちの職の位という立場が侵されるのが気にくわなかったのだ。私には深い考えはなかった。社員が横柄な態度をとれば、その人のいないところでさんざん悪口をいった。私が秩序を乱していると思ったのであろう。几帳面な女性社員が「暗いところで刺される人もいるんだからねえ」脅した。結局、固定した考えと見栄の部分からその人は去って行かざるを得なかった。大人と言われるものたちは後輩のために使う、一円の錢もおしむやつばかりだった。だがどこかで私は人々の善意を信じていた。私

は社長の厚意で店の二階にある寮に住まわせてもらった。ある日 16 歳にもならない男の子が夜、暗い食堂でしくしく泣いている。訊くと何も答えず「俺、とんぼがきれるんだ」とその場でバクチュウをきった。「すごいおまえ」私は彼を自分の部屋へよんだ。二人で何かはなしたと思う。忘れた。ただ彼の着ていた喉元のくびれたトレーナーがなぜかカッコよく見えたもので「俺のトレーナーとかえっこしないか」と依頼した。彼は気持ちよく頷いてくれた。数日後、テレビの部屋で彼のことを先輩の神経質なパン職人見習いがこきおろしていた。パワハラ、いじめである。私は男の観ていたテレビのスイッチを切った。男は「なにするんや」とほえた。私はニヤッとわらって握手をもとめるよう手をゆっくり出した。男は「もうせんか」と痴癪もちのような表情で私の指先を握った。男は創価学会に入っているまかないのおばちゃんのこさえる料理を、犬の餌だとはきすて彼女はいつのまにかいなくなった。男は夢があると言っていた。どうせ自分のパン屋をえらそうに取りしきりたいぐらいの或る種、軽蔑される欲望だったのであろう。そういうひとが多いんだよ。今も昔も。

みなさんへ

優劣ではない。確かに聖書は法華経という宇宙の真理である。スピリチュアルなところに存在し、悪に対する反的な力は法華経とは位置が若干違う。法華経はすべての悪、鬼なども包摂し帰依させる深いふところがある性行をもっているからである。俺は俺である。

俺、いがいのなにものでもない。つまり他人ではない。利己主義とはちがう。なぜなら利己とは他人を認めないところからくるものである。しかし自分は自分でしかないのだ。つまり比較からうまれる嫉妬、高慢などは存在するのはおかしいのだ。ラマンチャの男は鏡にうつった己に気落ちしたが、年老いても自分は自分でしかない。そこが大事。他人の人生、変わらないなら、比較というものは無意味であり、存在する必要もない。俺は俺であっていい。いかなるときも。他人は他人である。そして愛は他を想うことから生まれる。そして自分を律することは自分を否定することとはちがうのだ。誰かが言っていた、実践なき理論は空虚。理論なき実践は暴挙。本物の宗教とは道德律を教えるのではなく絶対的な善を示すものである。善きことの実践とは南無妙法蓮華経しかない。私のことが聖書に記されている。それより、私の言葉で評価してほしい。顕正会。日蓮が末法の仏である。信じろという。何を根拠にして。日蓮は釈尊の教えを真摯に求めた。だが彼らは釈尊を否定したもののいいをする。最愚のひきたおしである。日蓮は釈尊をきっと恋慕渴仰しているだろう。〔田んぼは喧嘩〕と少し知的障害のある男は語った。段取り。命令、叱責、罵声、彼は正直に嫌だったのである。寛容でない。仕事とはそういうもの。甘い。なぜだ。人間の尊厳にかかわる問題だ。なんでも楽しくやらなければ、義務感がまずいのだろう。鬼ほど子供を可愛がるという。恩を知ることは大切だが返そうと思うのは重荷を背負うこととなりあまりよくない。やはり人は自由がよい。釈尊の心、イエス

の行動、この世の価値観、富、名誉。所詮、うたかたのもの、ほどほどに付き合うのがいいみたいだ。私には愛するひとがいる。社会的身分、地位というものがあり、もし職業の貴賤というものがあるのなら、その人が本当に貧乏で下流にいたとしても心は変わらないだろう。そしてもし顔にあざがあったとしても同様である。むしろホッとするかもしれない。なぜならそのひとが美人医師と言う、こだわりからきっと離れるからだ。イエスの教えは神からでたもの。世はイエスを憎んでいる。世の悪を明らかにするからである。愛こそがすべてである。

みなさんへ

聖書には「義人はひとりもない」と記されているとある。が、神の賜物により信仰によって罪人は許される。これを基本に考えてみる。つまり真宗という悪人がそのまま救われるというのではなく、南無妙法蓮華経の唱題が人の心を善に向けていく。つまり信仰という作用が大事なのである。人は義人に向かうのである。祈りとは自己主張や自己を誇るのではなく神に自己を委ね信頼することである。私は地域の忘年会において尾崎豊を7曲も歌ってしまった。目立ちたがり屋は、その功名心から嫉妬、称賛、拍手を受ける。引っ込み思案は偏見、臆病、我高いものをそこから感じる。つまり屈せず、堂々と大らかにそのほうが幸せで楽しいのは間違いないのである。我々は自らの能力や知恵によってその功績を誇るのではなく神の意志に自らを委ねて従う、神の器であることを自覚する。

愛とは普遍的だが、そのとき、その場の具体的な
ものではないか。ただ内なる真実の愛に生きるもので
ありたい。我々がめざすのは財力や地位などの権力
によって屈伏されない、何物にも束縛されずに自由
に行動できることである。イエスキリストは高価な賜
わり物であって高価な犠牲にも見える。イブの夜に想
う。習慣や制度を束縛とみるか保護とみるか、好意
や尊敬と違ってしがらみを愛とみるか。イエスにも
ちいられるもの、オスカーワイルドの幸福の王子
を想った。自らの良心、罪に目をむけないなら真
実の幸福は存在せず、神との関係においてのみ存
在する幸福は自覚できないだろう。鳥や花のよう
に、神にむけて従順に、絶対的信頼において今を
生き、また霊は成長していく、つまり時の支配者
はひとではなく神である。単なる謙遜のすすめで
はない。小さな親切の類いの実績を積むことによ
って神の恵みが獲得できるのではない。神との
関係は計算ではなく、批判、救いは憐れみ、慈し
みと共に、ただ神の意志によって与えられるの
である。自分のすべきことは分からないだろうか。
神がやってほしいことは分かるはずである。神は
愛にて他者と共に生きることを求められているの
である。人間の倫理からの意志が救いにつなが
ると考えるかぎり、ひとの業は誇りとなる。他
人と比較して自分の義を誇り、他人を差別し、
敵視することを引き起こしてはならない。みな
さん今年もありがとうございました。来年もまた
よろしく願い申し上げます。[夢を追いかける
なら孤独すら恐れないよね。ひとりで生きる
なら涙なんか見せちゃいけないよね] たくさん
の障害者を含め差別、

貧困に窮している人々に対し、神は愛をもっていつも見守っていると言いたい。尾崎が言ったように「君がひとりで生きていないという証拠にたくさんの人に傷つけられるということだ」なにか感じてほしい。

みなさんへ

配管の仕事についたものの毎度あびせられる罵声、耐えられなく先輩職人の頭をヘルメットの上からトンカチで殴り付けてしまったイノセ。私は「あだ名をつけよう、ハイカンケン、てのはどうだ」というと「嫌だ」と笑みをこらしながら毅然ともいかないが言った。自尊心の高い男だったのだろう。まだ17歳だった。父親がオンナをつくり、家庭、公団住宅から出ていった。幼い彼は、今、工場に勤める兄と母親の三人で父親の脚にしがみついたそう。前歯が昆虫のように欠けていたので「ハーヌケケン、てのはどうだ」といったが笑っていただけだった。今思うと配管工時代が本当に嫌だったのだろう。このイノセと仲が悪かったのが岩本という。この人も公団住宅に住んでいた。たぶん私より年上だったと思うが「ガンチャン」とよんでいた。ガンチャンは私に「弟は全然ちがうの、あいつ氣にくわねえな、海に放り込むか、そんな恐いことを現実というんだ。政治家なんかもヤクザといっしょだ」少し粘り気のある口調で語った。イノセは一時期、暴走族にいた。その非道さについて行けず。やっとの思いで抜け出したという。ガンチャンとはなぜかそりが合わなかった。たぶん始めにガンチャンが高圧的にでたのだろう。ガンチャンは接客業が合わないといひ

され、早くに辞めていった。クビになったのだろうか。判らない。その後、ガンチャンは外車に乗った弟と現れたみたいだったが、格別なにも起こらなかった。社長はいつも「人なんかなんぼでも入ってくるんだから」貧乏な学生、若いやつはゴロゴロいるということだろう。このことが最後、悲劇ともいえる行動へ私を向かわせて行く。シミズというやつが代わりに入ってきた18歳だった。私は「お前は暗い顔をしているからクラノスケ呼ぶ」と宣言してから手荒に平手でパチパチと頭から背中を、祝福をこめて撫でるように叩いた。こいつも何か判らなかったが高校を中退していてエピソードとして教室での喧嘩の話をしていた。みんなが味方してくれたからそれでよかったと言っていた。コンセンサスをえて、得心できたということだろう。女の子のアルバイトもいた。自分が、「酢蛸(スダコ)」と呼ばれているのよ」気のよさそうな娘とシミズは仲良くなった。ある日彼がダブルワーキングをしていた喫茶店に彼女が、偶然訪れた。母親と一緒に松坂屋の買い物袋をいっぱい下げて。「じゃあねえ」。クラノスケは自分との境遇の違いを知り、寂しかったのではないだろうか。「じゃあねえ」と何度も私達の前で冗談にして微かに笑みをうかべ、リピートしていた。

みなさんへ

神と富とは二律背反するものの寓意である。人間関係で全方位外交はできないように。確かに私は金持ちと縁はない。ところが世の中のひとはそこに気付かず、神と富両方にすがろうとする。だがそもそも私も、な

ぜ神と富は両立しないのか解らなかった。イエスの時代おそらく富を築いていたものというのは悪意をもち殺戮もいとわぬ悪人で、貧しくとも心正しき人たちからすべてにおいて搾取していたのではないだろうか。女性もモノのように扱う。一方神の概念とすれば隣人に親切に、愛することが大切。また姦淫するなという戒をとおして女性の精神性の尊重を訴えている。ひとに勝つ、ひとを出し抜く、偽証する、盗む、虐殺する、富とは昔からそういうことで成り立っていたのではないだろうか。なるほど神の示した戒とはまったく正反対である。つまり過去のはなしではなく現在にもその志向性はあるのではないであろうか。そう志向性である。もしもしらずに利他の精神で金持ち（これも本人の自覚の問題）になったのなら、つまり神、周りに感謝しているなら問題はないのかもしれない。また人に施し、すべてを神に委ねるなら貧困に泣かされることはない。あせってはいけない、あれやこれや未来のことを心配し金を貯めることにはしる。切りがない。そんなことより今日の愛や自由を楽しむことのほうがどれだけ大切なことか。そのことが「神と富、両方に仕えることが出来ない」の意味であると気付いたのだ。マタイの福音書にはアブラハム、ダビテの家系つまり王がうまれる系統にイエスは誕生したと記されている。聖霊によって受胎した彼も、養父であるヨセフがいとたかきものであることは重要にリンクされてくるのであろう。やはり血はあらそえない。上品、下品というものはあるみたいだ。そんなことをふまえたうえで私の系統には平家物語のなか宇治川

の先陣争いで名高い梶原源太景季。北条に敗れた、その父、平三景時がいる。遡れば桓武平氏つまり王家につながるのである。自慢ではなくそういったことはDNAに組み込まれていて、さきほどと同じく知らず知らずに性向として現れてくるのである。そのことはかねがね言っているように因縁からのひとに対しての敬意、尊重につながり、すべての人権を確立する意識につながるのだ。ルーツ、先祖を大切に思うところは他人との関係を大事にと。父より御霊はくだる因縁であったのである。

みなさんへ

いろいろな矛盾を感じられていると思う。天皇が血のけがれから離れたのはいつだ。侍だったお前の家系も血で汚れている。血筋を自慢するのは下品だ。ここである。私が言いたいのは聖書が絶対と思えるかどうかなのである。そして個の優先である。明治天皇にとっては皇室というのはとりもなおさず和の象徴であり、いにしえより愛民を脈々とつなぐことが真の神からの任務であることを自覚せねばならぬ立場だったのである。愛を打ち出す私の系統がその王家へ結びついていることを示すということは聖書にてらしあわせて表明しなければならぬ必然だったのである。人間はいつ人間になったのであろうか。猿から進化したというのはどうも合点がいかないのだ。いつ言葉がうまれたのだらう。私はここに聖書の正当性があるように思うのだ。つまり人間にとっては意識する前より空には太陽そして月がありまた大地があり海があり動物た

ちがいた。そして人間は知覚能力をもち、ものごとを認識するようになり言葉がうまれたのである。[はじめに言葉ありき]ここに神は、ホモサピエンスとも違う、ひとを誕生させたのである。そしてひとはいつも自らをよりどころとして生きるのである。先祖、家族、それも自らにとっては他である。いったん死んだものにとって、成仏は目的であり子孫をも他としてあつかい、崇るわけではないが差し障りももたらすことにもなる。そして先祖は死にたいする意識のハードルも低くなる。自らも体験し、死が万物に平等に訪れることを自覚し、特別なものとは思わなくなるからだ。正しい先祖供養は自らに平安をもたらす。そして我々は家族だけのことを思わず、誰にたいしても愛をもって接しなければならない。心理学では、はかれない業というものがある。その見えない世界は私が本当に実感したものなのである。私は自分が実感し体験したもの以外は信じない。信じる必要もない。因縁があれば自然とおのずから道は開けてくる。性的快感から解放されることを認識した。清々しい爽快感を感じたのだ。真光の先祖供養のパンフレットを仏壇にただ置いた。それだけで清涼な風を、そこからクーラーの微風みたいに私は感じたのである。真光の神も聖書の神も一緒だと解った。そして顕正会の言うように日蓮も久遠元初が存在を具現したものなのであろう。これが私へと流れこんでくる。ただ苦しいのは裁きがはいるので、どうしても愛に反する人にたいして批判的になる。寛容と厳格そのバランスが大切になる。いい知らせがある。賢治が童話を紹介してくれと友人に依頼していた

と新聞にあった。私も素直に自分の拙文だが世に頒布したいと思った。あと一週間で本が出来上がるのだ。

みなさんへ

顕正会という日蓮を大聖人様と絶対権力のように祭り上げ、その正当性を主張し強引な勧誘手段をもちいて信者の数だけを増やそうとする宗教団体がある。結局入会してしまえばフォローはなく、ただ会員の数があるノルマに達すればいいみたいだ。私を折伏(改宗)しようと友人は、弁のたつ幹部に、証明役を務める精神障害者二人を用意して喫茶店にて5人で私をとり囲んだ。「日蓮は宇宙を創ったのだ。釈尊ではもうだめなのだ。下種の仏は日蓮大聖人様である」。私が日蓮と呼び捨てにすると、幹部は「大聖人様とお呼びしろ」と怒りをあらわにした。目的をたずねると「会員を増やしたい。ある数に達すれば世の中が変わるんだ」。政治的意味合いがかなり深い。私の入会していた団体の開祖を目茶苦茶に非難する。私は冷静だった。彼らは私の所属している団体の活動内容を、ほとんどというかまったく知らない。この人たちは法華経の「ほ」の、字もしらないのになぜ南無妙法蓮華経を信じられるのか。話は平行線というか私の法華経の講義みたいなものになった。彼らは「現証と功德を観てくれ」と訴えた。何回かそんなことがあった。ある日、その友人がうまいうどんを作ってやるとスーパーで掻き揚げの天ぷらを買ってきてなにもいわずに振る舞ってくれた。私は嬉しかった。たとえどんな意図があろうと友情を信じた。彼は私を邪宗から引き離し正

しい道に導こうと思っているに違いない。信じきっている。義理を果たすか。私は命もとられまい。入会する決心をした。彼は親切だった。数珠と経巻をプレゼントとしてくれた。私は思った。彼らは邪宗呼ばわりするが私の所属する教団はどうだろうか。救われている人なんかいるのだろうか。仏の言葉だとして上からの指示は唯々諾々と受入れるくせに、実際はなにも精進できず何十年も足踏みをしている人たちをたくさん見てきた。なんの問題意識もなく、途切れなく行われる行事、祭事、奉仕に忙殺される日々。口車の巧いひとが結局は答えを出したとされる構図。家庭成仏からの世界平和への道。庭野の一族は名誉と富を享受し、信者は時給700円から生じた、お布施を包む。変だぜ。私は脱会を決意し本尊を引きはがした。そのときエビリファイが処方された。陰性症状が改善されたような気がした。そして悪霊に囲まれ入院。罰があたったと彼らは思っただろう。そして再会する神の靈感、聖書。法華経のもとに理屈をこね回すことでは救いには繋がらない。日蓮大聖人である私の南無妙法蓮華経の唄題これしかない。これで得心がいった。私の宗教観の変化である。ただ、いま、私が日蓮の再来であり宇宙を創った神であるという、友人は「なぜそう自分をでかく見せようとする」といった。私は言う。「神は権力ではなく愛である。でかくしているのはあなたがたの意識なのであると。ある意味では神というのは私みたいな卑小に見えるものなのである」。狭き門から入らねばならない。

みなさんへ

「エホバの証人」は、エホバは神の名であるという。神の名をみだりに唱えてはいけないという戒は、名前をよび捨てることが失礼になるからだったという。では現在エホバ、エホバとさけびつづけるのはどういうことなのであろうか。そして彼らの用いる聖書には7000 ものエホバという固有名詞がでてくるといふ。なぜ数が肝心なのかわからない。あなたも義人（ヨシト）と名乗っているのではないかという。義人はヨシトでも義人（ぎじん）でもある。漢字というのは深い意味をもっている。どちらにも活かされる。神はかみとよぶ、かみは名前ではない。義人といわれるものは正しい人としてたくさんいる。だがヨシトともよべる。そこが漢字の特徴がある。エホバと同じようだがニュアンスは違うのである。モーゼの戒、「みだりに神の名をとなえてはならぬ」の意味は、先とは別途「自分の父親の名を呼び捨てにするわけにはいかないからだ」と。くり返し問うが、ならなぜあえて、いま呼び捨てにする。そもそも聖書の神は、様という敬称を略されており、イエスも同様である。ここに人間との価値観の違いが浮き彫りにされる。母に「天上天下唯我独尊、私が神である」と言い放つと「自分でそんなことをいう奴があるか。周りがみとめる。驕慢で、はしたなく、聖なるものとしての価値がない」と。それならば私を論破するなり、私以上に生きとし生けるもののことを常に想っているものを連れてきてほしい。私はいつでも讃える心は持っているつもりだ。母が私を止めるのはこの世の見栄、体裁からのもので、上に立

つものは謙虚であれという世俗的なものからくる処世のたぐいのことでしかないのである。仏陀もみずから宣言し、イエスもキリストであることを自ら認めた。事実を告げられただけなのである。当然である。その精神的領域は思索し、体験し、自覚した本人にしか解らないからである。神の子であると語るイエスは止めるペテロに向かい「さがれ、サタン」と言われた。母にも私は言う。「あなたは神のことを思わず、ひとの世のことを思っている」と。偉いひととはどういう人だろう。それは高慢、嫉妬、貧欲、怠惰、邪悪、誇り、怒り、好色などの悪徳から解放されたものたちである。イエスという復活の日、だれも娶ったり、嫁いだりはしない。天の御使いたちのようになるという。神は生きているものの神である。だからこそパラダイスを想定し意識することで幸福は導き出されるのではないだろうか。王という概念もよくよく考えないといけない。一番へりくだり誇りたかきものこそ、神の国の王にふさわしいのである。そして神は名をただ呼び捨てにされたくらいでは怒らない。それは禁じている偶像崇拜と一緒に、拜んでなにか欲望を叶えてもらう、ではなく、愛、思いやりをみんなで見出してほしい、彼は一心に思っているからこそ、みだりによばないでほしいと戒めたのである。エホバは神の称号である。でも偶像崇拜はやはりよくないね。

みなさんへ

パン屋の見習いに少し知的障害があるとみられる、自衛隊出身の若い男が入って来た。エーちゃんと言づけ

た。彼は自衛隊の食堂で列に3回並んでカレーライスを3杯食べたとか聴き自衛隊員の待遇のよさを喧伝していた。この男はどうなったのであろう。彼の行く先をみる前に私は去ることになる。「大人たちはズルだ。自分の暮らしのことばかり考え、小銭をため込んで将来のなにかの資金にしようとしている」。当時の私はそういう見識を持っていた。まったくの世間知らずだった。夏休み中に母が社長に向け、世話になっているとお中元のつもりで素麺の詰合せを贈った。だがそれは店には届いたが社長の手元には渡らなかった。無視されていたのである。帰省からかえった私は猛然と店長に抗議した。母の気持ちが踏みにじられたような気がしたからである。そんな親切心がわからないほど私は嫌われていたのであろうか。まあいい、その品は若い連中で夜食に食ったしだいだ。キクチという社員の男がいた。私と同時期に入ってきたみたいだ。食堂で二人並んでいた。「お前たくさん飯食うな」ときた「お前には関係ないだろう」私はなにぐわぬ顔で言った。「いや店がな」なかなか図太いやつだった。見かけは若き日の皇太子殿下によく似ていた。「お前、幾つや」後で私より二つ年下だと知る。専門学校を出て入社したという。エリートである。キクチはエロ本とウォークマンが趣味でストレス解消に活用していた。彼はよく遅刻をした。みんなで説教したことがあったが彼ははじめとしかとらず遅刻癖はなおらなかった。キクチは専門学校時代のガールフレンドが書いた詩に、曲をつけてくれと私に依頼した。簡単なコードしかしらない、ど素人の私がつけた曲。ギターを伴奏に

唄うと、首を振りながら喜んでくれた。私は照れ臭くなり「くびを振って喜んでやがる」と何回か披露したあと終わりにしてしまった。キクチは私を君づけで呼ぶのでこちらにも負けずに横柄な態度をとったのであろう。理由は忘れた。同僚のなかで私が殴ったのは彼だけである。そういう私をイリヤマという通いの真面目な中産階級の家庭に育った学生バイトが非難した。しっかりしたやつだったが面白味に欠けるやつだった。自立する、大人になる。ふりかえると恥ずかしくていやなことも多い。でも自分だけでなく明日の見えない若者のため、なにかを用意したかった。私にとって、それは夜半、居酒屋に、未成年の後輩を車で引き連れていくことであった。許されない犯罪行為。かけた冗句、言葉が彼らにわずかながらでも喜びを呼び寄せていたのではと、両手で顔を覆いながらも信じるのが、今、私のできる関の山である。

みなさんへ

神は神であり神である。どれほど知識、能力のあるものが行く手に現れようとである。なぜなら即ち神は神であるからである。そして何者であっても智慧、慈悲では神にはかなわない。この絶対性が全知全能へとつながってゆく。普通、全知全能というとコンピュータのように正確無比なパーフェクトを意識すると思うが、本当の意味は、しかめ面したドイツのプロテスタントの牧師や、殺し屋ゴルゴ13とはまったく真逆のものなのである。全知全能とは善知善能をいう。優しい顔、柔和な心、愛情ある言葉でまわりに接するとき

に、自然とすべてが善きことにむかってゆく。無漏の善（意識せずとも善きことになる）である。そしてイエスキリストは仕えられる王ではなく、神、人々に尽くす僕として、愛をうったえたのである。聖書の牧童の譬え 100 匹あって 1 匹でも迷えば捜しに行き、見つければ大喜びする。罪人の回心を神は本当に望んでおられるということだろう。当時、牧童の仕事は本当にきつかったそう。昼夜なく羊を見守っていないといけない。神もまたすべてを見守って下さっているのである。明日には妒にくべられる草花でさえ美しく飾って下さる。それよりもよきものとして位置づけられる我々に善くしてくださらないわけがない。親の借金をかえすためソーブランドに身を置くハタチの娘がいたそう。80 になるキナイはニコニコ顔でそれを語った。「お前、そんな話聞いたあとでよく抱けたな」と私は怒鳴りつけた。博愛の娼婦なのか、嫌いやの売春婦なのか。女の子に喜びはあるだろうか。男には熟女好きというやつもある。女にも壮年好きというものもあるかもしれない。くだらない話か。すこし前までソーブランドの常連だった中川はキャンディーちゃんと源氏名を称する中年の女に、毎度、鱈寿司とイカの黒作りを献上して好感をもたれようと努力してきた。サービスが違うのか。彼女は毎年、海外旅行に出かけていたみたいだ。おのが美貌と技能で色と欲をみたす。中川は「結婚したくても相手にしてくれんかろ」と笑う。明るいもの勝ちか。貞操観念などはどこかに忘れられたみたいだ。キナイの馬鹿はかつて「台湾の女性はりんごが好きだ」と若い者にきいてリュックサ

ックいっぱいりんごを入れて持っていったそうさ。そして会う女性みんなにそれを配ったそうさ。この根気と勇気は愛であろうか。いや、ただの性欲の延長線上にあるものだろう。必死だ。キナイには若い時から精神科に入院中の、見合い結婚した奥さんがいる。子供もふたり。その空虚さをうめるため、女にはしりカネをつぎ込んできたのであろうか。私に「そんなことしたことはなから」馬鹿にするように言った。私は「理解できん」と恋をしたことがあるのか、わからぬキナイに真実、憐れみで返したのだった。

みなさんへ

少しえげつない話になる。吉行淳之介はその恋愛論のなかでひとつのエピソードを。ある女性が「女の子を誘うにはサーともちさるスピードが大切よ」つまり考える余裕を与えない。カズキは言った「男と女なんて結局、からだだけじゃないか」だがなぜか寂しげだった。バイト先で、「彼女と俺は意識しあっているんだ。眼がちらちら合っつてね」と男が笑みを浮かべ自慢を語った。だが彼女の方は「みだれている」とオフコースのうたをカラオケで歌ったのを最後に陽気な女好きの男にさらわれてしまった。暗いのはだめか。だがどうしてこうも純愛は実らないのか。カズキの言葉が胸に散る。男のなかには女を渡りあるく、また何またもかける輩がいる「男のずるさが女を金にはしらせる」私が作ったのである。どうも男女、最初の恋愛時での悪印象が復讐になびかせているように思うのだ。話はもっと深長になるがセックスレスの問題を取り上げ

てみる。40、50代に増えているという。当たり前ではないか。性に目覚め、意識している子供たちが同じ屋根の下にいるのに親として、そんなあさましいことなどできるわけがない。明るいセックスなんかあるのか。近所に屋外でことにおよんでいるやつがいたら教えてほしい。ああそうか暗い公園があったか、車のなか、いずれも無防備で下品だ。そんな行為をよろこぶものたちはどんな男女関係を築いて行くのであろう。私はただ清らかな愛を信じている。セックスレス万歳。40越えたら互いの手を握って眠ればいいのである。しかし見捨てておけない乙女達がいる。彼女たちはいろいろハンデがあるもののひたすら、優しくエスコートしてくれ、サーと連れ去り抱きしめてくれる王子様を、純粋な気持ちで待っている。彼女たちは解っている、人生でなにが一番大切なのかを。そうかたわらに寄り添ってくれるパートナー。あるスナックに存在している障害者のおんなの子にカズキは親切にスマホの使い方を丁寧に伝えていた。実は彼には私と同じく妹がいる。妹がからだだけのおもちゃにされていたとしたら耐えられないだろう。美しい心で相手を想う恋をする。そんなひとたちを神仏はほっておかないだろう。また障害と言うハンデをもつ彼女たちに金品を与え欲望を満たす年配者もいた。ギブアンドテイクか。からだか心か。堂々めぐりか。みんな性的現役を終えたとき、何かがみつかるかもしれない。理性的な恋をもとめながら疑念をきんじえない私であった。

みなさんへ

私は蒲田行進曲の銀ちゃんのようにになっていた。他人の横柄さはよくわかったが自分のそれは気づかなかったというか無視していた。牛のようなでかい体をしてながら、あどけない顔をしたやつと、岐阜県の郡上出身だという鈴木雅之のような唇をしたやつ、二人の学生バイトが通いで入ってきた。牛天、グジョウと愛称をつけた。私は彼らに大きな声で指示をだした。おとなしいやつらでけして逆らわなかった。店長はインド人のような顔をした小男で苦虫を噛み潰したような顔をしていた。彼らは仕事を覚えるのはやかかった。少々声が小さいのは気になったが、私のおかげだと感謝した。「今日は叱られずにすんだ」と牛天は私と目を合わさず明るく話した。私は勝手にやっているだけで後ろめたかった。今から考えればバワハラではないか。彼らの素直さが後に私を悲劇的な行動へと向かわせていく。私はいま彼らに詫びたい気持ちでいっぱいだ。ある女の子が入ってきた。私は牛天に「お前とうまくいけばいいなあ」と。しかし2日目に「いこう」とサーと、私は彼女を連れていった。彼女は豊橋だと言ったが本当は沖縄の出身だった。本土の人間には複雑な思いがあるのではと感じた。犬のトリミングの仕事を覚えたいと学校に通い、バイトにきているのだった。いつもだが私の前でも自分の話はほとんどしなかった。元日が来た。みんなが帰省し、静かになった彼女の女子寮へ乗り込んだ。「お雑煮をつくれ」。「なぜ」「食いたいから」。最初のころ、彼女があごに傷を負ってきた。「どうした」ときくと好きだと言われたお

じさんに殴られたという。つまり俺のことで断りの意思を見せたのだ。「金をとろう」と私は言った。彼女は「やめてくれ」といった。おじさんの気持ちがわかったのだろう。優しい子だった。お互い愛については語らなかった。無口な子、彼女の卒業。いよいよ俺との別れがせまってきた。外に出た。雪がやんだ真夜中の小さな公園だった。ひとつこひとりもない。彼女は泣きながら何度も激しく口づけをもとめてきた。私は彼女の肩をだき降り積もった雪のなかブランコ、すべり台を横目でなぞりながら公園内を何度もゆっくりと回った。翌日彼女は私との別れが相当辛いみたいだった。涙を流ししゃがみこんだ。牛天がいた。「バカヤロウ、しっかりしろ」声をかけた牛天は彼女の腕を引っ張った。彼はずっと彼女のことを想っていたのである。私はただ欲望の対象として付き合っていたのか。このことが私にまた愛というものを考えさせることになって行く。私の今回のようにしか始まらない男女関係、嫌なのだが受け身の立場の女性たちが多いなか、仕方がないのであろうか。つまり私はイエスの時代の男たちのように女性をモノのように扱い、牛天はその反対に無償の愛を具現したといえるのではないか。私は牛天の純粹さに敗北を認め、何か、ここからありがとうと言いたいのである。

みなさんへ

狂雲集という一休のかいたものがある。彼の幼き頃からの性体験をつづったものである。私にここまで羞恥心を乗り越えられるかと、突きつける感じがした。だ

が私は当時たくさんいたエロ坊主の代表ぐらいにしか思わない。目のみえない若い森女を好き勝手にもてあそぶ、天皇のご落胤で生活の心配なく淫蕩生活をおくる。かわいそうな森女。彼女はきっと幼き頃よりおもちのように男たちの慰みものになってきたのであろう。そんな彼女の意向も無視して権力をもっていたぶる破戒僧、一休。だが彼は思っていたのではないか、自分ほど彼女を愛してやれるものはいないと。ノボルという男がいる。R会信者の母親、妻、他人が鍋をかこみ彼の来るのを待っていた。そして登場。両方、膝の部分が破けたダメージジーンズ、いきなり部屋に飛び込んできた。鍋のまわりを跳ねながら「フェラしてくれ」と何回も連呼した。私はだらじゃないがかと思った。しかし昨年、入院し、ポータブルトイレで糞をしたときノボルの思い、そして因縁を感じた。つまり羞恥心に負けるな、偽善者になるな。糞はだれでもするではないか。子供のいるやつはみんなセックスの経験者だ。私はこれみよがしの狸談は好きではないが、自分だけはご清潔だとすまし顔でいるひともあまり好きではない。私の母は「自らは貞潔である」と何度も強く、私に訴えるようにかみ締めて言い放つのであるが、猥雑なバラエティー番組に笑いを漏らす。これがひとの実態であろうか。なにも考えていない。一般人は芸能人の浮気、ギャンブル好きなどには下卑た笑いを浮かべるのに、多分ご近所のことだったらそれこそ眉間にしわをよせて噂ばなしの俎上にあげるだろう。母から清らかさを感じられれば私は嬉しいのだけど寂しいがあまり感じない。だが大いなる愛は十

分感じるのだ。貞潔というのは物理的なものだけではなく純粋な心をたもつことにあるのは言うまでもない。自分のパートナーの裏切りを想像すれば、やはり辛いだろう。自らの渴愛、執着も乗り越えることはできる。そして子供のいるやつは経験者だからだれとでもOKなどとはけして言わない。セクハラは存在する。だれも愛のない下品な人物とは話もしたくないからだ。姦淫をしてはならない、羞恥心をこえ、聖なるものとして言う。最近、思ってきた。神として郷里で歓迎されずに敬意をはらわれなくてもいいではないか。それが目的ではないからだ。そして日蓮が故郷の小湊の浜を想ったように、やっと私は雄大な立山連峰を心より愛しているとはっきりといえるようになってきたのである。

みなさんへ

ついにその時がきた。私の愚かしいエピソードを語るときが。当時、私はゼミで政治史をとっていた。マルクス、エンゲルスの世界史像の研究である。たぶんソ連も存在し、ペレストロイカも始まっていなく、ベルリンの壁も壊されてなかったと思う。(かなりいい加減だな)つまりこの世界の三分の二は共産主義社会だったのである。理想的で平等な世界、だがどうして彼らは幸福でないのか。貧しくて、閉鎖的な現実。私は言った「結局、人間やろ」。ゼミの教授が小さな商社に就職し、同時にアマチュア劇団にも参加したことに對して「いつか自己矛盾がきつと起こる」と真剣な表情で言った。名前を忘れたが手塚治虫に似た男は「と

りあえずカネが大事だ」とバイトに励む私に、「苦勞しとるの」と欠席した商法の講義のノートを貸してくれた。そして髭を伸ばした、革命家きどりのやつが警察に就職が内定したことを私に非難めいてもらった。平等で査定がなければゲバラのというような献身的で真面目な率先して労働に励む人間が必要となってくる。そうでなければ社会主義というものは立ち行かなくなるからだ。なまけものばかりになっては困るのである。そうそれが怠惰である。自分のことなら仕方なくやる、カネのためなら目を輝かせてやる、でも他人のためならひとまかせ。こういうひとたちばかりではどうにもならないであらう。バイト先の社長が新しい店舗を出した。思わしくない。とられていた寮費が千円上がることになった。私はすこし赤色に染まっていた。それがきっかけで労働条件について年下の仲間を先導して社長と団体交渉をすることにした。ラーメン屋で一度経験のあるイノセは社員なのに賛同してくれた。クラノスケもボーリング大会の罰ゲームから坊主になった頭でうなずいた。牛天も自宅からの学生バイトでたとえ辞しても生活には差し障りはないと寂しげに言った。バイク好きのグジョウも参画を約束した。それに先立ち、私はクラノスケを連れ労働局を訪れ、パン工房で知的に問題のある子が不当に扱われていると訴えた。しかし職員は怪訝な顔をして反対にいらまれ取り上げてはくれなかった。徒弟制度。パワハラ認識はまだまだった。社長の「若い奴はなんぼでもおる」という言葉が引き金となった。ある夜、話合いがはじまった。私たちの要求に「一度許せば際限

なくなる」と答えた。私は座っているイスから立てなかった。私達の行動は本当に正しいのか。明けて、タイムコーダーのある机の上に5人のタイムカードが重ねられた。イリヤマは「そんなことしたら駄目ですよ」と血相を変えた。店長は厄介者ここにきわまりけりと淡々としていた。私はイノセの面談に付き添い、彼は喫茶店への就職が決まった。クラノスケは私とともに学徒援護会の世話になり学生街へ移りすんだ。私は何度もいうが本当に正しかったのであろうか。私は社長に感謝すべき立場にあったのかも知れない。

みなさんへ

私が神であることをみなさんが信じなくても私はいいこうにかまわないのだ。困るのはあなたたちである。というのは少し冷淡だろうか。私はハッキリいって今の生活が維持できるのならそれで十分満足している。高い地位が欲しい、富が欲しい、名誉が欲しい、権勢が欲しいそんなものは求めてはいないのだ。それより私はひとつのカテゴリーのなかに組み込まれることや、ヒエラルキー（身分制度）のなかにむりやり窮屈に取り込まれることが嫌なのである。「当たり前だ。俺は神だぞ。人間の作った権力構造のなかに閉じ込められ、はめ込まれてたまるものか。」 マリリンモンローが主演していた、ある映画で「このおんなは金目当てで結婚しようとしている」という言葉に「あなたの娘さんに貧乏人と一緒になれとおっしゃる」と返す。

私が所属していたR会の開祖はバチカンとも手を結び富と名誉を手にいれる。いやしくも宗教にたずさ

わるものとしてどうあるべきなのか。私はこだわらないことが大切なのではないかと思った。しかしやはり脱会して思うのだが、宗教を使って公然と金儲けにはしるのは、いかがなものかと思うのだ。会員に問題意識がないのは情けない。ただ流されていく。驕慢と言われるのを恐れ、金のことを口にする下卑たやつだと思われるのが嫌だ。自分と家族のためには半分マヒした頭で、百万とお布施はつつむくせに仲間には百円の錢でも奢らない。だが私には開祖に恩がある。法華經の修学ができたことだ。その知識は逆縁となり本当の意味での私の南無妙法蓮華經を生み出すことにつながったからだ。「ありがとう庭野日敬殿」彼は肉親への煩惱からは離れられなかったみたいだ。一族は榮華を極める。一将功なりて、万骨枯る。諸天善神はいずこかに去ったかもしれない。私を愛し隣人を愛する人たちはきっと本当の幸福を掴むであろう。死んでも生きても。愛をもつものはそれ以上に愛を与えられ、愛なきものはどんどん、すべてを奪われ悲痛な叫びをあげることとなる。愛を見出せず泣いている者でも私を見出すものはやがて笑うであろう。しかし富、財産をもち笑っている者はその愛のうすさの為に泣くことになる。これが神の国の奥義である。私が自らの文章を拙文といたり、また神の自動書紀であるといったり、唯我独尊と宣言したり。神は偉そうで謙遜する。自由自在なのである。では高慢で卑屈かという。違う。それは演技というか意識的ということである。つまりセルフプロデュースなのである。愛は自在である。

みなさんへ

下関からきて店を開いたという男がいた。居酒屋である。かなり遅くまでやっていて左宮職人や建築士など様々なお客がバカなことをいいながら騒いでいた。私も傷だらけにされたホンダのプレリウドを横づけしてしこたま酒をくらった。男の籍はどうなのかはわからなかったが、「やはり、我々日本人とは違う」と男の下で働いていた通称、ゴローは不満げにいった。

（本当は後藤という）男は虚勢をはるのが好きなのかいつも腕を組み偉そうにしていた。そして自らの人生訓を語るのだ。まず一番は自分、それから子供、そして身内。そしてもっとも愛さなくてはならない妻は何番目にも出てこなかった。結婚した理由はただ処女だったから。私は私の心の醜さを見せつけられた気がした。男はいつも「能書きたれてもしょうがない、実践と結果だ」と彼を慕うお客に吹聴した。奥さんは本当に地味で目立たないひとだった。心境はどうだったであらうか。ゴローちゃんはその後、男と折り合いがわるくなり、あるスポンサーがつき、焼鳥屋さんを、はじめたもののいくばくもなく失踪してしまった。付き合い合っていた人妻に甲斐性のあるところをみせ、所帯をもちたいと思ってあせったのであろう。男は私に当時の恋人と最後、つまり結婚まですすめといったが、ただ一点、そう彼女にとって、私は二人目の男であった。いまから振り返れば、小さな、寒がりな、泣き虫な女の子だった。尾崎のオーマイリトルガールの詞にでてくるような娘。二人とも幼かった。アイラブユーの世界でもあり「落ち葉にうもれた空き箱みたい」私の部

屋は乱雑に散らかっていた。汚れた心象風景のように。男は自らの「思想」と愛という「理想」の違い、矛盾を認識していただろうか。私の彼女に「働くようになればもっといいひとが現れる」私の面前でそういつていた。だが彼女は言った、「優しいもん」。私の名前さえ呼べない純情な子だった。俺のどこが優しいのだろうか。今思った。確かに俺は優しい、生きること計算がなかったからだ。世間に出るといことは男のいうところのいいひと、だがある面では自分に固執した計算高い醜悪な奴等に囲まれることでもある。悩んでいる私に一級建築士の35歳のモリちゃんは「もう二度とああいこう子はあらわれんよ」というと時速百キロで車をぶっとばした。競争社会からエアポケットのように存在する俺。彼女は言った。幸せは私と一緒にいることだと。私は何か誇大なものを意識していた。22歳の別れ。彼女にはこれでよかったのだろう。私は夢、愛に悩んだ。現在、処女願望などは一抔もないのだけれど、聖なるものの因縁は許さないみたいだ。しょうがない、俺はただ素直に女性を愛したいだけなのに。神というのは辛いものだなあ

みなさんへ

母に伝えたいことがあります。あなたとはよく衝突しますね。なぜだろうかと思います。第三者を引き合いに出した譬え話というか半分悪口めいたものには手柄話を含ませて共感してくれるのに、あなたへの批判めいたものには即、怒りでかえしうまく咀嚼してくれませんね。その表情は鬼です。それがずっ

と尾を引きます。なぜでしょう。あなたは多分、学歴からくる劣等感から私の意見が耳に入ってこないのでしょうか。私の人生に嫉妬して、自分が情けなく思うのでしょうか。なぜ息子が善い話をするようになったと喜んでくれないのでしょうか。「深い溝の泥と草を除け」そんなことができたら障害者としてフラフラしていません。「ベランダにある梯子をおろせ、わしがやる」このひとなぜ無理に頑張ろうとするのだろう。そんなに老いが怖いのか。そしてまた感情的な怒り。もういやだ、こんなひとと同居するのは面倒臭いが少し蓄えがあるあいだにアパートへも真剣に引っ越そうかと思う。ひとには持ち場があるシルバーの方とかヘルパーの方とかいらっしゃる、そういうサービスを受けることがなぜ情けないのか。溝に泥があれば雪は流れない。ならば、みんなのことを考えてすべてに配慮すべきだ。そして教養は録画してあるライブのワイドショーを半分眠りながら観ていても遠ざかることはあっても身に付いてくることはありえない。私は育てられた恩も忘れ母を非難している。イエスは言っている。たとえ肉親であろうと神の教えを守らないものは神の国には入れないと。神はあくまでも公平なのである。私の一番近いところに高慢、強情といった悪徳が存在するのであれば、やはり目をつぶらず正さなければならぬ。聖書にもある、注意して背いても七の十倍許せと。母を餓鬼道から抜け出させるため、この試みは彼女が死ぬまで続くのかもしれない。彼女は私が「義人」の役割をはたすために誕生させ、その命

を守り育んできたことを第一に誇りと思わなければならないのである。自らが聖母マリアであると自覚したとき彼女の人生は真実の意味において本当に栄光あるものとなる。それは私が「母をそしるな」という戒を守ることへとつながり、母への大事な法の布施になるのだ。

みなさんへ

母が決断した。家、土地を売るそうだ。妹が姑さんのお骨がまだ家にあるのに友人と旅行にいったのが決定的原因であった。妹の善意が信じられなくなったというのである。しかし私が思うには妹と母は一卵性親子のような関係にあり、姑さんと比較すれば全くといっていいほどその想いの深さは違うだろう。母に認知症が入ったか。固定資産税、地代について。これから住むために支払う家賃との比較は。また家、土地の売却益もくろみは。考えたらしんどくなる。聖書はかわるなという。母の所業と流れにまかそう。いざとなれば私は去ることにしよう。成人すれば自立するのが筋である。母のなかの名誉、カネへの執着はとれそうもない。聖書に記されていると前にも示したが、よきことを聞いても悪魔に記憶を消され、また生活の煩雑さに心を奪われ、富と快樂におぼれてしまう。最後まで信仰を忍んで保つものだけが永遠のいのちを得る。だが私は決して永遠のいのちというものが欲しくて母と別離しようと思っているのではない。このまま価値観の違いでぶつかりあい、すべてをなくしてしまうのがいやなのである。エホバの証人がいうように悪

人は死んだら土にかえる。それでもいい、嫌なこと、悲しいことを知覚せずにおれなくなるのならそれにこしたことはないからである。私はただイエスが示す永遠のいのちというものがあるのなら、その世界へと向かってあげなければ彼がかわいそうになってくるのだ。この世、全体を敵に回し、神、隣人への愛を説き、痛切な覚悟をもって十字架についたイエス。愛しいのである。予定調和。私はやはりどんな困難、ひどい目にあっても誰も恨まなかった。彼と思想はアナロジーしており、聖書はまた私を領解してくれるのである。つまりはすべての苦難は神になるための大切な試練であったと思う。母に現実問題を、かつけ、逃げるみたいではあるが、私はいま聖書とワープロがとりあえずあればよいのである。必要なものだけもって新天地へ逃れようと思う。釈尊みたいに親不孝が最大の親孝行になるに違いない。彼女はまた社交的に楽しく余生を渡っていくのかな。彼女が目ざす教養とやらを追いかけて。私は確かに彼女の保護下にあったのかもしれない。しかし離れることによってやっと本来の通信、面会などの自由が手に入るように思う。聖書はいう。父母、子、兄弟を捨てて付いてくるものでなければイエスの弟子にはなれない。家族みんなを客観し、やはり物理的にも親族と別れなければ。そんなさだめが、私と聖書の道を行くものたちにはあるのだろう。そしてそういった人たちが真の兄弟と互いをよびあう日がきつとくる。

みなさんへ

ある人に言われた。母と離れて暮らせば気になってしょうがないのではないか。だが、たぶん私は、特になんとも思わず暮らすだろう。冷酷だろうか。そうではない。「母だから気にする」。これでは生きとし生けるものすべてに気をむけなければならぬ立場として。神は自らの存在の意味を自問自答しなければならなくなる。だが母を想っていないようで私は想っている。包括的に常態として。そして愛するものすべてを。母だけをひいきにはしない。御嶽山の噴火や広島の大豪雨のことをどこまで気にかけていられる。だが心配する。私の場合、最も肉親といえる母にもそういう気持ちということだ。前に吉本隆明が「親、兄弟のためには死ねないが天皇のためなら死ねた」と言っている。と記したが、その意味は当時彼にとって天皇は愛だったのである。そして国家は神道によって靖国神社に英霊として奉られると死後の栄誉までを保証したのだ。宗教的な縛りが兵にもたらされたのである。軍部、大本営に愛はあったであろうか。アジアのための解放戦争はやはり戦禍を呼び起こすための侵略戦争であった。そしてムスリムのテロリストなど神のためには死ぬことも辞さないものもある。洗脳だろうか。ひとはやはり宗教、思想などを、よすがとして懸けるものを生きていくうえで求めているのではないだろうか。初めての発症時、テレビの画面に明治天皇の写真が何度も現れた。その意味は。いま思うのだが、つまり国学とともに発展してきた神道を、薩長門閥政府は中央集権化と国を挙げた強兵の為、カリスマに祭り上げた明治天皇と一緒に利用したのである。血の穢れからはなれ、

五穀豊穡の祈りの神事を行ってきた天皇が、軍の統帥という最も野蛮な位置にすえられたのである。そしてそのあと太平洋戦争で一旦国は滅びることになる。皇室もさかのぼれば結局、創造主、聖書の神に行き着く。そのことを明治天皇は私に伝えたかったのではないか。これにて内村鑑三が教師のときひきおこした教育勅語に対し拝礼せず免職させられた、いわゆる不敬事件もエホバと天皇、その兼ね合いから明らかにされ私の中で解決するだろう。いずれにせよ内村が一番美德とした謙遜よりも、毅然として相手を尊重することを、みんなで、させてもらうことが、神は喜びまた人々の魂の浄化にもつながっていくに違いないと思うのである。そして明治天皇が設立された医療施設へ、新米から一歩進もうと、今日も姪は看護師の務めを果たしにでかける。頑張らずにガンバレ千華、お前も神の国の住人になるんだよ、いいね。

みなさんへ

やはり母には違和感を持つ。自分自身の短所は覆い隠すようにし、外面よく善人ぶり、絶対に核心をついた問題解決につなぐ真実を見定めようとはしない。ひとによくいわれたいのだ。私を本質的に傷つけ侮辱すれば、それ相応の罰は避けられぬと前もって親切に教えているのに、イエスキリストに逆らい、何が悪なのかも理解しようとしない。この調子で祖母、父に逆らい、居丈高に世の中を渡ってきたのだ。まさに厚顔無恥、万死に価する不遜である。素直に先生に相談し私と喧嘩になる理由を明らかにし、私と今後どう向き合わな

ければならぬか聞いて来いと促したのに、私の行く末をただ案じているいたいけな老婆を演じてどうなるのか。私の幼き日、理由は忘れたが父が怒り私に近づいた。母が私を抱きしめかばった。父は母を殴った。私はこの行為に及んだ父の気持ちがいま解ったのである。正直、母にはつねられたり蹴飛ばされたりはしたが、父にそういったことをされたのは一度もなかったのだ。今回の件も父は私に手をだすつもりは毛頭なく母が勝手に私をかばうように介入してきたのである。父はこれみよがしに母心をみせつけるマリアにある種、差し出がましさを感じ暴力に及んだのであろう。父親には父親の果たしたい責務というか、思いがある。それを横からわけもわからずさらってゆく母に猛然とした怒りが湧いてきたのであろう。母は妖怪である。父をじわりじわりとあやめていったのである。甲斐性なし、病人、アルコール依存となぶり殺しにしたのである。今度は私の番だ。自分の支配下におけないならどこかへ隔離してしまえ。朝令暮改、ちゃんと精査、咀嚼もしないうち、舌の根もかわかないうちに、持論を私が質問する途中から撤回する。私も母の老齢を考慮した関係修復のため一度では理解しなくなった聴覚に二度、三度声をかけることをいらつかないように努力している。素直に愛情を表現できない人、そのくせひとには情実を求める。叩き殺すわけにもいかず。かつて狭い家に6人で住んでいた。そりゃケンカになるし、父も外へ出かけていきたかっただろう。母の生ぬるい縛りからの逃避。辛い私もそうだ。外へは出ないが自室に閉じこもる。話はとぶが、盛り場。核

家族がふえては飲みに出る人も少なくなったか。ヘルシー志向は災いか。結局、内輪が面白くなければみな外へでるだろう。話は戻る。見方をかえれば医療保護入院を私がまた引き起こすかとそればかりを母は案じているみたいだ。が、自分が死んだらどうできる。私は彼女が死んだ後からも縛られるのはまっぴらだ。私の方が先に逝き、父と缶ビアで乾杯したい、「みやげ話はたくさんあるが。今は、話すの、やめとくよ」尾崎のマネをするなど父に肩をたたかれそう。アー少しはスッキリした。いつまでかわからないが母との暮らしは続きそう。

みなさんへ

私は悪人ではない。が、母をひどくののしり非難して。彼女に愛がなくはない。でもなにか違うのだ。それは利己愛であり自分の価値観を押しつけようとするものである。恥じをかきたくない。だがそれが傲慢につながり他人に対し圧迫感を含めた不快感を呼び起こすのである。イエスは自分の家族、親族だけを守ろうとする執着を愛とよんだのではなく、他人が隣人へと変化していくようなそんな広がり（アガペー）とよんだのである。当時すべてをモノでしか換算しなかった時代に神の愛の真実を伝えたイエスは画期的な思想家とも呼べたであろう。私も孤独感にうちひしがれるときが結構ある、それは神を忘れるときである。聖書と最良な関係でいたいと思う。私は思う。人間同士、孤独を癒しあうなんて不可能なのではと。妬み、嫉妬にさらされ侮辱され、ひとの心のかたくなさに気

落ちすることが幾度もある。なぜ製本する。カネ儲けか。違う。みんなに布施の心を知ってほしいからだ。こんな感想がかえってきた「みんなが本をもらうがならもらう」この主体性のなさと私の本への侮辱的な軽薄感なんだ。私は広く遍く考えを、塗りたかったが、やはり解るひとにだけ渡すべきだろうと思った。終末はイエスの教えが世のすべてに及んだときに起こるという。この意味することはなにか。いつだろう。世の中の物質主義、拝金主義がおさまっていくとはどうしても思えないのだ。老いて施設へ入居すればきっと規則に縛られ、他人の侮辱を受け屈辱感にさいなまれ、もどかしさと苦痛のなかで最期を迎えねばならないのだ。なぜか、それは職員も生活のなかで傷ついているからだ。だがその屈託がみんなにまかれること、その負の連鎖は、なにかによって断ち切らなければならない。それは愛しかない。いつか自分もそんな立場になるかもしれないというおそれも大切である。そんな想像力が本当の思いやりにつながる。ひとはみな悪人といえ悪人である。だが善人といえ善人なのである。それには正しい信仰が必要になってくる。寛容と厳格の取扱い、良識、友情、隣人愛、そこに発展していくためには精進しなければならない。なにも山の中を駆け巡れとは言わない。細かいことにはこだわるなということである。大意に愛をかんじられればとりあえずはOKだ。そうでないとひとは必ず孤独におちいる。孤独との闘いには愛が不可欠である。尾崎は言う「新しく生まれてくる命たち、決して君たちは間違っ
てはいない。だれもひとりにはなりたくないんだ」永

遠のいのちというものが存在するならば、若者を社会人教育の下、困惑させ、また試したりして、混乱させる。愛をねじ曲げる必要は、指導者にはなくなる。もし親子が大きな真実で裂かれ別々になろうとも、もう良心の呵責に苦しむことはない。そこにあるのは煩悩を滅し成仏した人々の微笑みだけである。

みなさんへ

私にはひとつの大きな人生の節目になる恐怖体験がある。大学を卒業して故郷へ帰ってきた。そこには私のいままでつき合ってきた連中とは違うタイプの人種がいた。いや私が彼らの常識とは異なった人間だったのかも知れない。タイヤショップをはじめた男。そこにはクルマというもののもつ危険な魅力にとりつかれた凶悪なやつらを含めた若者が、たくさん集まっていた。みんなで海水浴に行くことになった。誰が呼んだのか知らないが女の子が数人きていた。キャンプ場。私たちは食事を終え、火を囲んで団らんにいたるはずだった。私はある女の子の横にいた威圧的な面をした男に「カールルイスよけ」と横柄にいった。彼は昔柔道をやっていたらしかった。私に「ちょっとこられ」というと寝技の勝負をしようといった。私は少し酔っていたが引くわけもいかない、と付いていった。彼はいきなり私の首を後ろから絞めた。私は心の中で「悪かった。許してくれ」と言っていた。声にはならなかった。意識が遠くなってきた瞬間その手は放された。私はすぐに立ち直って「死ぬまでやるか」と言い放った。彼はバーベキュー用の鉄櫛を持って身構

えた。なんとか私の面目は保たれその場は収まった。その後、彼はコンセンサスを得るため、みんなに日頃どれだけ私が自分を侮辱しているか訴えた。年上の私にあそこまではひどいという声も聞こえた。私は同年の昔馴染みに「殴り付けてやりゃよかった」と強気の発言をしたが心の中では「殺されなくてよかった」と思った。銀ちゃんのように好き勝手やってきたが、「危ない彼」のおかげで言葉を慎むことを覚えた。女の子たちは完全に引きしらけてしまっていた。「誰がいけないという訳じゃないけどひとはみなわがままだ」私は心底、胸にしみた。どういう立場にあらうとひとを傷つけ、侮辱してはならないことを。彼は、いまどう思っているだろうか。家業の酒店に何度か訪れてくれたが、私はいま彼と会ってうまくわらえるだろうか。だが彼との邂逅において得たものは本当に大きくて彼は人生の恩人と確実にいえるのである。そして近くの年下の風来坊がいろいろ私の意見を否定してくることに對して「俺はお前とはなしをしても、一文の得にもならんがだぞ」と突き放した。だが彼は最近解ってきたみたいだ、状況を読み心に、思いやりが満ちてきたみたいだ。そうだ私が言いたかったことは「ひとを立てればところに倉が立つ」ということである。しかし真実を語る私は誤解され偏見をもたれ嫉妬にもさらされる、ひとに同調、迎合ばかりもしておれず、黙して語らずが、最善なのであろうか。石原慎太郎が政界を引退した。「すきなことをして、すきなことをいって嫌われて死ぬ」もしかしたら大事なことになるかもしれない。とりあえずは耳を傾けるひとが幾人

かはいるかもしれないからである。

みなさんへ

この病気を受け入れるのにどれだけの人が苦しんだろう。失望からはじまる予後。みるも無残にかわる外見、人相。仕事を奪われ、結婚の夢は絶たれ、偏見と差別が容赦なくおそいかかる。何人のひとが自分を撃ちぬきこの世を去っていったであろう。「生存競争のなか、生きているやつらは、みな、いかさまな賭博しき」尾崎豊は叫ぶ。病気になったのは本人に責任があるのか。不器用な生き方、みんな悩むところだ。生きていいのか。年金、生活保護。ある身体障害の教育者は憲法25条生存権を受入れ、実あるものとして認識し納得するのに10年かかったという。知らず知らずのうちに世間の常識とやらにからめとられている。「社会に役に立てるのか」。真面目で道徳的な人間ほど障害とのギャップに苦しむことになる。私の母は優しい。崩れた私が堂々と人前にでることに一切とやかしくは言わなかった。山田洋次監督の寅さんの映画の中「お兄ちゃんより、おいちゃんたちが、辛いときもあるのよ」というセリフがでてくる。つまり本人よりそれを見ている家族の方が辛いこともある。そうだろうな。自分より愛する家族が職場や学校で理不尽なことにあったとしたならその憤り、悔しさは尋常なものではないだろう。みんなしたたかになれ、自分を責めるな。一病気じゃないか。雅子様を見よ。国民の前にさらされてもご自分なりに強く生きていらっしゃる。病気、障害を気にして生きるほど世間はせまくはない

だろう。確かに多様な人生を認められず、かたいひとほど健常者との溝に苦しんでいるように思う。「いつになれば、這い上がれるだろう。どこへゆけばたどりつけるだろう」こううたったあと尾崎は言う。「自分だけが悲しいのだと思っていた。みんなも悲しいんだと気付かずにいた」待合室で声をかけた女性には無残にも無視された「私はあなたがたなんか相手にしない」ということか。ある女性は逆に「絶対、健常者なんかとつき合わない。私たちの気持ちなんか理解できないから」と。かつての私のように結婚ばかりを夢見るインスタント焼きそばしかつけない女の子もいた。一人身の母親と同様、さみしくて孤独でいられず相当、年が上の男と一緒にあったがその後、風の噂にわかれたと聞いた。流れちゃいけない。したたかに生きなければ。「乞食三日やったらやめられない」という人もいた。それはそれ、自分の価値観をちゃんともつのだ。それは愛すること。神を愛し、隣人を愛すること。そのことを理解できないパートナーや友人ならばいいのでは。そう思ったとき素晴らしい幸運が舞い込んでくる。すなわち神の国の住人になり永遠の命を得る資格が生まれたのである。

みなさんへ

母を真の愛へ導くため日夜考えている。病弱で仕事もできなくなった父。いつもの場所、こたつに入り深夜までひとりで考え事をしていた。私は嫌だった。たまに父と枕を並べるとき大きないびきがひびいた。私は嬉しかった。生きている、父は生きている。母は問屋、

客とがんがん話をはずませる。彼女の悪いところは貞操観念も強いのだが、深く考えず狸雑なものいいをときどきするのである。彼女と話せばすぐわかるのだが、出世、富、財産、名誉いわゆる成功を求める価値観。利己愛をすて本当の美しさ、優しさ、慈愛を追求したいと思う父。神と富、心と金、水に油だったのである。真理は父にある。母には理解できないだろう。そんな父といのが辛いのなら私たち兄妹、いや私を捨てて出ていけばよかった。手柄顔で家を建てた、土地を買った、墓を立てた。母がいなかったら私は施設へ行くか、餓死しただろうか。だがこれも因縁。父はその母の猥雑なところを憎み、その単純な無作為さと短慮に手が出たのであろう。それは私に対する侮辱の回避からであり、父が嫉妬深かったと言うより、母の軽薄さを感じとった、父は聖なるものを愛していた。そしてそれは私の神としての神聖さを凌辱させまいとする、聖霊の意思であった。頑固で強情だが、根性が短氣に裏打ちされ利害関係にも筋を通す母の存在。私にとって、母は大事な役割を担っていた。でも子供が愛しいのは我が母だけだろうか。愛さねばならぬ妻子を偉大なる目的のためにすてられた釈尊。彼は見捨てたのではなく、このままいけば人間として共倒れになる。それではいけない。そして生命の秘密を解くため、あえて縛りになる親子の縁を切られたのだ。世は母をほめ父を嘲笑し侮辱しさらしものにする。釈尊もイエスもそうであった。父は神の奥義、仏陀のサトリをつかんだのかもしれない、それを私は信じたい。父は今パラダイスで、笑顔でいるに違いない。彼が酒をのんで失

禁した。自暴自棄になった。いや違う。どこかで自分を批判する母への復讐があったのではないだろうか。正直に生きたかったのだろう。見栄、体裁なく優しくて弱い人、そういう人を神は好きなのである。仕事もしないプラプラした男で、てんかんで倒れる。驚愕する母。だまされたと思ったと語る。だが父は史上まれにみる、ナイスガイだった。見抜けず、評価できなかった母。生きてくため、母は素直に利己的で非情だった。彼女が父を否定することは、私の現在もすべて消し去ることに繋がる。悪魔の体制の意味を知らない母。他人の不遇は自己責任で片付ける。父は脳動脈瘤という病気だったのである。辛かっただろう。それを乗り越えて愛について哲学していたのだ。ヒモではないのだ。もしそうなら母は家を出ていったであろうか。「彼女は気付いていたか。彼の価値を」いま、きっと父は言うだろう、母に、「長い間ごころうさん、ありがとう」と。私もまた同じ気持ちなのである。

みなさんへ

11 年ぶりに雅子さまが宮中晩餐会に御出席された。喜ばしいかぎりである。「良かったね」と母に言う。「しっかりしてもらわんなんちゃ。天皇陛下らっちゃ、歳いっとるがに」これでまた私たちは冷戦状態となった。まだ俺たちの病気を理解してない。学習能力がないか柔軟性に欠けているといわれてもしょうがない。読売の第一面だった。ウイレムアレクサンダー国王の英語によるスピーチ「戦争の犠牲者の悲しみは今も続いている」次の御言葉が心の琴線に響いた。「和解の

土台となるのは互いに背負ってきた苦痛を認識することが不可欠である」そうである。日本軍によってたくさんのオランダ兵俘虜が激烈な仕置きと扱いに苦しんだ。そして日本の兵隊も南方で、満洲で、朝鮮で中国、太平洋の島々でたくさんの犠牲者をだした。もちろん民間人、国土においても。戦争というものは人々の命、財産、自尊心を奪い焼きつくし踏みにじるものである。戦争は「血を流す政治」というが、民衆はおどらされ、気づくころには屍を重ねることとなる。つまり銃弾一発、発射されたとき、すべては失敗に終わったと思わなければいけない。それほど平和とは尊いのである。絶対的平和、それは神の国の招来である。そしてそこに入る一番手は幼子のようなひとであり、無欲で正直で、恐怖、さびしさを知るものになる。なぜならそういう人々は悲しみ、優しさ、を人一倍もっているからである。目標めがけて一目散というのではなく、心安らかにいまという時間を愛で満たし自由に生きる。それが一番大事。そして、いくさ、金、そんなものに囚われない安楽な世界を、求めるものたちを私の周りに生み出すことができるだろうか。わからない。イエスという「預言者は郷里、親族には敬意もうけないし歓迎もされない」と、だからこそ私のしたためた、文章を頒布したいと思うようになったのである。なぜか、権勢欲か、問う必要はもはやない。そんなことよりこの世は経済物質至上主義に覆われている。イエスの誕生を祝うクリスマスさえ単なるプレゼント交換の日となる。国家間の外交をゲームみたいにフカンする。そして金融、経済、もてあそぶ、そんなやつ

らは排斥しなければ。いつも泣きをみるのは社会的弱者である。そして人生、愛情を本当に知っているのはそういうひとたちなのである。出世、名誉、他人に評価され認められたところでどうなる。認められないものは自慰行為だと言う。では聖霊があかした、私の言動がひとりよがりだと。まだまだ、いやここにきてまで、真の教えは広がってはいないのである。

みなさんへ

たえまなくぼったてる力、生きよ、生きよとけたたましく追い立てる、騒々しい力。人生に絡みつくもの。闇に裏打ちされているもの、それがサタンである。因縁を切るという言葉にお墨付きをもらい、ひとを肯定したり否定したり。個人崇拜させ、自然で正直なものを言葉で虐待し、意志を抑えつける信者たち、そういう教団がある。生命力といえば聞こえはいいが、なまぐらものへムチ打ちの刑ともいえる。なぜぐうたらしてはいけないのだろう。なにかを恐れさせるようにしむける。アリとキリギリス。当然、現代ではアリが過労死するかうつ病になるだろう。いずれにしろどちらかが早い、アリもキリギリスも死ぬのである。とにかく今日安楽に愉快に暮らすことが最優先である。訳も分からぬものに没立てられ、なにものかのために死んでいく。これでは報われない。どうすればいいか。すべて神に委ねるしかない。それが神を愛することである。具体的にいえばモーゼの戒を守り悪徳の芽を摘むことはかつて最重要だった。そしてやがてイエスへの信仰の崇高さを知る。「父の御名があがめら

れますように」「御国が参りますように」また久遠の本仏への帰依、日蓮大聖人「南無妙法蓮華經」の唱題。そして自分の意志で行動を選択する。嫌なものはいやハッキリする。生きることがいや、そうだそこから始まるのだ。まずは自分らしくである。脑梗塞になって動けなくなったらどうする。どうするといわれてもなっていないのだからどうも言えない。それこそ因縁だろう。まず自分の生存の心配よりも心に愛をえがくことのほうが断然、大切なのだ。サタンがやみくもにしむける自分のためだけの努力、金儲け、スリルを求める賭博、そしてほめられたいばかりの名誉欲などからは離れなければならない。私は決して刹那的に生きろと言っているのではなく、苦行ではない自己修養が重要であると示すのである。つまり優越感、達成感からも離れた世界。そこに自らの優しい慈愛の心を保ち育てることが大事だと示すのである。高慢、貧欲、怠惰、好色、嫉妬、誇り、邪惡、怒り、強情などの惡徳からの解放。殺すな、盗むな、隣人に偽証するな、隣人からむさぼるな、姦淫するな、みだりに神の名をよぶな、神をただ信ぜよ、偶像崇拜はやめなさい、休日を安息日として大事にきなさい。これらの戒をすすんで喜んで自発的、自主的に守る「あなたにできるかな」。思いやりをひとに向けてるとき幸福はおのずからやってくる。サタンは悪い欲望への誘惑である。私とて気をつけなければならない。でも主体的に生き、愛をもち運命に身を任すとき。神仏は微笑むだろう。イエス十字架の死。贖罪。すべては信仰により聖霊が心に宿るからである。惡の因縁は去る。今はそれしかないの

である。

みなさんへ

サトリとは上昇することでも進化することでもない。もちろん停滞することでもない。そんな価値観から離れ静かに微笑むところにある。釈尊（仏陀）の禁欲はそれが安楽だったからである。苦行をされていたのではない。渴愛からの離脱それを正しく念じられていたのである。またひとに苦痛をしいていたわけではなく、そこに喜びを見出してほしかったのだろう。大乘の立場から、釈尊のお弟子たちを小乗と蔑視するのだが、ただサトリというものをなにか得体のしれない難しいものに漠然と持ち上げてしまったのではないだろうか。禁欲的に生きられないことをごまかすため大乘というものはうまれたのか。釈尊の肉声が聴けない時代、現世利益に向かう姿勢。貧病争の解決。あながち大乘を否定できない。末法、そこに利他と自律があるのなら。仏とはそんなものかも。阿羅漢というサトリの位置が、釈尊の教えを受けたお弟子たちのなかにたくさんあったのは事実だ。釈尊の肉声からのサトリはあったのだ。その後、多くの導師といわれる人達は欲望にうまく向き合えず、霊的自信もないくせに、大衆をすくうためと、他との差別化をはかり、自分たちだけがなにか特権をもっているかのように、みせかけるため長い儀礼を行っている。そういうことが間違っているといわれたのが釈尊であり、イエスなのだ。

人間関係とはおかしなものだ、自分らしさを突き詰めていくとき、たとえ親であろうと責めたくなくてく

る。十揃ったものはいない。ひとには思い込みもあるし、負けたくないという自意識もある。それでも隣人を愛することを諦めてはならない。釈尊は怨念から釈迦国を滅ぼそうとするルリ王の前に三度立たれた。ルリ王はその度、兵を引いた。四度目釈尊は因果応報に逆らうことをおやめになりその前に立たれなかった。政治はいつも思惑によって移り変わる。釈尊は不変の人間の幸福というものを布教されたのである。智慧と慈悲、簡素な生活にしかそれはない。小乗とよばれる声聞、独り悟る縁覚も、菩薩道を歩んでいけば仏になれる。一仏乗の教えが法華經にて現ぜられる。そして宮沢賢治は菩薩行、農民救済に全力を傾けることとなる。彼の利他の精神、悲しい自己犠牲だった。法華經で大事なのはふたつ、正しい修行をつめばだれでも仏になれるということ、久遠の仏、釈迦如来はいつもいろいろな現象を与えて仏になる道を示してきなさる、すべて速やかに仏へと。それは末法の今、安樂行、南無妙法蓮華經の唱題しかない。私は最近、少欲知足というものが悪魔への迎合に思えてきた。無欲で、あるがままに正義を愛し生きることが大事では。「自己実現をめざす」とよく聞くが私は個人的欲望をただ叶えることではなく、仏から与えられた特長を発揮し、みんなで平和を祈り、幸福になることではないかと思うのだ。それが大乘の精神である。

みなさんへ

人間とは忍耐の限界というものがある。飼い猫ソチが煎餅布団のうえあぐらをかき拙文をチェックしてい

る私の膝の間に行き来し何度も乗り込もうとする。毎日つづく。私は部屋から追いだしたくなる。私が酔っぱらって転び後頭部を打ちつけ、できた壁の穴を引っかき回す。そして我慢しきれず、今日首輪をひっぱり部屋から追放した。そして開放してあるドアを閉めた。乳幼児、児童虐待も同様のことではないだろうか。自分の忍耐力に自信が無くなったとき、しずかに南無妙法蓮華經と手を合わせよう。なにかに対してバカヤロウ、許してくれる仏様にアリガトウ、罪を定めない神にスイマセン、破れた心がすくわれていくだろう。DV、虐待、悲しいが、ひとはみなわがまになっている。皆傷ついている。もし世界中の人がいっしょに全部眠るように死んだら人々に平安が訪れるだろうか。残った核燃料の関係で地球の生き物は破滅するだろうか。繰り返される悲劇は消え、それもよしと思うのである。時代がすすんでもそこには新たな問題が山積してくる。複雑になればなるほど人間はなにかに苦しめられる。人類の進歩、その美名の陰で流される醜い涙。貧欲が生み出す軍拡競争。平和にてきとうにプラプラ生きたい。優しいならそうおもうはずだ。聖書の神とイエスの約束とは、「父ちゃんに頼まれハイライトを近所のたばこ屋に買いに行く」。それと同じである。なんとぬくもりのある、あたたかい関係であろうか。イエスは言った。「父ちゃん、できればしたくないけどその心のままにするよ」そして十字架についた。賢治はたくさんのものに支えられていることを熟知していた。だから役立ちたかった。最近の浄土系に娑婆、現世を肯定しだすところができた。親鸞のおし

えからすれば葬式はいらない。念仏もあまり勧めない。現世での救い。歎異抄からの親鸞の本当の救いと銘打っている。彼らの普遍的であるはずの核の教え南無阿彌陀仏が、あからさまに現世利益を求め、高森顕徹の人生論によってラッピングされる。もはや「後生の一大事」極楽へのパスポートという中身もすり替えられているかもしれない。この世が一見、平和に見えるからか。開き直りこの世を諦観する念仏がネガティブと断罪されるのが恐いのだろう。「悪人正機」親鸞の詭弁だが、なるほどこういう論法もあるのかと思っていた。しかし、蓮如からか、現世利益の風に押され、既成の真宗は葬式、先祖供養を勧めるなど換骨奪胎してしまった。悪魔は狡猾に動く。日蓮系からの批判をかわすのはずしにもとれ、すっきりしないが、高森顕徹の親鸞回帰「歎異抄をひらく」は売れているみたいだ。だが親鸞会、会館の広さを誇る。ご多分に漏れずそこにあるのは金儲け。それは否めない感じがする。親鸞、蓮如を都合よく利用。真実の教えは、勝手な悪人同士の談合、日和見からは生まれない、いずれにせよ、本物は、南無妙法蓮華経。つまり即身成仏。本当の意味での説得力、実感にある。そして人は自分の十字架(想い)を担いでいなければ。利他の精神により幸せは訪れる。

みなさんへ

病室が一緒になった。彼は私と歳も近かった。みためは怖い顔をしていたが、口調、声色から受け取る印象から推察するとおとなしく従順なひとであった。「は

い」「はい」命令に服従するように応答する。看護人はいつしか彼を呼び捨てにしていた。私は親しい看護人に「さん」付けするようにもとめた。私はそんな彼の姿に対し「何故か」と自問自答していた。彼の無抵抗さに侮辱される原因があるのは明白だったからだ。彼に職歴を思い切ってたずねてみた。強烈な命令のもと60キロにもなる荷を担ぎ運び続けたという。辛かったと語っていた。「仕事を辞めるとは考えなかったのか」。初めての社会、体験ならば何処へ行っても世間ではそんなことは当たり前だと思ったと言う。彼は耐え続けたそう。ただ食うために、そうただ食うために。生殺与奪の権を握られたと感じた彼は人間への不信に陥り、奴隷のように生きることを選択してしまった。彼が悪いのであろうか。彼は世間の冷たい風から逃げられなかった。彼は献立表を確認するため労をいとわず不自由な足でなんども歩行をくり返す。その姿、その表情はまさしく餓鬼である。「品性がないか」、そこがひとに軽んじられるゆえんであろう。しかし彼は優しい、本当にひとの痛みがわかるのだ。[泣きながらパンを食べたことのないものに人生を語る資格はない]ひとは自尊心をどこまで保ち続けることができるのだろうか。彼は私になにかを投げつけているような気がした。彼とは二人部屋だった。彼にイエスの聖句「ひとはパンだけで生きるにあらず」を伝えた。そして私の父親の話をした。無口な彼が「自分にはそんな立派な父はいない」と自分の意思を語ってくれた。ある日彼が私のベッドの脇に立っていた。私はなにをしているのだらうと。みると聖書の上に一片のカステ

ラがおかれてあった。どういう意味だろう。聖書より、つまり心よりモノのほうが上、つまり大事だと言いたいのか。だがそれは確実に違っていた。彼はさわやかな笑顔を見せたのだ。その表情は餓鬼ではなくまるで使徒ペテロのようだった。彼はひとに施す、つまり布施の精神が得心できたのである。彼は愚弄され嘲笑をうけ虐げられてきた人間だった。彼は「愛をつかみまた伝えることでひととしての尊厳も取り戻せるのだ」と得心した。私は信じたい。そして真由子先生と日馬富士のことで談笑する彼の姿に、私は彼の奥にある深い思いやりを、垣間見たような気がした。彼にとって相撲は、苛酷の代名詞にしか過ぎないだろう。一長一短なのが人間である。即、理想的なひとになるのは難しいことなのか。そんななかひとつの起点となるのにイエスの教えが真実、寄与できたのなら、本当に嬉しい。彼はオリジナルな苦難の人生があったからこそいまがある。優しさが生まれるのは、愛か、ただ繰り返し虐げられる生活なのか。結果、いずれにせよ、皆に愛ある生活がもたらされることを私は望む。そして彼の受容的な姿が、真に自らの心といつも一致することを、私は切に願っている。それが素直な利他の精神に違いないからである。私は彼を祝福したい。

みなさんへ

オランダで尊厳死が進展する。私は神への冒涇にはならないと思う。死ぬのが怖いひともいるだろう。逆に生きるのが辛くて死にたい人もいるだろう。そんなとき死に、神は手を貸す。神は愛である。苦しむものを

救う。生き死にが、神の領域だからこそひとがとやかくいう問題ではない。預かった命、お返しいたします。それでいいのである。やせ我慢しているひとは、そのことをひとにも押しつけるものではない。また死ぬほどの苦しみを背負ったことのないものがとやかくいうのもおかしい。みんな死にたくてもなにかが怖い。自ら命が絶てない。心配するな、後のことは全部、神が引き受けてくれる。病気、カネ、失恋、さあ死にたいものは死のう。新しい世界が待っている。木枯らし紋次郎は間引きされるところ、姉の気転、祭りの日にうまれた子は殺すことはできない。そのことをうまく、みんなに喧伝し、命はすくわれた。その姉は幼くして嫁に出され、妊娠中、夫のDVにあい、お腹の子と共に絶命する。紋次郎の心は死んだ。だがその底には姉からうけた情けがあつく流れている。どんなに貧しくても、どんなに辛くとも、たとえ自分の命をかけなければならない状況でも、ひとに対しての優しさはきえないのだ。だから斬る。自分の我儘、強欲さをなにかのせいにして非道を行うものたちを。親からも受けなかった、姉からの慈愛。彼は忘れてはいない。「善を追求めるものが幸せになり、悪党は地獄へ落ちる」そんな世界を望み続けるのだ。死に行く悪党があれこれ自分を正当化する理屈をいう、紋次郎は言う「死ぬときは黙って死ぬもんだぜ」悪党は彼に自分の境遇を哀れんでほしかったのだろう。だが彼は認めない、悪事に加担したときすでに弁解はすてなければいけないと思っているのだ。だから黙って首をつるもの、入水するもの、そのものたちの悲しみへの同情が禁じえ

ないのである。「自死するものは情けない」、あのこの言うひとはいる。だがひとは自分とは違うのである。人間は傷ついたり、卑屈になったりして死にゆくものなのである。ひとを責めちゃいけない。末期癌、苦しいなかモルヒネも用いず我慢して死んでゆくのもいいだろう。だがひとは自由だ。自分の頑なな思いを押しつけてはいけない。幻覚をみて意識が混濁するまえに、みんなに「ありがとう」といって永眠する。神は容認されるのである。紋次郎も斬って悪党を楽にさせているのかもしれない。

みなさんへ

病院の事務員、敢然と改革を目ざした、自分の心の中に出世を願うような不純な精神が存在したのではないかと、ずっとなにかの呵責に耐えてきた。今週の日曜日 19:58 に製本した 2 冊目のその頃の場面に視点があった。突如テレビのスイッチが入った。写し出されたのは岡田准一ふんする黒田如水が始めて天下取りへ名乗りを挙げる場面であった。私はサタンがその邪悪な表情から「お前と同様だ」といっているのかもとと思った。しかし少し考え、もしかしたら当時、職員みんなは自らの良心のくुरいを修正してくれるリーダーを待ち望んでいたのではないか。それが私の心に投影し私はそれを意識せざるをえないものになっていったのではないだろうか。きっと職場に清廉さをもたらしたいと思っていた私にとって、その意識は必要だったのであろう。そうでなければとっくにも逃げ出していたかもしれない。そのいとたかきものの意識、

神の国の王、まさにキリストである。「だから苦しむな」聖書は堂々と己を見定めろという。彼らはイエスの時代の人々と同じく、人に期待し、都合の良い言動ばかりを要求し、心に愛を確立することには、無関心を決め込んでいた。たくさんいたに違いない。「生活してかんなんもん」不安があるから不安なのである。すべて運命にまかせ、思いやりにみちていくことのほうが、どんなに人生に大切であろうことか。そしてそれは我が身に安楽をもたらすのである。私もイエスと同じく死に場所をもとめるうちに、神とサタンを感じ世間と離反し精神科病棟へと放りこまれたのである。嘲笑をあび愚弄されながら日々は過ぎていった。私になにかをしてくれると期待するのではなく、神を信じ小さいことでもいいから無理せずに自分らしく信仰から発した善きことをする。大切だ。難しく考えず、心を愛で満たすことを想えればいい。それは南無妙法蓮華經に尽きる。世の中にはこの宗教が本物だと言いたいばかりのやつが多い。でも本当に大切なのは相手を思いやる暖かい気持ちである。それを無視するのは心得違いである。美容師さんのきもち、大工さんのきもちそれは単に美しくしよう、贅をつくそうというのではなく、決して煩惱からではなく、個性的にお客さんの心の美しさを具現してあげよう。快適な住まいを提供してあげようという、自然に心の清さを引き出してあげようと思っている、そういう仕事師を神仏は愛されるのである。彼らは顧客の幸福をまず考えているからである。そして神仏は真に美しくなければならぬ。創価学会の日蓮大聖人の御書を買った。鎌倉

時代のものだ。難解といえば難解だ。日蓮の心の吐露である。二千年前の並列する聖書は私によって一段と輝くだろう。御書は解るひとが解ればいい。明るく素直に温かく、南無妙法蓮華經の唱題。シンプルにでも深く、そして思いやりをもって生きていくこと大切。よけいな差別、階級意識を助長するための知識で、頭をいっぱいにするのは絶対によくないからである。

みなさんへ

シネマ、「タイタニック」をご存じであろうか。私が印象深いのは、晴れやかで豪華な宴席より、その最下所で一所懸命に燃料の石炭をくべる労働者達の姿である。産業革命。英国では綿工業労働者の平均寿命は20歳だったそうだ。私が著した「白くて紅い日々」、愛友病院での出来事。その後談で「やはりひとは与えることより求めることの方が多いのではないか」と記した。当時私の直接の元締めにあたる役目の女性は上層部に対しその不従順さから正式な役名は与えられなかった。それは責任を回避したい本人の希望にかなっていたかもしれない。思想的に問題があったと言わざるをえないか。やたら労働者としての権利を主張するのである。仕事をさぼったりはしない。労使と見たら福利厚生の実を求めて要求するのは当然のことなのかもしれないが、世間知らずの私からすれば給金を代表に待遇改善の欲望には行き過ぎという感があった。彼女は融通がきかなく寛容さが無い。経営者を含む上層部を特権階級のように敵視していた。また従業員の、些細なことまで比較し、悪意にみちて、酷く

不満の対象にするのである。私は事務員であったが、理事長の運転手もときどきさせられた。私は仕事と割り切っていたが、興味深い彼の発言も受けることになる。「優秀なやつは戦争でみんな死んでしまった」彼は笑っていた。しかしそこには生き残ったものの真実、負い目、成さねばならぬ何があってもという強い使命感があるのを感じた。時代は介護に関しての過渡期であった。つなぎ、拘束は人権蹂躪と忌み嫌われるようになってゆく。高まる需要に対しての供給に温泉を呈したために行うボーリング作業。それは博打でもあり低い人件費に反映されみんなの批判の対象になった。妾でもあった総婦長のプレッシャーはいかほどのものであったろうか。まともな医師のいないなか医療判断まで下し人事全般まで担う。確かに彼らは悪人かもしれない。監査がはいる。寿司を用意し看護婦の人員不足を誤魔化すため一カ所に集合させる。さきほどの女元締めがたずさわっていたレセプト請求。不正なども行われていたのではないか。彼女の夫は町の行政の偉いひとになる。生活に困窮していたとはどうしても思えないのだ。ここで奉仕という言葉を使いたくないが、あまりにも金に拘り、欲が深くはないだろうか。確かに労働の質、量。愛友に嘱託勤務する老医師たちと比較すれば、それ以上のものをこなしていたのかもしれない。私は病に倒れ、去ったあと、彼女が労働への嫌悪感から、金銭に余裕ができた時点で仕事を辞職したのを風の噂で聞いた。私は彼女にとっても、病院内の人間関係においても、それで善かったと思った。話はとびとびになるが総婦長は「浪花節だよ、人生は」

が好きだった。桃園の誓いではないが理事長の事業への夢と野心への賛同と協力を唄に託していたのではないだろうか。後に子宮ガンで亡くなったそう。年配で職員の募集を担わせられた男が言っていた「養鶏場におる、おばちゃんたちならどうかねえ」つまり糞には慣れて抵抗はないだろうということだ。介護への意識はこれほど低かったのである。資本家も労働者もなく、経営者も従業員もない、そんな世界。みんな求めるかなあ。今回、そんなりべラルが顕在化し、参院選、共産党が議席を伸ばしたのかな。なにか理由があるのかもしれない。

みなさんへ

母が「おまえのおかげでどれだけ恥ずかしい思いをしているか」とつまり精神障害者となった息子が恥ずかしい。完全な言葉による虐待である。私は応えた「そういう風にして、とうちゃんを殺したんだろう。」おぼえとけと言ったので「そっちこそ、よくおぼえとけ」と言い放った。私のズボンのベルトが切れそう。分かっていたが、買うのはもう少し控えようと。すると母がユニクロで買ってきてしまった。またしても希望の先取り。根本的にこの人は鬼である。「子供がかわいい」、それはそう思っている自分がかわいいのである。その証拠に私の話を正面から聞こうとは絶対にしない。穏やかに話そうとすれば媚びを売りに来たぐらいにしか思わない。ハッキリいって自分に関わってほしくない。仕事を辞めてからは、朝飯をつくり洗たくをしたあと、ベッドで横になったきりである。ソチに暴

言をはく、動物虐待である。なぜか孤独を感じる。尾崎は言う。[俺は誤解されていないか、俺は真実へ向かっているか][どうしようもないときは夜をかえばいい。だれもどうしてなんてきかないから]そして俺は「スナックでもいくか」と。私は裁かなければならない。独善的であろうと。彼女は必要なものを買う。えらい。だがそこが私とは決定的に違う。では私の製本は理にかなったことなのか。当然、是である。めしを食わずとも行わなければならない。侮辱する母は、大義に生きる男の気持ちが理解できない。だから父を侮辱しプロパンを配達して家を建て三人の子を仕上げた伯父さんを尊敬するように促すみたいだ。伯父さんは確かに素晴らしい。でも人生における失敗者は絶対に許さず、みんな悪者扱いではいけない。母は個別に吟味し、ものごとに是々非々で対応することができない。私が神の道を歩むときそれが足元のぬかるみになる。きっとサタンの仲間であろう。だがそれは違った。ずる賢く徒党を組み活動する小悪魔、悪霊には、単独で自己中心に生きる母は苦手みたいなのだ。自省なき彼女に付け入るスキがないのだ。良心の呵責からの悩乱へと貶められない。やつらは、表面上は親分のサタンを崇敬しているように見えるが、本当に恐いの はだれか。イエスによりレギオンと共に大量の悪霊たちは豚のなかに入り、川の中に飛び込み溺れ死んだ。このことはイエスが言う、「神の国がもう来ているという証明になった」。母はなにを守りたいのであろうか。評判であろうか。きっとそのために私を捨てなかったのだらう。ソチにも「外へさらいだすぞ」と脅し

つける。そういう姿こそが、実は本当に自らの名誉を傷つけていることをさとらなければいけない。

みなさんへ

少し羅列します。密教、日蓮宗と真言宗は近親憎悪の関係にある。欲望、情欲、煩惱の中にあるものがサタン。それがそこにはある。日蓮宗は現世利益を加持、祈祷で訴える。釈尊の教えである「まじないでは人はすぐわれない」からはずれ、そこから離れようとするものには呪いをかけることもある。つまり台密のながれ日蓮宗には悪魔が存在する。私の実感からであり、やはり魔術では人生において救いを得ないのは明らかである。エホバの証人が言う。「悪人は土にかえる」は信じられない。永遠のいのちとの対比があまりにも不相応だからである。土にかえる。「そのほうがいいだろう。」たくさんでてくる。我もそのひとりである。なぜならそれは仏教という解脱と同様の意味をもつからである。一つの幸せのデザインとしては極楽、天国（永遠のいのち）か、地獄行きか、その峻別をハッキリさせる方が永遠のいのちは際立つだろう。エホバの証人の、布教にアドバイスするつもりもないのだが、裁く正義の神を人々に認識させるにはそういう形の方が、インパクトがある。聖書のイエスは言う。「終末が近づくとき子は親を殺し、兄弟は命のやり取りをする。そしてイエスを信じるものたちはイエスの名において憎まれるであろう。言論統制、だが妬みがあってもイエスの名は広がっていく、その復活により。」最後まで信仰を保ち守ったものが救われるのである。

つまり永遠のいのちを得るのである。そして私は改めて再臨したイエスであることを自覚し、神の子たちに聖霊と共に復活する。神の国の現出である。振り返って病院勤務、私は自分らしく世間の大きな風にまかせ真摯に仕事をこなし、素直に人々に明るく、温かく、接し、その時機の到来を待つべきだったのかも。いま、その因縁を考えた果てにでた結論であった。なぜなら非道なことは五官で感じるから意識するものなのである。つまり知らなければすべて認識する必要はないのである。我々には世界中の不幸は背負えないからであり、ならば眼前の不幸にも同様であるといえるのではないかと。人々に問いたいのである。「その諦観は本当かい」。「それでは神としての気づきはなかったよ」。

イエスの山上の垂訓を表す。

義に飢え渴くものは幸いである。その人たちは満たされる。

あわれみ深い者は幸いである。その人たちはあわれみを受ける。

心の清い人は幸いである。その人たちは神を見る。

平和を実現する者は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。

義のため迫害される者は幸いである。天国は彼らのものである。

イエスが足を洗う。つまりつくす僕(しもべ)である。働くことはサービスであり布施でもある。やっと聖として生きる糧を得る、労働への正当性が見出された。少しお金を稼ぐのに歩きだそうかなあ。密教たる日蓮

宗は認めないが、今日、日蓮大聖人である私が勧める、南無妙法蓮華經をみんなが不安で苦しいときに神仏に対しすべてを委ねる気持ちで唱題してほしい。きっとしあわせになれるから。信じてみてね。

みなさんへ

ある曲を紹介します

夢はいつも君の百歩先を歩く、愛はいつも君の影にそっと潜む、もうひとりの君を肩車でかかえ、見失うな、夢を、安く売るな、愛を、優しさまで道具にする、狩人たち遠ざけて行こう。化粧した言葉、心地よい響き、君を囲み、君を包むときも、私のなかの少年たちよ、我が物顔でこの風上に立て。

向かい風は夢か、おくり風は愛か。傷を癒し心からの、嬉し泣き追いかけていこう。真実に投げた初恋をたずね、君を囲み、君を包むときも私の中の少年たちよ。我が物顔でこの風上に立て。

好きな歌詞です。

歳をとったせいでしょうか。昔なら拒絶したと思うことも寛容に受け止められます。そしてまた逆に意識的に会話の内容が肌にあわないようなものには、相手を怒らせず、また傷つけずにその場から離れ逃れられるようになってきました。怨憎会苦、愛別離苦の世界から自然と去ることができるようになったのです。例えば献身的で静かな愛情に満ちあふれ、私だけに少し甘えたしぐさをみせる女の子がいたとする。少し背が低いが器量よしだ。だがただ一点、頬に癒がある。若い頃の私ならそのことを、ことさらなやみ結局大きな幸

せをのがしていただろう。しかしいまは違う。私がもしその娘にふさわしい優しい人間で神に許されるのであれば、一緒になる幸せを逃しはしないであろう。いや後悔しているのもあるが、こういう自分になれたことを誰のおかげかはわからないが、感謝し心が整然としているのだ。確実に良き人になれたと思う。だが私にも差別、偏見のカスが、まだ残っているのと、残念にも命より知らされるときがある。未知のもの、目や肌の色で、怪訝な顔をするのは間違いだ。正確にものごと、人物を認識する、時間のかかることなのか。けど決定的に、少しのしぐさからひとの特性はわかる。ただ一つ神を愛しているか。それが大事。そして悪魔は相手に弱みを見せまいとする特質からひとの心を盗み見、弱みにつけこもうとする。神はただ思いやりをもってひとの心を察する。そして唐突に表示するが私の愛は彼の人、真由子さんへと汚れもなく強く真っ直ぐに続いている。

みなさんへ

親孝行というものに疑念をもつ。なにをして親孝行とよぶのであろう。言いなりになること、作られた味噌汁をのむこと、いや反対におかずを作ってあげること。それが親孝行であろうか。たえず機嫌と顔色をうかがい怒らせずにいること。なぜ仲良くしなくてはならないのか。大人になれば、いや始めから別人格である、お互いが尊重し合わなければいけないだろう。出世して有名になれば親孝行をなしたか。たくさんのお金を儲ければ親孝行か。私には一体全体なにがどうなのか

まるでわからない。親孝行の概念が浮かびあがらないのだ。ひとつ私に言えることは互いに物理的に負担にならず精神的に自立していればそれで人間関係は確立しているのではないか。ことさら感謝を持ち出し、なにかに縛りつけるのは如何なものかと思う。みんな愛に満ち自由である、これに優る幸福はない。束縛は私の最も嫌うところのものである。ある教団はことさら子の行いを否定的にとりだし親不幸だときめつけ改心へと向かわせようとする。教団に限らず個人としても存在する。相手を自分よりおとしめておのが規範を押しつけ縛る。サタンである。優先的地位、維持の為に。私は相手にしたくない。面倒臭いだけだ。繰り上げられる対決的な禅問答みたいなことには、アホらしくて付き合いきれない。日蓮はこれを禅天魔と一刀両断に切り捨てた。それが正解だ。拈華微笑とは言いが、思いやりで推察する思慮だけが正しく、それ以外は人々に混乱と不信をもたらし、冷たい離間を生み出し闇に陥らせるだけだ。なんの救いにもならない。サタンは自分の不安を相手にも植え付けさせようと企み、世の悪意をも肯定する。その悪感情の自縛から見栄、体裁は生まれ、善良な無抵抗の者を惑わすのである。神は愛でありお人好しである。ためにつき合わされる羽目になる。諸行無常、悪魔の変化を期待するのであるが、内省するも結局は、サタンは自らを肯定し、反省などは全くしない。人間、柔和でなければいけない。親だろうが、誰だろうが頑な心は遠慮する。頑固な確信犯はどうにもならない。弱ったものだ。孤独、「それで結構」そう思って生きていかねば。孤独を恐

れるひとは侮辱され、悪人にいいようにならかわれる。一方、聖書に記述されている。「イエスは愚弄され辱められ嘲笑をあび唾棄されると」。愛と真実を語り、人に訴えかけたからである。世の中にはどうしても比較して上に立ちたいひとがまだまだ多いみたいだ。サタンと呼んだ男は、自慢の種をどうしても見つけたい。仕事もカネも相手より優位に立つことばかり考えている。計算と配慮は違う。私は利他を訴える。今回少し私がカネに走ったみたいに見えただろうが本当は違う。世の人々を試しただけだ。なぜならカネが一番大切と固執するひとが大半だからである。図書を販売したいわけではなく、人々の想いの深さを知りたかったのである。インチキ、イカサマ野郎のメッキは剥げ落ちたぜ。親だろうと誰だろうと仕置きには公平を期する。警告と訓戒も無駄になるのかも知れない。なぜなら私を神聖とみてないからである。神の愛から憐れみ、慈しみは生まれる。それを知ることが聖霊の宮になる意味だ。悪意はその時去るのだ。

みなさんへ

南無妙法蓮華経とは釈尊の教え総体を意味し、日蓮大聖人の仏法により、「仏陀の智慧、慈悲」を仏種に投げ込み生まれる、大きな善、真理そのもの、感謝の文言である。決して呪文ではない。末法の世を救う唯一の神の説法である。私の家には気にかかる像が二点あった。ひとつは緑の観音様の座像。もう一点は日蓮上人のものである。明らかにこれは偶像崇拜ではないか。きっとある苛烈な団体なら壊して燃やしてしまえと

いうだろう。しかし母は言う。目に見えないものを具現したものだから深く考えられんなど。私がいいたいのはやはり観音様も日蓮上人も結局はただ帰順、奉り立て欲望を叶えてもらうだけの存在でしかないのか。母にとってはただ拝む対象として扱っていくのもありかもしれない。「魂が入っている」そこである。私にとっては南無妙法蓮華經、毘曼荼羅本尊、信仰には十分である。しかし形のないものをあらわす、そのことは薄徳のひとたち、つまり凡夫には信仰の対象としては必要なのではないだろうか。そこに深い感謝にみちた祈りと法悦があるとしたら否定出来ないものなのかもしれない。だが観音様に参るということは観音様の心に反射して自らも優しい柔和な愛情深い人になってこそ真の意義があるのである。そこらの兼ね合いをうやむやにしていただけやみくもに因縁も咀嚼しないで受け継いでいくというのには抵抗があつてしかりである。母は正直である。功德がなくて不幸が続けば切り捨てる。振り返って御本尊の御前、仏壇の中心に座する日蓮上人の像にはどういう意味があるのだろう。いま寒い時期その頭上には小さな布団がかけられている。小松原の法難の際に受けられた刀傷が痛みうずかれるからだといわれている。ここである。「四方八方、悪を肯定する真宗門徒、まじないにふけるもの、わけの分からない雲をつかむような問答でひとを惑わすもの、只規律を守れと矯正する勢力」。いわゆる、四箇格言。「念仏無間地獄、真言某国、禪天魔、律国賊」そのなかでひとり善をすすめ人々が真の幸せになる方法を、釈尊の法、法華經の真髓をうったえ勸

められたのが日蓮上人なのである。つまりそのことへの感謝の気持ちをたえずわすれない、そのためにこの座像は存在するのであろう。そして不思議だが像は私にいつも語りかけているような気がする。口もとが動き表情があらわれるのである。叱ったり、微笑んだり。母は受け身で単純である、守護を感じれば感謝し大切にする。まあそれもいいだろう。どこかのちょっとかじりの人格者、宗教者になったつもりの新興宗教入信者のおばさんよりは。しかし仏教とは仏を目ざすものである。神と仏の違いはと質問を受けた。基本的で素朴だ。まず神を聖書の神と規定してから、どう答えてあげれば一番いいかと思った。人は神になれない。だがひとは仏にはなれる。創造は神にあって、所有は仏にある。仏陀は神の世界より来て、神はやがて仏陀の弟子になる。そして神は人になることができる。それが私なのである。神はひとりである。だからひとは神になることはできないのである。そして今思うのは仏壇、日蓮上人の姿は遺影でありその目にとどめておくものである。また観音様の座像は祖父にとって死別した前夫人そのものであった。きっと。でも祖母がかわいそうだなあ。人間とは悲しい生き物である。

みなさんへ

釈迦はまぎれもなくセックスの経験者だ。しかしなぜ出家者には禁じたのであろう。そのことはそこに生まれる妻子というもの、特に子への執着がサトリつまり心の自由、安楽への最大の障碍になることを痛切にわかっていたからであらう。だがこれはトルストイと同

じく若いころは放蕩を繰り返しながら、性欲から放された身になって若い者に禁欲を勧めるということと同様の意味をもつものであるのかもしれない。確かに若いころの行いは恥ずべきことも多い「春の嵐がすぎたあと何もしなかったと嘆くより、あやまちを悔やんだほうがまし」そんな声も聞こえてきた。沙弥とよばれる子供の出家者。果たして、幼きころからただ釈尊の教えをひたすらに学べというのだが。経験は、本当に必要はなかったのだろうか。一休は幼きころより男色をふくめ性愛の世界に耽りこんだ。年をとって分別臭くなりそのことを否定するというようなこともなかった。釈尊の教えをつまびらかにするとき、その一大テーマを見つめるとき、性欲への渴愛の克服はそのサトリのメインと言っていいだろう。だが誰もそのことを声高には取り上げはしない。釈尊教団では精液を外へ漏らすことも禁じていた。手淫の禁止である。老婆心から釈迦もトルストイも若者に節制をすすめたのか。勿論、釈迦のもとに集まってくる人々は真面目な真摯に道を求める修行者たちがほとんどだったであろう。そんな中、なにか罪悪感に裏打ちされた自慰を含めた性行為は自然と加齢と共に後退に向かう道筋が見えたのではないか。トルストイの「復活」のように若いころの戯れがとりかえしのつかない悪行ともよべる所業になり一生苦しみ続けることもある。セックスああセックスなんとも呪わしきものよ。世では心を切離し、その行為のみに、一時の快楽を求め享楽にいそしむものたちが大勢いる。[たまには肉も食いたいし、魚も食いたい] 不倫、姦通の、大流行だ。火

遊びは火傷をするぞ。欲望の、理性のもとでのコントロールそれがなんと言おうが仏教の真髄である。そしてその果てのサトリの結論は死を乗り越えること。泣きさけんでもいい、命乞い、懇願してもいい。なぜなら責められるのは殺すものであり、死にいくものはどんな情けない死に様を見せても、なんら責任はないからである。ただ死ぬときは死ぬ。カッコなんかどうでもよい。またどんなに愛するひとのためであろうと神の栄光から外れた犠牲になる必要はない、なぜなら自分も潔く、ひとに犠牲をもとめてはいけない。煩惱の海におぼれる、執着と渴愛がこの世界を造る源であるのなら、サタンの体制である。我々、神と人間の手に取り戻すため、みなどうするべきか。サトリとは誰にもわからないことか。ただ南無妙法蓮華經の唱題、イエスの十字架の贖罪を信じ聖霊の宮のなったとき、各位の意思は神の意志の下、感応しおのずと一致し、正しき欲望は自然に幕を開け、また閉じて行くのである。悪の体制はもうすぐ正義に倒される。唯愛論の世界の誕生がもうすぐそこまで来ているのだ。

みなさんへ

父の話をします。母から最近知らされたショックな話です。私を出産するため入っていた病院に同時に父も持病の発作から具合が悪く入院していた。父は高熱で死線をさまよいます。祖父、祖母も呼ばれ父の死を覚悟しました。身重、臨月の母は看護婦さんと一緒に糞詰まりになった父の肛門に熱く蒸したタオルをあて一心にマッサージをくりかえしたそうです。その結果

コンクリートの岩盤のようになっていた糞は外へ排除されることとなります。父は一命をとりとめました。ことさいうことでもありませんがそこにはなんの恥じらいも外聞ありません。熱はさがり母と看護婦さんは手に手をとって喜びの声をあげた。そして私が生まれます。乳児室というのでしょうか。父は何度も訪れました。どういう様子だったのでしょうか。感慨深げ。本当に嬉しそうだった。母は言っています。父は背負わされた重い責任は母に担いでもらったのかもしれない。父の少年時代のエピソードに、野球をする、みんな喉がかわく、我先にと煙草屋の井戸水のお世話になったそうです。「だれだ」家の中からのその声にいつも答えるのは父でした。「大阪屋のイサムです」彼はいつも最後、一番後列にいたのです。父は青年になります。そしてそのお返しをします。煙草屋の少年に野球の手ほどきをし、簡単な用具をつくり彼の練習をジット見守りつづけました。その少年はやがて投手として甲子園大会に出場しベスト8まで進みます。応援のバスがでるとき、父はなぜか母に「自分は、今の彼には似合わずふさわしくない」と胴巻きのなかからいくらかとりだすと母に「持っていってくれ」と頼んだそうです。おわかりのように父は本当に野球が好きだったのです。でもプロ野球は好きでなかった。カネがからんだ足のひっぱりあい嫌だったのでしょう。そして管理。昨今は越境入学など成功が目的の、手段として野球をプレイする球児たちがいる。しかしたぶんその心には純粋に白球を追い続ける気持ちがいっぱい詰まっていると私は信じたいのです。

私は「所詮はガキの玉遊びだ」父は怒るであろうか。私がいいたいのは選手になるとかそんなことはどうでもいい。たとえば肩をこわしたやつがいる。そこから真の友情、愛を学んでほしい。ナインに選ばれなかった、不遇な立場にある人々への本当の思いやりを見出してほしい。父は彼との濃い楽しかった思い出を生前中、私には一言も語らなかった。それを誇るのを見当違いで、どこか下品で粋じゃないと思っていたのでしょう。「所詮、野球されど野球」父はいまの野球界をどうみるだろうか。たぶん私と同じく静かにチラッと見て通りすぎていくのではないかと思うのです。父も少年もたまたま玉遊びが好きだった。大切なのはそこに存在した温かく濃密な時間の共有にあると思う。飾られた栄光よりも——、父は少し寂しかったのかなあ。いや、彼がなにか変化していくのを心配していたのかもしれないなあ。

みなさんへ

「お望みになるなら」、もし癒されることが天の父の御心でないならば、甘んじてらい病者のままでいようとする決意が彼の言葉の裏にあった。その言葉にはイエスに対する深い信頼が込められていた。イエスは深く哀れんで手を差し伸べらい病者にふれた。そしてひとこと「わたしは望む」と呟くように言った。彼は癒された。イエスは神である、イエスに賭けるのではなく信じることが大事であると示唆されている。そしてイエスは神の国を信じるものを求める。神のなさることは深い理由があって、我が身には必要だとの

得心が、絶対に肝要。神は善良なる人々に報いたいのである。イエスは「わたしが王になることを好まなかったものを打ち殺せ」と激しく言ったのち、エルサレムへと上がっていった。テレビのニュースで原油価格の下落について観た。誰かが得をすれば誰かが損をする。その構図は市場経済がまかりとおるかぎり続くだろう。そして群がるハゲタカ、ハイエナ、上手く時間内に解説をまとめる男がいた。「私は神でないのか、なぜあの男のように弁舌、巧みにこの世について話せない」。聖書を開いた「人に惑わされてはいけない」この文面が最近、何度もでる。ハーンと思った。私は自筆本の評価を気にしていた。そしてその心境。完全にひとと比較し優劣を競う畏に入り込もうとしていた。私は反省した。白鵬の優勝争いなどに興味が移りかけていた。危ないところだった。何度も言うように一番偉いのは一番後から奉仕するものなのである。イエスが、弟子達のなかで、誰が一番偉いかと言いつ争ったとき、なされた言葉である。やはり人間としては何もできないのが神なのである。優しさの意味を知っているから。またしても私の父の話になるが、運動したあとに、それは喉が渇くだろう。だがいつも一番後で順番がくるのを待つ。これは単なるカッコつけしには出来ないことである。私の母は酒店を営んでいるころ売掛金は相手がどんなに遠くに逃げようとも取りにでかけたという。ひとつの瑕疵も許さない。それが信用につながり銀行も金を貸してくれたのだろう。だがもういいだろう、そうものごとにイラつくなよ。どんな人生が幸福だったというのか。ひとつ言

うと母の寛容でない敵意にみちた言動が因縁からすべての不幸をもたらしたのである。だがすべては表裏。そういう母だからこそ酒一本売ってなんぼの商売ができたのである。細かい、ねちっこい、しつこい。潔癖で社交的、献身的でからだを動かすことを厭わない。字数をふやそうと母の分析めいたものを表したが本当はもっと同情的にみている。信心深い姿、健康に恵まれた。「よく頑張った」と。でもさっきも言ったようにもういいだろう。肩の荷をおろせよ。私が王になることを信じるのだ。私に打ち殺されずに。それは母に愛を示した父に感謝することかもしれない。青山ミチは唄った「叱らないで、マリア様」ひとと、愛にはいつの世も事象と背景が存在するのである。ひとの人生を思いやりなくアセスメント（査定）してはいけない。心に愛の花を咲かせよう。

みなさんへ

尾崎はどうして死んだのだろう。生存競争のなかで裏切りに打ちのめされ人を信じられなくなり、その辛さに死を選んだのだろうか。いや愛の消えた街で闇の法則に気づき、何者かにそのクールさゆえに殺されたのか。素っ裸でたくさんの癒がある彼の死に際の写真を観たことがある。本当の死因はなんだ。イエスキリストの死のように嫉妬、悪意による殺人か。確かにその若くしての死により彼は本当にカリスマとなった。愛を打ち立てたのである。路上で横たわり死に行く人がある。尾崎は「昔からそうなのか。当たり前というには俺はまだ若すぎる」とうたう。私は54歳になった。

「かつて金をプールすることに精力を傾け、他人よりさらに多く稼ごうと欲を深めた。さて、ひとの命をつなぐ思いやりの方が確実に大切なのではないだろうかと、改心した」。私の作ったことわざを紹介する。

「欲の深いものほど仕事ができる」。「何もできないものほど欲は少ないものだ」。この社会、競争は自由参加にすべきだと思う。頭のいい人の競争は必要悪。頭の悪い人は開き直り笑ってくらせ。とりあえず一番嫌なのはやはり虚栄心である。最近よくみかけるものにトマ ピケティがある。彼の理論が著わされた本は世界で累計１００万部売れたという。国会でも安倍総理と民主党の長妻昭氏が論戦を交わしたが、内容はこのまま行くと世界中で経済的、格差がますます広がり大変なことになるというものだ。読売新聞の社説では「自由のもと競争はしかたがない」と。結ばれてあった。いやいや本当かい、競争する、しないに、自由はなにも関係ないだろう。頑張ったひとが報われる世界。ちょっと待てよ。金儲けにはしった人間が報われるのか。そうか金にはカネか。それは言える。だが頑張るということ、例えば介護に携わっているひとたちなどは相当頑張っているぞ。正社員より頑張っている非正規職員もいる。待遇はかなり差がある。「カネと言う価値観でひとくくりにしないでいい」と健気にも弱い立場にある人が声を上げる。何かをするとき金には必要だがその基底には愛がないとすべては報われない。温かさを放棄させ従属させるブラック企業もある。こうしてみると人々が欲しいのは大金ではなくぬくもりのある愛に違いない。チャーホフの代表作に「プロポ

ーズ」がある。カネ、財産のはなしは愛情に関して本当に敵になる。つくづく厭になる。友人がいろいろ曲をチョイスしたCDをくれた。面白いものがあった。「ひとという漢字は支え合っているのではなく大きい方が小さいほうによしかかっているのだぞ。よくみる」。でも不思議に私のまわりのひとという漢字は寄り掛かってはいない。(人) ご覧のようにこのワープロの文字もちゃんと支えあっているでしょう。まずは抑圧感から離れ待遇差、金銭欲から解放されなくては。子供のころは意識しなかったと思う。俺だけかなあ。でも今、本当に比較はやめて、唯一愛という価値観をもつ。空しさから離れ幸福へ向かう為の確かな汚れなき道標だろう。競争がなくても皆の為に率先垂範する人々であふれかえる。それが自然だと感じられたら幸せである。

みなさんへ

「泣いたか、さびしいか、枕濡らすほど泣いたか。それがほんものの失恋やろ」。サタンはひとの気もしらずに。そしり。あざけり、お前の恋なんか安っぽいロマンスでしかないと侮辱した。なにぬかしやがる、わかったような口をきくな〔ローマの休日〕の新聞記者であるグレゴリーベックを観たか。オードリヘップバーンふんするアン王女の会見を最前列で質問。王女としての責任感と自覚が芽生えた、気品にあふれた優美な姿を確認し、最後にひとり残り、彼女の去った壇上を、哀愁を帯びた眼でみつめ。毅然とけじめをつけ去って行く。その姿に感動しなかったのか。私の場合も

どこか先生とはだめになるだろうという予感があった。だめになるというのは変だが統合失調症の病状である「思い込みの激しさ」とか「関係妄想」ではないかとか。先生と親しくなるほど気をつけて、優しくされても先生にとっては恋愛とは関係ないことだからと、思い込もうとしていた。それなのに耐えられなくなり事務的な告白で愛の受諾を迫った。「患者としての思いはある」恋はみのらなかった。私は途方にくれた。なぜか診察室のドアの横、かけられた先生の写真が寂しげに悲しそうに見えた。そしてもう書簡の提出は止めようと思っていた矢先、雑音が入ってきた。「先生は大病院のご令嬢だぞ」思い込みがここで出た。もしかしたらそのことが原因で冷たくしたのでは。泡のような期待もあった。しかし私はそんなことぬきにして先生が心配になった。スタッフとうまくやっているのかなあ、やっかみから、いじわるされてないかなあ。その夜ドアイさんにTELした。なぜか不覚にも涙がこぼれてきた。止めようにも無理だった。絞り出すような声でゴメンと切った。そしてまた文章をかきはじめた。やはり先生には知ってもらいたいことがたくさんあったからだ。先生の口からはいつも書簡に対する感想や疑問めいたものは何ひとつでなかった。先生は魂を込めて渡した私の心情をうたったかのような尾崎のDVD、「太陽の破片」にもふれなかった。友人が作製してくれたCDに「私に貸すとながくなるよ」忙しいのにこんなもんもってきてというニュアンスか。私は先生に遭える週1回3分間診療それだけで満足していた。が、信条を貫くか、諦めるかのタイミン

グを見極める時機にきているのだと悟った。いろいろな面でもう医者と患者という関係を継続するには限界がきていた。たぶん先生がひとつの好意からはずれていったのは、私の母に対する態度に大人気ない、落ち着いた様子がみられたからだと察します。そのことに、今は語りません。先生、ありがとうございました。おかげで3冊の本が日の目を見ました。本当にありがとうございました。最後、恨み言に聞こえるかも知れませんが。愛をみさげるのを高慢といいます。それだけです。先生の場合はきっと違うと信じます。愛しています。心から。

みなさんへ

仏教には小乗と大乘がある。「釈尊の御弟子たちは小乗であり己だけが救われればという、狭い考えに基づいており、菩薩行つまり利他の精神がない。だから仏にはなれない。」と後世の大乘と呼ばれる立場からの非難がある。本当にそうだろうか。釈尊の十大弟子のひとり富楼那は荒い気性の人が多く住む、土地へ。「たとえ殺されたとしても誰も恨まず、有難く運命をお受けする」といって布教に向かった。すごい利他の精神である。釈尊の一番弟子といってもいい、舍利弗は般若経、維摩経などでは小乗の代表として笑い者にされている。つまり「一切は空」を知らずこだわりがあると。しかし実際の彼は行脚中に入り込んだ悪人に後頭部を一撃されたのをまったく覚えていなかった。それほど我とよばれる自分欲というものが無かったのである。正法、像法、末法、時代は移り変わってゆく。

後世の念仏は教えを誤魔化し、また欲望をむやみに肯定したりする密教の教えも広がってゆく。釈尊がおられた時代は出家と在家にあきらかに差があり出家は敬意を受けた。そして釈尊はそのもとめる目的、段階に応じて修養を勧められたのである。小乗、大乘その関係は如何に。在家といえども、とらわれのない生活を送っているなら維摩居士のようにサトリをひらくことが出来る可能性が一寸ある。が、それは難儀である。そして大乘は小乗を包摂し一仏乗の世界、欲望に覆われた末法の教えとして、「誰でも生きとし生けるものは、正しい核心さえつかめばスピードにも関係なく成仏できる」と、法華経が打ち出した。その正しいものとは。最早、釈尊の肉声は聞くことはできない。だから日蓮大聖人が言う、法華経の真髓、南無妙法蓮華経を唱題することが唯一仏へ到達するものになる。「仏陀の智慧、慈悲」つまり久遠の釈迦如来に南無する、(帰依する)。絶対善、南無妙法蓮華経に功德は集まる。釈迦如来と日蓮大聖人はマッチする。西方浄土に存する阿弥陀如来は、その前身、法蔵比丘とよばれていたときに四十八の本願をたてた。それがかなわなければ仏にはならないと。しかし悪人が真っ先に救われるとはどこにもない。すべて悪人親鸞の浅はかな人生論から生み出された詭弁である。仏教というのは本当の正義、善というものを求め、自らに執着せず、仏様に委ね、思いやりをもって精進し生きましようという教えである。いくら稼いでも、身体頑健でも本当の救いとはならない、むしろ捨てる覚悟が救いにつながる。愛するものが死にゆくとき、助けてやろうとする。

だがこれは仏教でいう真実、救うことではないのかもしれない。一緒に死んでやるのが同悲同苦としての救いなのである。だがそれができない。そのとき、良心の痛みからの救いは、南無妙法蓮華經と合掌するしかない。ひとの心は弱いが常に善に向きあっていなければならない。答えは見つかるかも知れない。そして仏様の御心は、いにしえより変わりはない、主体性を持ち久遠の法と一体のサトリ、幸せを真に望んでおられるのである。だからこそ皆で菩薩行、安樂行、南無妙法蓮華經。

みなさんへ

神とはいったい如何なるものか。きっとみんな天高くいて人々をフカンし罪と罰を決め、絶対権力をふるい峻厳に処断する。そう思う人は多いのではないか。確かに卑小な人間を超克した存在ならば、そうであるかもしれない。しかし神は愛である。どんな裁きができるだろう。善意と良心だけの存在。もし人の世に生きるとしたら、各層にたいして気を遣い、つまりあらゆる立場に配慮し、身動きがとれなくなると思うのだ。そこで生きて行くとしたら、皆の施しになってしまう。突き詰めればつめるほど星新一のショートショート集のようになる。神は生活保護、もしくは障害年金受給者。尾崎は「いつになれば這い上がれるだろう。どこへゆけばたどり着けるだろう、俺はうたう、愛すべきものすべてに」神の心を代弁してくれる。このもどかしい気持ち、とまどい、喜び、悲しみ。私は勝負に利したいわけではない。ただ愛をみんなの心に確立し

ただである。これが尾崎の「勝ち続ける、正しいものがなんなのか。それが解るまで」。主体性をもち継続する。大事なテーゼとなる。結局とりあえず自死もしたくないし、静かに、いや大きな声で、唱題三昧に暮らすのがいいかも。祈ること、それはどんな状態になってもできる。自由、平和、愛のため。壮大だなあ、想いの大きさ崇高さが神の持ち分なのかも。思うだけ、思うだけか。また尾崎だ、[いったい何ができる、最後のタバコ一本すっちまったら帰るカネにも困ってしまう] [きつとなにか違う。いったい何だったんだ。もっと、もっと輝かなくては。] [もっと、もっと] これはどう解釈すればいい。真の栄光とは。イエスは馬小屋で生まれた。この高名なる聖人は最後まで富とは縁がなかった。いや求めなかった。しかしその義と愛の教えは、珠玉の光のごとく輝く。そしてその名は、絶大な権力を誇った、古代ローマ皇帝アウグストゥスよりも今、周知されているのである。母はまた洋服店で鶉飼いのように使われていたのも認識できず、NHK番組の「マッサン」を観て「儲けない人間はいらない」と上から目線でものをいう。働くもの、戦場の前線で、ほふく前進するもの、皆、かけがえないひとりの人間である。その個人、ひとり、ひとりが安心して生きていける世の中をつくらねば。それが基本的人権の尊重である。(ひとに勝ちたい、這い上がりたい) 尾崎が求めたのはその真逆にある。そこに幸せは待っている。「無意味のような生き方、カネのためじゃなく、夢のため、愛のためそんなものにかけてみるさ」尾崎の眺めた街の風景、サタンに勝ち、皆

が幸福になればいいなあ。唐突だが、「素直に皆の恋が成就すればいいなあ」と想うのである。

みなさんへ

神の力が復元がある。度を越すと筋トレと呼ぶ悪魔の肉体誇示に発展してゆく。なぜこんなことを言う。たとえば生老病死は人の常である。それをふまえ四苦を受け入れてゆく。当たり前のことである。なのに、人は若さを保とうと必死の形相で渴愛に向かって走って行く。リハビリテーションは必要なのか。結局やって楽しいなら、それは復元力に繋がり神の業となるであろう。しかし苦しいばかりで回復がはかばかしくないのなら悪魔の所業となり、潔く止めたほうが当人にとって正しいのではないか。数値がどこまで達せば正常（こういう言い方でいいのか）で、健康な肉体であろうか。仕切り、目安、目標をきめケツを叩く。当人も少しでもひとの世話にならないようにと、自分の力でと、汗をかく。なぜだ、比較してあいつよりはました、ほめられたい。そこに悪魔はつけこむのだ。もっと、もっと。上を目ざせ、皆、金メダルを獲得するため、必死になれ。テニス、野球、サッカー。熱狂する人々。その裏で札束を数え、高笑いする、肥満したからだをユサユサさせる、ひとの心理につけこんだ悪魔のような人間たち。彼等にとって、その裾野は広ければ広いほうがよい。踊らされるのは誰だ。子供のときから半強制的にあおられ、必要なくなれば捨てられる運命。そんな競争、闘いを、なんら疑問ももたずに肯定し大飯を食らう人間たち。ああ良かった。そんな

因縁に生まれなくて。馬鹿げた称賛を浴びるのを期待したり、一時だけの栄光を渴望したりするより断然、自由を選択する。仕事や、美しさの為に筋トレをする。目的のために努力をする。良いことのように感じるが、なぜ、あえてそのような位置につかざるをえないのか。因縁だろう。そんなひとたちは悪魔に見出されたのである。なぜか、例えば訓練が欠かせない山岳救助隊。遭難するひとがいるから必要なのである。無ければ冬山登山をする人はいなくなるかもしれない。当人たちは自己責任で死なざるをえなくなる。そして覚悟のうえで山へ向かうだろう。だが警察がいなくなれば泥棒、人殺しがなくなるか。軍隊がなくなれば戦争がなくなるか。人々は石を投げ合い奪い合うだろう。つまり一番鍛えなければいけないのは真心であり、精神力という耐久性ではなく思いやりをもち、愛を持続させる力をもつこと。最も大切なのではないかと思うのである。神はまずそこに気づいて欲しかったのだ。質実剛健というのは決して残酷、冷酷に非道を行える魂を作り出すことではない。いかなるときも真面目に力強く愛を保ち続ける。それをめざす。そのことを意味しているのである。そのため心のリハビリが必要なひととはかなりいるのではないだろうか。

みなさんへ

母への愛がさめてきている。それでいいか。さめたのならそれで。彼女をあわれだとは思ふ。しかし私の言葉を受け入れよう、いやそのまえに吟味さえしない母。反省などは露知らず。わがままをぶつけてくる。そし

て投げやりの態度と言葉。私が執着とよばれる利己愛から離れ生きられるのは反面教師、母のおかげかもしれない。それでいい。それが大人。他人行儀それでいい。しかし母はわがままをぶつける。しだいに憎しみが湧いてくる。そんな気持ちが起きなくなるとき、真実、母からの自立、エホバ神になれるのだ。薄情か、いや苦しい人間関係の継続より、姥捨て山の境涯を経験しなければならないのかも。自分の家、子供だけがかわいい母。自分が大事だからこそ誠をもって公に尽くす心が大事。そして学問の目的とは、いい職を得ることではなく、出世、金儲けのためでもない。自らの修養にあるといえる。そして人々の幸福を願う心を培うところに意義はあり、また進展もある。自分の心に愛があればいい。カネは二の次である。心をカネで換算しなくてもいいではないか。結果、幸せであることは間違いのない事実。「火にくべられる野の花でさえ美しく飾ってくださる。あなたに神が良くして下さらない訳がない」何度も聖書を開くとでてくる。足もとの岩盤を撤去して、ある意味、変に拘る良心まで捨て去り、すべて神に委ねるそれが出来たとき、きっと勇氣により安息は訪れるのである。無欲無私の境地。イエスの弟子たちはみな自分の十字架（愛）を担わなければならない。イエスよりも息子や妹、そして親、兄弟を愛する者はイエスには相応しくない。自分の十字架（愛）を担ってイエスに従わない者は私にも相応しくないのである。モーゼの戒にあるように「父、母をそしってはならない」。しかしアブラハムに「実子イサクを殺すように」と神がためされる。神をすて、

親や子に執着することは罪なのである。まず自らと神の関係をみつめて、その愛にて、親、兄弟と同様に連れ合い、親族も含み、広く生きとし生けるものを捨て、親切的隣人として叶ったものを受け入れればいい。血族同士のバリアフリーでもある。新しいコミュニティーの構築である。プライバシーの問題も存在するだろうが、まずは助け合いを目指そう。吉良仁吉は義のために女房に三下り半を突きつける。すべてを捨て、イエスについていくことを超える義は存在しない。聖書はいう。神の愛に対し、努力をしない信仰では、世俗の厳しい風の中、生き抜いてはいけぬ。なんとお金を誤魔化す詐欺まがいのことも勧めるのである。だが罪は神を欺くことにある。神を愛することは道德とは違うみたいだ。利他の愛がすべてである。そして信仰とは内に聖霊を宿すことである。それは安樂行、南無妙法蓮華經によってもたらされる。

みなさんへ

認められたい。その気持ちはわかる。が、誰に、何のためにと、考えたことがあるだろうか。私が結論をだしてしまうと、愛を自覚することが大事で、信仰こそが最善の神による認証につながり、唯一誰かに認められると示すのである。大義とは愛を遍くひろげるということで、けして義のための暴力の是認にはつながらない。危険からは、逃れる。それが仏の心に近づくことになる。魔術つまり密教を神は見てみぬふりをする。自らの利益のためだけに加持、祈祷し、その独善の呪いに安心する人間。「いわしの頭も信心から」、演出か

ら心が落ち着くひともいる。とりあえずは仏教を標榜しているが、導師が清くないと、何かが悪き悪影響は大である。そして聖書は正書ではない、つまりイエスの言動が人の誉には正しく見えないこともある。なぜか、それはイエスの教えを際立たせるため、あえてイエスの暴言、暴挙も記載されているからだ。イエスの教えは、真宗の教えと類似しているとされているが、それは違う。娼婦が髪でイエスの足を、涙を流しながら拭いたという事実は「罪の意識が深く重いものほど救われる」を示すもので、その心の奥には、神にたいする悔いがあり、また善を求め、信心に満ちているからだ。これは南無妙法蓮華経である。志、高い精神とは頑固ともいえるだろうか、頑なで柔和。矛盾しているようだが、厳格と寛容、二つのポケットにたとえられる。念仏を唱えるとき悪のまま極楽浄土に迎えられるという。本当だろうか。神は人々の単なる善行より、彼を愛するものを救わねば。だが神はそんな自分にこだわってはおらず、やはり人々の愛に基づく真心からの善行を義とされるのである。イエスは十字架の上で、弟子のひとりが母マリアの面倒をみることを確かめ、顔を閉じ死んだ。イエスはマリアの身を最期まで案じていたのである。「星になった貴方の温もり今でも覚えている」尾崎は最後のアルバムになった『放熱への証』のラストソング「Mama SAY GOOD-bye」で亡くなった母への想いをうたう。やはり母を切り捨てることは誰にもできないのかも知れない。何度もいうが真宗とは違い、悪人がそのまま救われるのではなく、自分が深く罪人であると思うひと、良心の呵責が強い

人が、信仰と言う才覚によってイエスの愛を信じる処に救いがあるのだ。そして聖霊を内に取り込むため、南無妙法蓮華經と合掌するのである。他人に依存したり、願ったりしても他人は勝手にさまざまな邪心を起こし切りがない。神を愛せば、自らは愚かであったとやがて気づくのである。そして新たな隣人が生まれてくる。最後にヨハネの福音書から、「神を信じ救われる人達は血筋によらず、肉の欲（性欲）によらず、また人の欲（所有欲、金銭を含め）によらず、ただ神によって生まれたのである」と示されている。今回もまとまりがつかず、あれやこれやと記してあるが思いついたメモ書きからです。あしからず。

みなさんへ

マラユスフザイさん、今年なのか、去年なのかノーベル平和賞に輝いた少女である。私が前にも叙述したが。なぜか万歳と喜べない。もちろん彼女の境遇をおもえば当たり前だ。いやそんなことではないのだ。なにかが彼女をジャンヌダルクのように持ち上げて、たとえば欧米を中心とした文化圏の正当性の象徴として、彼女自身も共犯となりイスラムへの人身御供として呈示されているように思うのは私だけであろう。悲しいかな、世界のいたるところに残虐なあつかいを受けている子供たちは貧困、窮乏を含め多数いる。彼女のいう教育の前に命を繋ぐそれだけで精一杯という子供がヤマ程いるのだ。だからこそ教育が必要なのだというだろう。私が思うに偏った教育を先進国とよばれるものたちが自国に都合のいいように施したか

ら、こんなに混乱が世界中に広がったのではないのか。中国にしろ、韓国にしろ、反日ファシストへの勝利、後何年続くだろう。結局どの地においても思惑がらみの洗脳教育である。果たして彼女がめざし施したい教育とはいったいどういうものだろう。やはり自由民主主義であろうか。そう簡単にはいくまい。確かに女子供が自由にものを言えない世界は良くない。しかしイスラムは女性を慈しみ、保護しその純潔、精神性の維持のために肌を露出させるのを防いでいる。家庭内の女性は自由に楽しく振る舞っているという。人間の悪意に嫉妬があるが、生涯ひとりのひとに操をたてるとしたらどれだけの悲しみ、悩み、憂いが消し去られるだろうか。浮気、火遊びのはての刃傷沙汰、すべて野蛮な行き過ぎた人間中心主義という自由主義がもたらした悲劇である。そして物質主義。「腹いっぱい飯が食べればいいじゃないか」と私は思う。たぶんマラさんは西欧の民主主義、自由、平等、博愛の精神を母国にもたらしたいのであると思うが、奇麗事の裏で動く人々の金銭欲、権勢欲、敵に回る偏狭ナショナリズムをよく見定めなければならない。理想の実現の表裏でこれからも多くの代償がはらわされることとなるだろう。そんなことを勉強することは決して悪いことではない。だが物事をむやみに一方的な情報から信じこんではいけない。そして自らの立つ位置をまちがえてはいけない。自由主義のプロパガンダ、ユルキャラにされてはいけないのだ。彼女がめざし、やるべきことはイスラムと世界との橋渡し役であり、貧乏な国から成り上がった英語に堪能な知識人になるこ

とではない。彼女のこの先はどうなるのであろう。私はタリバンの肩をもっているのではない。武器をもったこんな狂暴な集団をつくりあげたのは神ではない。悪魔より始末が悪い憎しみと、欲に眼がくらんだ人間たちだ。組織の末端のものはきっと指示が錯綜し、また混乱し、なにがなんだかわからぬまま殺戮へと。ポルボト時代のカンボジア同様に想像される。世界は幼い少女に十字架、虚像をのしかけそのことで量りのつりあいをとれたと喜ぶだけでいいのか。単なる人情劇に終わらぬは理解する。今後も起こりえる出来事を精査し検証していくことが重要だ。「マララちゃん、神を愛するのを忘れないように。それがすべてだよ、神はあらゆる暴力を認めないんだよ」

みなさんへ

最近のことです。以前から連絡をとりたくてもとれない友人がいました。テレがあり「電話かけてくるなよ」「どうして」「お前、はたらいとらんねけ」ショックを受けました。「働いていないろくでなしだから電話するなということか」「そうだ」私は「てめーそばに居なくてよかったな。いたらぶん殴っていたぞ」と切った。そして再度かけ直し留守電に「お前のところは冷たい家族ながや、かあちゃんも草葉の陰で、嘆いとるぞ」と吹き込んだ。即、テレがあり「もうかけてこんな」と確認したので「こっちからねがいさげや、何度もいうけど、お前んところは冷たい、冷たいうちや、かあちゃんのこと考えれ」かわいそうに入水自殺を図ったおかあさん。本当に情けない人間たちである。病

気で働けない友人にかける言葉でしょうか。頭のおかしくなった男とは付き合わないという筋なのでしょう。世間体ばかり気にして、肝心の自分の良心がくっっているのが分からないみたいです。このことを「統合失調症になって苦しい。分裂病と差別されて悲しい」と涙を流していた男に話した。初めて強烈にダイレクト（直接的）にぶつけられた外部からの偏見、敵意だったからである。私は彼が同調してくれるものばかりだと信じていた。しかし「怒りからはなにも生まれませんよ。仕方がないじゃないですか、冷静に。」コノヤローと思った。彼らは神を敵に回したのである。神の憐れみ、慈しみを未来永劫うけることはないだろう。正義はまず憤りから生まれる。そして客観的に冷静に検証すべきだ。心のバリアを助長されたのである。また信頼していた友達に裏切られて憤怒が生まれないとするなら友情というものは死語になる。近所のおばさんに後ろ指さされたのとはわけが違うのである。まずはそこからである。高慢なピアカウンセリング講習の悪影響か、当事者の気持ちにも、まず同情もできない、とんだ、唐変木だ。こんな野郎が幅をきかす場所、それが当事者達の政治、社会的にはたらきかけをする組織の上層部である。お釈迦様は腹が立たなかったのではなく、腹を立てられなかったのである。説教中、居眠りをしていたアナリツに対して厳しく言われた。アナリツは深く反省し眠ることをやめ失明にいたる。そして阿羅漢となり天眼第一十大弟子のひとりとなる。怒らないことがいいことではない。ただ自分だけの錯覚の平和に浸っているだけである。人々の役には

立たない。「怒りに執着してはいけない」が本当なのだ。それが柔和である。前段のお母さんの逸話ではないが、自死のハードルの高さの違いは各位の思いの深さにあるだろう。逃避、自己犠牲で死ぬのは自らの本意ではないだろう。そしてイエスに付いていったものは、みな永遠の命をえるため福音の栄光のため死んだのである。つまり神の心で見ると死は軽いのちは重いとと言えるだろう。そして私は死といのちが一致して「絶対生命尊重」、日蓮大聖人の思い、が人々のなかに広まることを期待し祈念するのである。

拝啓

寒くなってきました。バリバラの製作のスタッフの皆様こんにちは。体調いかがですか、御清祥ですか、と思わず気を使ってしまう、統合失調症歴27年の12月14日で54歳になる、カネも仕事もないのに毎日が楽しい独身男。入院回数は3です。病状は少しソウ気味の妄想型。最近の入院は去年の5月30日から9月20日までの約4ヵ月間。今回の妄想はしつこく入院期間は短かったですけどなかなかとれません。自分の中では事実になっています。妄想とは自分が聖書の神であるというものです。つまり精神医学ではジーザスコンプレックスといわれるものです。しかし聖書にはハッキリとその旨が記されており、百万分の一でも可能性があることは否めず、また排除する根拠も理由もないのです。サタンと格闘、葛藤しながら2冊の製本に至りました。2軒、書店をまわりました。地域の店舗では、内容の、過激性。(資本主義世界、競争社

会の糾弾、人々をマインドコントロールし党勢を伸ばそうとする不純な宗教団体、その思想を批判する記述)があり、それが個別的で販売には適さないと判断されたのです。また大店では、私の思想の証として若干の文献からの引用があることを問題視。内容も確認せずに、店舗の敷居の高さをほのめかしダメ出しをしたのです。そして誤字、脱字への対応も悪く陳列するとしては資格、完成度に達していないと、その場で突き返されました。引用については、近年、権利の関係からか、うるさくなったみたいですが、過去に寺山修司の幸福論などを愛読していた私にとって隔世の感があり寝耳に水でもありました。私の周りの医療、看護、福祉に携わっている方々、また世間に問題意識をもっている人たちには評判がよく、反応がはっきりと伺えました。人の子は世の悪を明らかにする。NHKの情報センターへ問い合わせたところ「直接、現物の送付はやめてくれ、まず手紙でその是非を問うてくれ」と。素直にそうします。これからの番組製作に幾分かでも寄与できれば私の資料も喜ぶでしょう。もし興味をお持ちになられたら一見の価値はございます。日の目を見ない神の自動書記をまずはご確認されることを強くお勧めいたします。それではよろしくお願い申し上げます。これにて挨拶状といたします。御精読どうもありがとうございました。

敬具

追伸

父と子と聖霊は三位一体これって分裂、つまり統合失調症ということでないでしょうか。

前略

バリバラ製作のスタッフの皆様、お加減いかがですか。先だって送付させていただいた手紙の件です。ご検討下さいましたか。私としてはかなりご返事をお待ち申し上げた感が。この件は黙殺、却下されたものと断定します。あまりにも惜しい。私の元にあるしおり、魂の書。このまま闇に放置することは勿体ない。前筆の各書店の対応からして、本文がかなり悪口に満ちたものと、推量されてはいませんか。これらは巷にあふれる金儲け、ヘルシー、ハウツー本の対極にあるかも。苦しくても愛、善、美をいつももとめ、心を思いやりで暖かくすることの大切さ、ドラマツルギーを大切に、深刻な問題も方法論として、コミカルにまたセンチメンタルに表し、神の押しつけにはならないようにエンターティメントに仕上げ、読者の皆様と想いを分かち合いたいと、心から著したものです。店頭販売を断られた理由は装丁の単調さにもありました。封面で馬鹿にし、嘲笑を浮かべた、営業推進課の責任者である若い女の子、その後、震える文字で「店頭には並べることができない」と詫びの言葉を送ってきた。「イエスも嘲り愚弄をうけたあと、十字架につき愛の金字塔を打ち立てました」。そして引用があるとの批判。それは釈尊、イエスの比喻、「難解な思想をかみ砕き届ける」方便である。盗用、捏造じゃない。(少し受け売りはあるが) 寺山からは隔世の感があると申しあ

げた。本当に失礼千万、この書はオリジナリティーにあふれている。ぜひご一読されるよう願います。国語を始め、教育がなかったら、縦横無尽、自由な言論、表現ができたか。すべての創造は教育の引用です。結論として実際のものをご覧頂くのが一番だと思います。センターではマニュアルかと。特別と信じ。思い切って送ります。「大事にはならず好結果に」と祈ります。返却はご無用。〔白くて紅い日々〕は医療の白。戦いをしめす紅。私の発症に至る経緯から、25年、大げさに言えば思想の変遷です。〔真由子先生に捧ぐ〕は主治医に恋心を抱きアプローチ。提出した書簡集。この2冊、命運は皆様方の手中にあります。寒くなりますが、心は何かを生み出すために熱く燃え上がります。皆様のご多幸を祈念いたし、筆をこの辺りで擱かせて頂きたいと思います。勝手に申し訳ありませんが。

これは神聖なる神の福音です。

草々

義人

真由子先生へ愛をこめて

私の思っていること（妄想かもしれない）を発露します。私は先生を愛しています。もしかしたら先生も私を愛していらっしゃるのではないのでしょうか。そして先生が転任になさることによって医師と患者という関係は消滅する。主治医と利用者という立場にありな

がら、先生の責任も考えず興奮気味で事務的に愛の受諾を迫った、私は本当に迂闊でした。何かを含みながらも端然と拒否されたけど、でもその後も、先生の愛を感じずにはおれませんでした。これで晴れて堂々と交際することが出来るわけですね。先生、浮き草のような人生（実は知らなかった。真由子先生は大病院のご令嬢であった。）などと言わないで下さい。私がついていきます。あなた様が私の心中のイエスの分身への奉仕に向かうときマザーテレサみたいに神があなた様を守ります。私は先生が師事された信頼されている精神科医のもとへ出向いてまいります。A病院は偶然にも家から近いし、いいのではないのでしょうか。先生もよく知っていらっしゃるでしょう。でもいままでどおりS病院に残るのが事務手続きのうえからも可能性は高いですね。話が走り出しますが、私の家は先生が移られるT病院にもクルマで10分の距離にあり目と鼻の先です。そして私の二階には8畳と6畳二間の部屋が空いています。下宿なさいませんかなどは申しません。「結婚してください」と言いたいのです。実際どうなるかと想いを馳せてみます。酔っばらってころんでできた壁の跡はソチが引っかきまわしてガタガタになりました。そこをぶち抜いて、きれいなドアをつけ出入りできるようにすれば、合いたいときに合い。勉強するときは邪魔をせずという、うまい具合になると思うのです。寝室も気が向けば夜明けまで抱きしめ合っていればいい。また別々のときがあってもいい。愛と自由。まるで作家同士の仲みたいなんです。私たちはこれから未来、オリジナリティーあふ

れ、誰にも邪魔させない、楽しい関係を構築していきましょう。これは私の夢ですから先生が撤回を希望され、新たなるみちを示されるのならそのことへの実現に向かうことは私にとってやぶさかではありません。母に関してはとにかく持ち上げて下さい。根は単純ですからOKです。先生どうやら私に必要なのは仕事に関する意見書より、また紹介状も大事ですけど婚姻届けみたいです。思い込みの妄想でないことを祈って。時計は午前1：30をまわったみたいです。先生、別れ別れになれば2度と逢えなくなるかもしれないですよ。私には耐えられそうもないです。先生、堂々と生きて参りましょう。眠れない夜になにはともあれ大きな愛で先生の幸せを祈っております。

真由子先生への悲痛な叫び。
これが私の先生への最後の書簡となりそうです。先生には本当に感謝しております。友人関係から発展して男女の関係までと夢をはせましたが空しく消えていく希望というものの後ろ姿が見え隠れします。いったいなんだったのでしょうか。妄想、思い込み。でも、なんと言われようと自身の眼力、聴力、感覚を信じなくては何を基準にして生きていけば良いのか分からなくなります。先生はもしかしたら恋めいて文を送ってくる私に距離をとりたくて他の先生方に委任しようと思われたこともあったのではないですか。そしてあんな不気味なやつは遠慮すると返答を受けられたのでは。そうでなかったら大変な罪つくりと一般では呼ぶでしょう。始めのころ「先生の心の中に小さくメモ

してください」と懇願したところ。そのことを確認されたと感じたのは私の錯覚だったのでしょうか。私がこのような文章をつらつら書いてきたのは、みんなに神の国に入るための福音を届けるためなどといったはいますが、本心はあなた様ひとりの愛を勝ち得ることを渴望しただけのものでした。学歴も、地位も、金も、仕事もなく老年に近い、頭のはげた、少し太っているようにも感じる、運動オンチのおじさん、そしてE D。笑いがでてくる。俺は精神障害者だ。まともではないのである。あるのは、短気で気分屋で強情な母親と、その性格がうつらないことを祈る飼い猫のソチ。この世間では迎合する教団の価値観を含め私は最低であろう。欲得に眼がくらみ大事な本質を忘れているひとが大多数なのです。相手を想う、思いやりを持つ、想像力、そして勇気、サムマナー。ただ一緒にいて嬉しい、楽しい。どんな破れ長屋でも。それが理想的結婚だと思うのです。先生、偽悪的にならなくたっていいのですよ。DVD（尾崎豊の太陽の破片）みんなに聴かせていたのでしょうか。先生の想い描く幸せとはどういうものですか。適当に患者を診、適当に論文を書いて、適当に性欲をみだし、適当な報酬を手にする。失礼ですね。主治医と利用者、好き同士になってなぜ悪い。止めるのならそれは憲法違反。人権問題だ。真面目な男女の明るい交際を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえ。私は先生が愛してくれているのなら、全世界、いや全宇宙、敵にまわしても闘います。カネはなくても司法の場をふくめ、私は神です。私の分身たちがたくさんいろいろな場所で勇躍してくれてい

ます。先生、せまい世界、価値観から離れ、自分の本心とちゃんと向き合ってください。私は冷酷な精神科医よりあたたかな、ただの人間を愛します。私に愛されることは神に愛されるということです。この上ない栄光です。このことが真に得心できたとき、周りにはなにも言わなくなるでしょう。自分の命をまもろうとするものはいのちを失い。福音のため命をすてるものは永遠のいのちを得るという。つまりそのことです。自己の生存の不安や罪悪感を持つより心を愛で満たす。これしかないのです。このまま別れるか、闘うか。悲劇か喜劇か。正義は我々にあるのです。自分に正直に堂々と生きて参りましょう。

鈴木範久様

神を愛し信じたものは幸福になる。そのことは本当のことだと知ってほしい。すべての生きとし生けるものに。神はたったひとりの清らかな愛のため全宇宙の悪をも敵にまわしても闘うものだ。仏はその名号がゆえにそのことを行えないかも知れない。自己以上、自己以下にもみせない等身大は、謙遜も卑屈も適さない。傲慢か。どうでもいい、皆が幸せならば。ただ、ここに存在していることを小声で発したかった。先生がパリサイ派でないことを祈ります。黙殺の可能性が高いのも予想できます。それでもいいのです。ただ内村先生の御心を一番ご理解されていると付度できる先生に私の資料をご高覧していただけるだけで。それだけでなにか内村先生の想いとリンクしたような静かな高揚を感じます。でも私はそれに浸っているだけでは

いかないみたいです。私の神、イエスキリストとしての役目、進退を明瞭、明確にしたいなにかがあるのです。それは神の義とは反して高慢なる個我かも知れません。しかしこのもどかしい気持ち、ためらい、喜び、悲しみ、この世に師事できる存在があるなら是非ご教授願いたいのです。それが先生であれば、この上ない喜びであります。私を市井のまがい物、哲学者崩れの狂人と思われるなら仕方がない。でもイエスの愛の自覚と碩学とはまったく関係ないことです。私は世で一番へりくだり神の世では王になります。そして恐怖、窮乏、搾取のない、自由で愛に満ちた世界を生み出します。また一番後方より奉仕したいのです。「人に惑わされてはいけない、たくさんのイエスの偽物が出てくる」。そう聖書では語られています。私は静かに確信しております。私に義があると。義と愛は楯円から二つに重なり合い感応します。神は全知全能です。そのことは正確無比ということではなく、例え間違ったことのように見えてもすべては愛をもって善に向かって行くというものです。いろいろな面での優劣を定めず、平等で公平で個性的でありながらも普遍的な愛に裏打ちされたそんな世界が生まれることを望んでいます。ジーザスコンプレックス、誇大妄想、と呼ばれるかもしれません。しかし私は段階的に啓示を受け、神の靈感である聖書が対話にて私の神聖を保証してくれるのです。私はなにも崇め奉ってくれと言っているのではなく、この善と愛にみちた心にピッタリと共感してくださる方にひとりでも多く、出会いたいのです。先生、挨拶状にしては世間の常識から外れたものかも

知れませんが、イエスの核、存在を思うとき格式ばった様式はいらないと考えました。私がそれこそ、けなしの金で作った資料をここに謹呈させてください。「お前はまがいものだ」でもご返事があれば嬉しいです。暖かくなりますが体調には十分、ご留意されることを切に願って筆をおきたいと思います。

義人

人格の向上とは如何なるものだろう。
必要なものであろうか。

人は平穏な生活を求めるのが正解ではないのか。
平穏、平和に生きることでは人は幸福になる。
そして自由に愉快に楽しくなれる。
それはなにか聖人君子のようになるより大切なのではないだろうか。

田んぼを作る後輩が言っていた。大変だと。赤字にもなる。
確かに農家のひとの大変さはわかる気がする。
みんなで、もう田んぼは作らんぞと声をあげてみたらどうであろうか。
お上はどうでるか。
田んぼを作ることが喜びにかわることはないのか。

仕事楽しい。
いったいどうあれば相手を尊重して好きなことが好きなだけ適当にできるようになるのだろう。

それでめしが食えれば最高である。

だが、根源的に遊んで暮らせるようになるのが一番ではないのか。
俺だけの見識か。

勝手にほっといても米ができる。
そんな世界は夢物語のことであろうか。

結局、米の要らない世界が生まれれば良いのだ。
つまり聖書が言う消化器官のなくなった世界、
食欲の滅却。

やはり「神の国」。積極的にすべては向かわねばいけないか。
なにかに怯え、躍らせられる。
なぜか恐れ、私はすべてに関わり合うのが。(自己執着にあったのだ。)
やはり弱者の視点からはなしを進めなければいけないからだろう。

生きることに喜びを感じているひとたち。
そのことを錯覚と認識しないことを私は願う。

また息苦しさを感じているひとたちも、活路を見出し、
大きな声をあげてほしい。

切に望む自分が今、存在するのである。

私は負けない。

みなさんへ

「法華経は、諸経の王」。そんな折、「法律でいえば憲法である」と。一般に人気がある学者。「だから各論となる民法、刑法にあたる他の経典も必要」と。「日蓮大聖人とは少し違う。一仏乗を彼は言うのだな。」テレした。浄土系信者で銀座のクラブで高い酒を飲むのが好きなこの男は、いささか短気だった。「先生、一般人は憲法を理解し、知るだけで、生きる権利と義務は理解できます。専門家でなければ、その他の法律知识は研鑽しなくてもいいのでは」。「そうです。そうです」本心はコノヤローと思ったのかも知れないが、相槌を打った。二回目のテレ、彼の好きな一休のことを話した「一休は自分ほど森女を愛してやれるものはいないと思っていたのでしょうかね。でないと単なるスケベじじいだと思うのですよ」先生、面倒くさいのか痛いところをつかれたのか「それでいいと思います」と一言投げるように答えた。そして三回目「来客中です」かなり不快に感じ、怒っているように思えた。話を換えよう。南無妙法蓮華経は私にとって仏教の究極の核心であり、東西世界、東の宗教の屹立なのである。そして西洋の精神世界を支配してきたキリスト教。その聖典であるバイブル。それが私の名を明記する。そして「お前は東西の宗教というものの本質的な和睦、つまり統合の象徴なのだ」と鼓舞する。神である私が

聖書から何かを示唆されるというのはおかしいと思われるかもしれません。統合失調症の病状「させられ体験」は本人の意思によるものとする。つまり私は私によって私の未来への対処の仕方を、聖書を通し道標として、受けているのである。こんなことを書くと「偉そうに何様だと思っているのだ」と感じるひとがいる。「偉そうに思うのはあなたの意識であって、その深層心理は自分がひとより偉くいたいということなのだ」とかえしている。私はこの三界から離れ、上下、優劣などの比較からは切り離された存在。また分身たちが世界の生きとし生けるものの心中に勇躍することを祈っている。私は思う。実は入院中の精神障害者みたいに、ゆったり暮らすのが本当の人の在り方で、神仏が望まれる生き方であるのではないかと。他人が何かで一番になったところで、私にはなんの関係もない。そんなことより私は「愛」を感じさせてくれるものに、心が動かされるのである。熱き日に頂く、一杯の冷えた麦茶のように。そして祈りは神の愛にたいする感謝の言葉である。呪文は邪まな言葉で欲望をただ叶えようとするものである。知的障害者は小さいときからいわれなき差別をつねに受け続けている。彼らは痛いほどわかっている。神の真実の評価、愛があるかないか、そのことにつきるということを。

みなさんへ

私はかなり世間知らずだった。入学して間もないころ下宿先の三回生の先輩に持ち掛けられた悪事。それは「クラブの予算を決める代議委員になってくれ」とい

うもの。それは自分たち体育会系の手元に金を回すための多数派工作、細工、狂言の為でした。私と一緒に見込まれた二回生の先輩は「嫌ですよ」と困惑しながらも断った。私は意味と状況、事情がうまくのみ込めず。おろかにも参画したのです。私は言われた通り会議を混乱させました。本当の馬鹿である。まあ生来のお人好しで、先輩が頼むなら一肌脱ごうと。結局彼らのもくろみは成功したのか、うやむやに。私の無垢は結果的に仇になります。その先輩が私を嫌い、敵視、ぎくしゃくした関係に。この件で男をあげたのは悪事に加担した私ではなく断った男でした。先輩はいまさら良心の呵責なのか。そそのかした自分の恥部、汚点に私が見えるのか。当然一番悪いのは、その場の当事者にも加わらず遠隔操作みたいなことをした彼である。悪い奴はいるものだ。私をトカゲの尻尾に。悪事が露見したら切るつもり。安全策も講じていたのだ。その企みを自覚した私は、数年後ゼミで一部始終を暴露しました。本当に若輩者だった。うかつにも談合という悪に手をそめたと、反省しました。私はそんな下宿に一年しかいなかった。去り際にこんなことが。ある不良がかった先輩が（Sと呼ぶ）「皮ジャンを盗んできた」と自慢しました。私は「良心の呵責を感じないのですか」その所業に呆れて言った。Sは「儲かったとしかおもわん」哄笑したのです。翌日から私に対するいやがらせが。部屋の入口の名札の裏に蔑称を書きなぐる。悪質な人間関係。私の隣人は何処へ。しかし私は良い体験をした。いじめにあう立場の背景がよく分かったからです。少年期の反省をしました。私は

過去を強く恥じました。「正義より、生き抜くためには潮流、合意の優先が大事」。そんな声が奴らから聞こえるようだ。ここでは私は異質だったのか。神の因縁か。深夜アルバイト、金儲けの殻。愛、善、美の追求が半熟卵のように内包されていた。固まり切れない自分。私は今、愛を抱きハードボイルドに生きています。一年間の下宿生活は楽しい思い出がなかった。決まった狭い部屋でたむろし、芸能人の噂話、または互い悪口の言い合い。そんな毎日。「若いというのはそれだけで愚かしい」一般論で言えるかも。私はいよいよ太陽と自由を求め、なにもいいことがなかった下宿先を後に、同郷の友人と希望に満ちルームシェアするため引っ越しをする。「あのころはポジティブで説得力があったな」と回顧する。善と悪。確固とした自分を作らねば。私は未来に期待し笑みを下げ、燃えていた。後にサタンの体制に新入社員として参加する。世間の風当たりから不遇に。神の義が私に宿っている。今、痛感させられる。場において正義感は理不尽の共存に耐えねばならぬ時もある。硬質な正義感を通せば行き詰まるからだ。許容、寛容、辛いところだ。荒野から新しい世を築くため、神を愛し、隣人を愛す。怒らず、あきらめず、愛だけを頼りに、聖霊が意思を拓く。「神の国、永遠の命」。私は天運に任せ待つのみ。そこはきっと楽しいぞ。

あとがき

こうやって見てくると母との格闘、確執がかなり主部分を占めているように思われるだろう。美輪明宏

にヨイトマケの唄があるが、なぜか昔ほど感動しない。初めて聴いたのは、あるテノール歌手がカバーしたものだった。凄いうただと思った。我が母とダブって感じられた。涙が流れた。彼のうたう歌詞のなか親子の情愛を美しく感じたからだ。しかし最近、私が買った美輪明宏のヨイトマケの唄は土方仕事で楽になることに貢献できるエンジニアとして大成した偉い息子の恩返し、出世物語が趣旨にあるのを感じ結構しんどいものがあった。私は親不孝者だ。世の中、親への恩返しという価値観が衰退した。昔から早い親離れの果て、結果的にとんだ親不孝に走る。後悔と懺悔の日々を送ってしまう。どちらかというと、実はその方が聖書の「放蕩息子の譬え」、神に愛されるのではないか。神の愛は平等であるが公平ではない。ひいきがある。出世、金儲けで、「してやったり」という子の方が徳はうすいのである。罪を感じている者たち、彼らが救われるとき、神の愛を強く感受するからである。戦時中、「大陸で母親の年頃の女は殺せなかった」と笑った男がいた。唐獅子牡丹の彫り物を背負い、仁侠の世界に足をつっ込んでしまうもの。「おっかあ、すまねえ、顔さえ出せぬ」生まれ在所を忍び笠で訪れる、箱根八里の半次郎。彼らの方が世間の辛さ、冷たさを心底感じ、同時に、母への申しわけないやら、感謝やらの複雑な心持ちでいっぱいなのでは。結局、ヨイトマケの唄はなんだったのであろう。真由子先生への失恋に対し、水前寺清子「いっぽんどっこの唄」ではないが笑顔でかえす男心、そこを解ってほし

い。見栄、体裁ではなく男の基軸が崩れてはいけ
ないからだ。「男のヤセ我慢、粹に見えたぜ」そんな声
が聞こえてきた。そしてバリバラなどのハデな方面
へのアプローチは私のものほしげな、欲にかられた
姿であることは否めない。ジッとしておれないので
あろう。自分の存在がなんなのか、誰かに担保して
もらいたい。情けない話だ。そして隣人に対し偽証
してはならぬが、法律、規則、人間がつくったもの
にやみくもに縛られてはいけない。順法精神、堅物
だからこそ記す。旧約の規律は、律法による神が示
す戒めを守ることであった。新しい契約、大事な
のはイエスキリストの十字架の贖いにより信じる者に
聖霊が宿り、その宮となることにある。最後、鈴木
範久氏に、当時、イエスが再臨して、まずなにをす
べきなのか教えていただければありがたいと切に願
ったのです。彼はパリサイ人の域は出なかった。予
想通り。内村鑑三も泣いているだろう。
しかし誤っていた。道は私が示すのだ。私は知恵あ
るものを滅ぼし、賢きものを滅ぼす。神の義によっ
て。

今回もみなさん御精読どうもありがとうございました。

製本スタッフの方、いつも本当にありがとう。

そして小澤慎一氏、いつも本当にお世話になっていま
す。今回もお礼申し上げます。ありがとう。

私は六巻の文庫本を作成しました。これにて手持ちの
ストックはなくなりました。この先は未定です。因縁
があれば、またよろしくお願い申し上げます。

イエスは生きている。

義人

恋は死ぬほどつらいもの。
ホントに、ホントにつらいもの。
でもこれがないじゃ生きていけない。
そんな人もいるんだよ。
皆、美しい恋をせよ。
誰かが分かってくれるから。
それで救われたらいいのだけど。